
女王キリエ

カイリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女王キリエ

【Nコード】

N3391Z

【作者名】

カイリ

【あらすじ】

修道女として育てられた孤児キリエ。ある日キリエの元にジュビリーと名乗る黒衣の伯爵が現れる。彼は、キリエが崩御した国王の庶子であると告げ、王位を継承させるために王都へ連れてゆく。しかし、王宮に到着したキリエたちを、彼女の異母兄レノックスの軍勢が襲う。ジュビリーによってその場を脱したキリエは、教会へ帰ると言い出すが、彼は思わぬ告白をする。

「国王には嫡男がいたが死んだ。私が殺したのだ。おまえを女王にするために」

異母兄弟たちとの死闘。隣国の侵攻。異国の王太子との出会い。大陸の覇者との対峙。
キリエは、数奇な運命に翻弄されながらも、王位を目指す。

第1章「ロンディニウム教会の修道女」第1話

息を弾ませながら、少女は古い石段を上がっていった。

修道女特有の頭布ウインブルを被り、質素な黒いローブをたくしあげ、一段一段上がってゆく。ようやく最上階まで上がると、そこには青い帳が降りかけた夏の夕空が広がっていた。見下ろすと広大な農地が広がり、仕事に勤しむ農夫たちの姿がちらほらと見受けられる。もっと遠くに目を移すと、ところどころ黒々とした森が広がっている。

少女は、おもむろに鐘から伸びている紐を手にとると力いっぱい引っ張る。殷々とした鐘の音が鳴り渡り、帰り支度をしていた農夫たちが作業の手を休め、祈りを捧げ始めた。少女も両手を胸で合わせ、一心に祈りの言葉を呟く。やがて顔を上げると、再び外を眺める。

彼女は、この鐘楼で鐘を鳴らすのが大好きだった。教会から出たことがない少女にとって、唯一広い世界を眺めることができるのが、この鐘楼だったのだ。もっとも、信仰の世界で生きること喜びと誇りを持つ彼女にとって、外の世界は憧れを持つと同時に恐怖を感じる世界でもあった。

少女は　まだ十三か十四ほどの年頃　、鐘楼の窓辺に手をついてわずかに身を乗り出した。大きなアーモンド型の瞳が興味深そうに農夫たちの動きを追う。彼らとは親交があった。農作物や生活必需品を教会に運んでくるのだ。彼らは朗らかで、自分の知らない世界の話をよくしてくれた。そして同時に、生活の苦しさや、今起こっている戦争についての不安も漏らしていった。

神聖暦一四九三年六月。アングル王国。

プレシას大陸の西に位置する島国アングルは今、大陸の王国ガリアの内戦に参戦していた。ガリア王リシャルに対し、嫡男である王太子ギョームが反旗を翻したのだ。リシャル王は亡妻の兄であるアングル王エドガーに救援を要請し、それに応じたエドガーは

庶子であるルール公レノックス・ハートを派遣した。

冷血公の異名を取るレノックスの数々の残虐行為はこの地にも伝えられていた。普段から暴力的なこの青年は無類の白兵戦好きであり、異国の戦争に喜び勇んで出陣していったという。この村から数人の若者がガリアに向かったが、それは名を上げるためではなく、出稼ぎも同然であつた。

少女が田園を見渡していると、一頭の馬が畦道を教会に向かって駆けてくる。急を知らせる馬か、かなりの速さだ。やがて馬は教会の中へと入っていった。何があつたのだろう、少女が不安そうに見下ろしていると、

「キリエ！」

鐘楼の下から声が上がる。

「いつまで鐘楼にいるつもりです？」

「はい！」

キリエは慌てて返事をする。と石段を駆け下りる。そこには美しい修道女がひとり佇んでいた。

「食堂の手伝いをしてあげなさい」

「はい！」

キリエが元気の良い返事を返し、食堂へ向かおうとすると、先ほどの馬に乗った若者が急ぎ足で司教の書斎がある建物へ向かう姿があつた。

「ロレイン様……。何かあつたのでしょうか」

キリエの問いかけに、ロレインが顔をしかめる。

「……悪い報せでなければ良いのですが……」

ここはアングル王国グローリア伯領のロンディニウム村。村に入ってくる情報はまず、この教会に伝えられる。アングルがガリアの内戦に参加することが決まった時もここに伝えられ、村の若者たちが次々と戦争へ出かけていったのだ。キリエはその時のことをよく覚えていた。

キリエは孤児だつた。教会付きの司教ボルダーの話では、十四年

前にこの村の近くで拾われ、ここロンディニウム教会に託されという。以来教会から出ることなく、修道女として暮らしている。戦争が長引けば自分のような孤児が増えるだろう。キリエは胸を痛めていた。

教会に持ち込まれた情報が明かされたのは、食事の準備が整った頃だった。

「皆、食事の前に話しておかねばならぬことがある」

陰鬱な表情のボルダー司教が低い声で語り始めた。キリエを初めとする修道女や修道士たちは、黙って司教の言葉に耳を傾けた。

「つい先ほど、王都イングレスから早馬が着いた。……国王陛下、エドガー・オブ・アングル様が、身罷られたそうだ」

その場にいた人々から驚きの声が上がる。エドガー王といえばまだ五四歳だ。

「昨年あたりからお体の調子が思わしくないと耳にしていたが……、まさかあの御歳で身罷られるとは……」

キリエは眉をひそめ、顔を伏せると手を合わせて祈りの文句を呟く。ひとしきり祈りを捧げ、顔を上げると険しい表情をしたロレインの姿が見えた。

国王エドガー・オブ・アングルはあまり人徳に優れていたとは言えない人物であった。数多くの愛妾を囲い込み、王妃であるベル・フォン・ユヴェーレンとは争いが絶えなかった。誇り高い大陸の大國ユヴェーレンの王女であるベルにとっては、愛人に現を抜かす夫に我慢がならず、王宮プレセア宮殿では陰湿な陰謀が常にはびこっていたという。

だが、そんな愚王にも長所はあった。教会や修道院、施薬院などには少なからず援助を行っており、貧困層にはそれなりの人気があった。地方の小さな教会に過ぎないこのロンディニウム教会にも、毎年かなりの援助金が入り込んでいる。

横柄だが陽気なこの王は、よく王都イングレス市内に出かけては薄汚い居酒屋に現れ、人々を驚かせていた。そして、その豪快さと

は裏腹に外交に関してはしたたかな面を併せ持ち、大陸の列強に対してうまく渡り合う技量を兼ね備えていた。現在の戦乱の世にあつて、小さな島国に過ぎないアングルが独立を保つことができるのも、一にかかつてエドガーの手腕の成果であつた。

「どなたが王位を継承されるのかはまだ決まっていないということだが……、今は亡きエドガー王陛下のご冥福を皆で祈ろう」

王位……。

キリエはぼんやりと考えた。あの悪名高い冷血公レノックスはエドガーの庶子だ。まさか、この男が王位に就くなんてことは……。いつにも増して重々しい雰囲気の中で食事が済むと、キリエはいつものように図書室へと向かった。この時間に聖典を読み、自習するのが毎日の日課だ。

「キリエ」

図書室へ向かうキリエにロレインが声をかける。

「今日はもう遅いから休みなさい」

「え、でも……」

「今日のあなたは……、少し疲れているように見えます。明日に疲れを残さぬよう、休みなさい」

キリエはきよとした表情でロレインを見上げた。自分では特に疲れを感じてはいない。だが、日頃から細やかな気配りができるロレインだ。自分の疲労を感じ取ったのだろうか。

「では、お先に休ませていただきます。おやすみなさい、ロレイン様」

「おやすみ、キリエ」

深々と頭を下げ、自室へ向かうキリエをロレインが黙って見送る。

「……ロレイン」

不意に声をかけられ、ロレインがぎくりと振り返る。

「……司教様」

廊下の角から、暗い表情のボルダーがゆっくりと歩み寄る。

「……ついに、この日が来たな」

「……はい」

ロレインが苦しそうな表情で呟く。

「こんなにも早く、この日がやってくるとは思ってもありませんでした……」

ボルダーも溜め息をつきながら頷く。

「……明日にも迎えが来るだろう」

「準備をしておきます」

「頼む」

ロレインは一礼すると、踵を返した。

翌朝、薪を納めにきた農夫がキリエに愚痴をこぼしていた。

「聞いたかい、王様が亡くなった話」

「ええ、昨夜」

農夫は手際よく薪の束を運びながら顔をしかめる。

「まだ五四だによ。しかも、お世継ぎを決めずに亡くなっちゃったんだから、一体これからどうなるんだか。インGRESじゃあ、商人どもが右往左往しているらしいぜ」

「何故？」

不思議そうな表情で聞き返すキリエ。

「そりゃあ、王様に金を貸していた商人たちが少なからずいたってことさ」

「お金のことよりも戦争の方が心配だね。ガリアの内戦から手を引いて下さるのでしょうか」

「どうかなあ」

農夫が頭を掻き篸る。

「ルール公はすぐに帰ってくるだろうな。そうなりや村の若い者も帰ってこられるが、あの冷血公は帰ってこなくてもいいんだがなあ。いつそのこと、ずっとガリアに残ってくれりゃあな」

「リシャル王は残って欲しいだろうな」

馬の世話をしていた修道士が口を挟む。

「そりゃ、内戦がまだ続いてるんだからなあ。アングルの他に援軍を頼める国はないし」

「レオン公国は？」

キリエの言葉に、農夫と修道士が目を丸くする。

「だって、確かリシャル王の弟君のお妃は、レオン公国の姫君ではなかったのですか？ レオン公国からの援軍は望めないのでしょうか」

「驚いたなあ、キリエ」

農夫が陽気に笑い声を上げる。

「そんなこと誰に教えてもらったんだい」

「ロレイン様に色々教えていただいたもの」

キリエが誇らしげに答える。

「他の教会区に移ることがあっても、恥ずかしくないようにって、ちゃんと勉強しているんですから」

「なるほどな」

そう返事を返すものの、農夫は腑に落ちない表情で幼い修道女を見下ろした。他の教会区に移るところか、キリエは普段教会の敷地内から出ることを禁じられている。教会を出るのは、秋の収穫祭の時だけ。他の修道士や修道女は積極的に村で奉仕活動をしているというのに、どういうわけかボルダー司教はこの少女を教会から出したがらなかった。

「しかしな、レオンはガリアの応援には行けないよ。ほら、レオンはエスタドの属国だろう？ エスタドのガルシア王はガリアが大嫌いだからな。宗主であるガルシア王の機嫌を損ねるようなことはしたくないんだろうよ」

「そうそう。ギョーム王太子が、ガルシア王の娘との縁談を断ったからな」

「そんなことが？」

「それでリシャル王が怒ってギョーム王太子をなじって……、で、内戦になったんだろう？ 迷惑な親子喧嘩さ」

親子喧嘩。親の顔も名前も知らないキリエにとっては、血の繋がった親子が国を二分する戦争を引き起こすなど、とても理解できなかった。父親に反逆したギョーム王太子とは、どんな少年なのだろう。

「それで、問題はこのアングルの次の王様さ……。ルール公だけは勘弁してもらいたいもんだ」

農夫や修道士が国の未来をああでもないこうでもないと言い合っているのを、キリエは黙って聞いていた。だが、教会から出たことがない彼女にとっては、どこか遠くの出来事を聞いているようだった。

現在、プレシアス大陸ではこのガリア内戦が最も大きな戦禍を引き起こしているが、戦争が起こっているのはこのガリアだけではない。キリエたちが信奉するヴァイス・クロイツ教の聖都クロイツはユヴェーレン王国の自治都市だったが、分離独立を宣言。その独立を許さないユヴェーレンとの間では五十年越しの戦争が続いている。さらに、ユヴェーレンは隣国カンパニウラ王国にも王位継承に横槍を入れ、戦争状態に突入して十年になる。

大陸にはその他、ポルトウス王国やナッサウ王国、ガリアの属国バーガンディ公国など、小さな国々が寄り集まっている。ここ五十年の間では戦乱が絶えず、長らく平和な時代が訪れていないが、ここへきて大陸の覇権を得ようと台頭してきたのが、大国エスタド王国のガルシア王だった。彼の父、先王カルロスがその土台を築き、息子ガルシアはそれを基盤に一挙に領土を拡大した実績があった。彼はプレシアス大陸の統一を目論み、ヴァイス・クロイツ教最高指導者ムンディ大主教と対立している。

「ああ、そうだ」

不意に、農夫が明るい声でキリエに呼びかける。

「悪いけどキリエ、おまえさんの薬草をまた分けてくれないかな。代わりに、うちで作ったチーズをいくらか持ってきたんだが」

キリエの顔が明るくなった。

「まあ、ありがとう！　どの薬草を持っていけます？」

その頃、教会の門に馬車の一団が到着していた。派手さはないが、明らかに高位の者が使う馬車の到着に、門番たちは困惑して立ち尽くしていた。馬車から一人の青年が降り立つと、恐々と歩み寄ってくる門番に名を名乗る。

「私はジョン・トゥリー子爵。ボルダー司教に目通り願いたい。クレド伯爵ジュビリー・バートランド様がおいでになったと言えば、わかるはずだ」

「クレド伯……？　しょ、少々お待ちを……！」

この村はグローリア伯領に属しているが、クレド伯領といえは隣の領地だ。何故このグローリア伯領に、しかもこんな小さな教会に？　門番たちは不思議に思いながらも慌てて司教に知らせに走った。

「……静かな村ですね」

ジョン・トゥリーは、周りを見渡すと呟いた。後ろからもう一人の男が馬車を降りて歩み寄ってくる。

「……そうだな」

男は三十代半ばほどで、黒髪黒瞳。身にまとっているのも黒い^{ダフ}リット^{リット}衣で、全身黒尽くめに近い。綺麗に整えられた口髭と顎鬚。思慮深そうな顔。鋭い目。どこか近寄りがたい空気を醸し出している。それに対し、ジョン・トゥリーは明るい栗毛に鳶色の瞳。見るからに実直そうな好青年だ。

「クレド伯……！」

二人の背後から、ボルダー司教の緊張した声が投げかけられる。

「こ、こんな所でお待たせして……、申し訳ございません！」

「構わん。教会がみだりに外部の者を入れないことぐらい知っている」

冷たく言い放つジュビリー・バートランドに向かって、ボルダーは改めて深々と頭を下げた。少し遅れてロレインがやってくる。陰しい表情の修道女は、ジュビリーを凝視すると黙って一礼した。

「お早いお着きでしたな……」

ボルダーがジュビリーを中へ案内する。

「明け方にすぐ発った」

「お疲れでございましょう。少し休まれては……」

「時間がない」

「はっ」

一言一言が鋭い棘のように言い放たれ、ボルダーは強張った顔のまま、教会の庭に面した渡り廊下を進んでいく。その時、庭の奥で歓声が上がった。

「キリエ、相変わらずおまえさんの薬草園はすごいな！」

「そんなことないわ。もう少し種類を増やしたいのだけど。どれをお持ちしましょうか」

「ええと、カモミールとサンザシあるかい」

「乾燥させたのがまだたくさんあります。今、持ってきますね」

その様子をジュビリーが黙って眺める。ボルダーはおずおずと声をかけた。

「……あの娘です」

「そのようだな」

じつとキリエを見つめるジュビリー。その目が静かに眇められる。幼い修道女は自分が育てた薬草たちを誇らしげに眺め、明るい笑顔で農夫と談笑している。小柄だが、花のように咲くその笑顔にその場が自然と明るくなるようだった。ボルダーが耳打ちすると、ロレインが前に進み出て声高に呼びかける。

「キリエ！」

「はい！」

「あなたにお客様がいらつしゃっています」

「お、お客様、ですか？」

キリエは困惑の表情を浮かべた。孤児のキリエに訪れる者などいない。畑を出ると渡り廊下までやってくるが、その顔は不安に満ちている。

キリエは、司教の後ろに佇んでいるジュビリーとジョンに視線を投げかけた。ジョンはにつこりと顔をほころばせたが、ジュビリーは冷たい瞳のまま無言で見つめてくる。眉間に皺を寄せた険しい表情の男を、キリエはじつと見上げた。誰だろう。キリエの不安はますます膨れ上がった。ロレインはキリエの服装にちらりと視線を走らせた。

「服を着替えましょう。着替えてから司教様のお部屋へ」

「は、はい」

ロレインはキリエの肩に手を添えると、その場から連れ出した。

「ロレイン様……、あのお方は、どなたですか？」

「……お会いになればわかります」

言葉少なげに答えるロレイン。一体これから何が起こるのか。キリエは突然のことに戸惑いながら自室へ戻る。替えのローブを取り出すが、ロレインがそれを遮る。

「それではなく、こちらに着替えなさい」

「え、でも、それは……」

ロレインが取り出したのは祭礼用の白い衣装だった。これは、教会に高貴な人物が訪れた時にも着用することがあった。

「粗相があつてはなりません」

「は、はい」

祭礼用の衣装を着るということは、あの男性は相当な身分なのだろうか。キリエは黙りこくって着替えを済ませた。

司教の部屋まで来ると、ロレインが扉を静かに叩く。

「お待たせいたしました」

「入りなさい」

ボルダールのしわがれた声が返ってくる。キリエは緊張で喉の渇きを感じながら、恐る恐る部屋へと踏み入った。

部屋の中央にボルダールとジョン。ジュビリーは奥の窓から教会の庭を見下ろしていた。そして、ゆっくりと振り返る。

「……………」

ジュビリーの鋭い目にキリエは思わず息を呑んだ。一八五センチはあるだろうか。小柄なキリエは巨人でも見上げるような表情で彼の顔つきを窺った。

「キリエ、こちらはクレド伯爵ジュビリー・バートランド様。そして、ジョン・トゥリー子爵。……ご挨拶して」

言われるままにキリエは胸の辺りで両手を合わせ、軽く片膝を付いて最敬礼した。

「キリエと申します。天なる神に、お恵みと今日の出会いに感謝いたします……」

そう言って立ち上がろうとした時、キリエは思わず「きゃっ」と悲鳴を上げた。彼女の右手をジュビリーが手に取ると、その場に跪いたのだ。思わず引っ込めようとした指先をジュビリーが握り締める。

「……！」

ジュビリーは上目遣いにキリエを見つめ、ゆっくりと挨拶を述べた。

「……お迎えに上がりました。レディ・キリエ・アッサー」

「はっ……？」

手を握られたまま、キリエが戸惑いながら聞き返す。ジュビリーは目を眇め、怯えた表情の修道女を探るように見つめた。やがてすつと立ち上がると、静かに口を開く。

「今から言うことを良く聞くのだ」

「は、はい」

「私とそなたは遠縁に当たる」

「え……」

キリエは眉をひそめた。

「そなたの母はレディ・ケイナ・アッサー。グローリア伯爵ベネデイクトの令嬢だ」

「え……、ま、待って下さいっ」

キリエが慌てて口を挟む。

「お人違いですつ。私は孤児で、ファミリー・ネームがありません。洗礼名だって、司教様がお付けになったもので、私……」

「ベネディクトが、身分を隠して育てるよう言い含めてここへ預けたのだ。そなたが二歳の時、母であるレディ・ケイナが病死したためだ」

冷たく乾いた声で淀みなく言い放つジュビリーに、キリエは思わず顔を引きつらせて後ずさる。何……？ このお方は……、何故こんなことを言うの……？

「身分を隠す必要があったのだ。そなたの父親は……、昨日身罷られた国王陛下、エドガー・オブ・アングル様だ」

「……は……？」

キリエの両目が大きく見開かれ、思わず背後のロレインを振り返る。が、ロレインは苦しげに目を閉じ、俯いている。

「もちろん、陛下には王妃がいらっしゃる。だから、そなたは庶子ということになる。だが、陛下には嫡子がいらっしゃらない。つまり、そなたはアングル王国の王位継承権を有しているのだ。そなたには、イングレスのプレセア宮殿で王位を宣言する権利が」

「やめてッ！」

「……」

キリエが思わず上げた叫び声にジュビリーは口を閉ざしたが、その表情は微塵も変わらない。

「ひ、ひどいわ……」

キリエはかすれた声で呟き、顔を横に振る。

「私が、世間を知らない修道女だと思って……、そんな、で、でたらめを……。陛下に対する、冒瀆ですッ！」

「キリエ」

ボルダー司教がなだめるように声をかける。ジュビリーはじつと幼い修道女を見下ろし、口を開いた。

「……時間がないのだ、キリエ」

「……」

「今から、この国は大きく揺れ動く。そなたを含めて王位継承権保持者は五人。一人はすでに継承権を放棄しているが、エドガー王は後継者を指名せずに崩御された。王位継承までに国が乱れれば、近隣諸国に付け入る隙を与えることになる」

「で、でも、証拠が……」

「証拠？」

キリエはごくりと唾を飲み込むと、必死に訴えた。

「私が、国王陛下の娘である証拠なんて、何も、ないじゃないですか……。私みたいな修道女に王位継承権なんか、皆が認めるわけがありません！」

「蝶の紋章だ」

キリエの言葉を遮るように、ジュビリーが言い放つ。その瞬間、キリエは言葉を飲み込み、黙り込んだ。そして、見る見るうちに顔から血の気が引いてゆく。

「蝶の紋章をあしらった指輪を持っているはずだ。蝶はアッサー家の紋章。本来アッサー家の紋章は青い蝶だが、そなたが持っているのは赤い蝶のはず。国王はそなたの誕生を祝い、王家の紋章である赤獅子 にちなんで、赤い宝石で蝶をかたどった指輪を作らせた」

「あ、ありません、そんなの……。持っていません！」

明らかにうろたえた表情のキリエが叫ぶ。ジュビリーは辛抱強くキリエを見つめていたが、やがて、傍らに控えているボルダーを見る。

「……ボルダー」

「……」

ボルダーは眉間に皺を寄せ、沈黙していたが、やがて諦めたように天井を仰ぎ見た。

「……ネックレスにして……。首から下げております」

それを聞くとジュビリーが大股に歩み寄り、キリエは恐怖に顔を引きつらせて後ずさった。

「いや……。来ないで……！」

すると、背後からロレインがキリエの腕を掴む。

「キリエ……」

「ロレイン様……！ 放して……！ お願い……！」

泣きながら懇願するキリエを、ロレインは口を引き結び、目を閉じて必死で抱きすくめた。ロレインにももうどうすることもできない。キリエは絶望して再びジュビリーを見上げた。

「もう一度言うぞ。時間がないのだ」

「……………」

「放棄した一人を除いて、他の者は皆、王位にふさわしい人間ではない。アングルの未来を、闇に閉ざすわけにはいかないのだ」

「で、でも……」

「それからもうひとつ。おまえの祖父、ベネディクトはもう長くない」

「！」

キリエが体をびくつと震わせる。

「十二年間、おまえに会いたくても会えなかった。……おまえに会いたがっている。今会わねば、後悔するのはおまえだ」

「……………」

キリエはうな垂れると深呼吸を繰り返した。頭ががんと割れるように痛い。耳鳴りが響き、気が遠くなりそうだ。しばらく俯いていたキリエだったが、やがてゆっくり顔を上げると、そっと右手を首元に這わせた。指先が鎖を探ると手繰り寄せる。キリエの小さな手に大振りな指輪が現れる。金の台座にルビーの蝶が輝く。ジュビリーの背後に控えたジョン・トゥリーが思わず息を呑む。

「……心配するな」

ジュビリーが低く囁いた。

「おまえの身は、私が守る」

そう言つと、右手を差し出す。キリエはその手をしばらく見つめ、やがて恐る恐る手を取る。部屋を連れ出されようとするキリエに、背後からロレインが名を叫ぶ。

「キリエ！」

振り返ると、ロレインが小走りに駆け寄り、キリエを抱きしめた。

「この日が来なければと、ずっと祈っていました……！」

「ロレイン様……」

では、ロレインは知っていたのか。自分が王の血を引く娘であることを。だが、そんなことはもうどうでもよかった。

「いいですね。良き女王におなりなさい」

女王。その言葉に、キリエはぞくりとした。

「……良いか」

ジュビリーの声に、二人は体を離した。

「……お行きなさい」

ロレインが囁く。キリエは頷くと、ゆっくりジュビリーを振り返った。再びジュビリーはキリエの手を引くと、部屋を出ていった。

「……キリエ……！」

ロレインは顔を覆うとその場に蹲った。その後ろで、相変わらず暗い表情をしたボルダーが無言で立ち尽くしていた。

三人は馬車に乗り込むと、一路グローリアの城に向かった。キリエは緊張に顔を強張らせたまま、黙りこくって馬車に揺られている窓からそつと外を見上げると、住み慣れた教会がどんどん遠ざかってゆく。

しかし、今思えば確かに自分は教会で奇妙な扱い方をされていた。村の中央に位置する教会にしながら、キリエは教会を出て村を訪れることも許されていなかった。年に一度、秋の収穫祭に参加することを許されていただけだ。他の修道士や修道女は、積極的に村に出て奉仕活動をしていたというのに……。それが許されていなかったのは、自分がまだ幼い故だと信じきっていたのだ。それが今、自らの出自を聞かされ、強引に教会から連れ出され、まったく見知らぬ土地へと連れて行かれようとしている。キリエは、孤独と不安で押し潰されそうになった。

「……キリエ様」

キリエの緊張を解こうと、ジョンが優しく声をかける。

「その……、指輪はずっとそうやってネックレスに？」

問われてキリエはおずおずと顔を上げる。

「……司教様が……、私を拾った方がくれたものだと言っ……。

大事に持っていていなさいと……」

「なるほど」

「……まさか、そんな指輪だったなんて……」

泣き出しそうな声でキリエがそう呟き、ジョンは気の毒そうに眉をひそめる。

「大丈夫ですよ。その指輪はこれからあなたの立場を守って下さるものです」

キリエは、ジョンの隣に視線を向けた。黒衣の伯爵は小さな窓から流れゆく風景を見つめている。その表情は相変わらず冷たい。

「グローリア城までもう少し時間がかかります。どうぞ楽になさってください。……ベネディクト様も心待ちにしておられます」

つい先ほど初めて聞いた祖父の名前。今まで天涯孤独だと思っていたキリエは激しく心が乱れていた。ケイナ・アッサー。ベネディクト・アッサー。そして、ジュビリー・バートランド。母親だ、祖父だ、遠縁だと言われても、あまりにも突然のことで理解できない。自分は、一体何者なのだ？

キリエはそつと窓から外を眺めた。木々の間から、遠くに家々がぼんやりと見える。やがてそれらの数が目立ってくる。教会を出て一時間ほど経ったのだろうか。やがて道は幅が広くなり、辺りの雰囲気が変わったことに気づいた。

「着いたぞ」

今まで沈黙していたジュビリーが短く言い放つ。キリエが少し身を乗り出すと、石造りの城が立ちはだかっているのが見える。灰色の堅牢そうな石壁。主塔には青い蝶が描かれた紋章旗がはためいている。

しばらく馬を走らせると、やがて馬車は城門をくぐり、中庭へと入ってゆく。中庭には兵士と思しき男たちや従者たちが大勢忙しく走り回っている。そして、馬車に気づいた者たちが馬車から顔を覗かせている少女を見つけ、口々に何かを言い合っている。ジュビリーはそれに気づくとすぐに窓のカーテンを引いた。キリエは、今までに見たこともない人の多さに再び恐怖心が頭をもたげてきた。

騒がしい中庭を抜けると、ようやく馬車は停まった。ジョンが手を添えて降ろすと、キリエは恐々と辺りを見渡した。ロンディニウム教会など比喩物にならないほど巨大な城が目の前に屹立している。それでも、キリエの恐怖心は頂点に達した。

やがて、塔の門からたつぷりとしたローブをまとった男が、数人の騎士を従えてやってくる。

「ありがとうございます、クレド伯」

ローブの男が一礼する。五十代半ばほどに見えるこの男は、キリエに視線を移すと恭しく跪き、彼女の右手を取る。

「レディ・キリエ。ご無事のご帰還、何よりでございます。グローリア城代家令フランス・レスター男爵にございます」

レスターはしっかりした体格で、灰色の髪。奥まった目から探るようにキリエを見つめてくる。そして、少し感慨にふけるような口調で呟く。

「……大きゅうなれましたな」

「……………」

わずかに首を傾げるキリエに、横からジュビリーが声をかける。

「レスターは、おまえの祖父の腹心だ」

「……おじ様の……………」

「幼い頃のレディ・ケイナにそっくりでございます。ご立派になられましたな」

レスターの口ぶりでは、幼い頃の母を知っているらしい。キリエは目の前で跪く老臣をじっと見つめた。

「ベネディクトは」

ジュビリーが低い声で尋ねると、レスターは顔をしかめた。

「……今夜が山ではないかと」

それを耳にしたキリエは怯えた表情でジョンを振り返る。

「慌てないで、キリエ様。こちらへ」

ジョンがキリエの手を引き、中へ進む。

城の中はひんやりとしており、静まり返っていた。まだ昼過ぎだというのに薄暗く、陰鬱な空気に満ち満ちている。時折侍女たちが黙って急ぎ足で通る。鮮やかな赤い絨毯が広い通路に敷き詰められ、暗い塔の中でぼんやりと浮かび上がる。

壁には甲冑や武器、防具が整然と並べられ、時折城主の家族らしき肖像画が掛けられている。キリエはそれらを見上げながら、歩みを進めていった。

「……義兄上^{あにさま}」

ジョンが前をゆくジュビリーにそう呼びかけ、キリエは少なからず驚いた。ファミリーネームが違うが、兄と呼ぶということは……？

「クレドの軍に準備をさせましょうか」

「そうだな」

ジュビリーが呟く。

「明日の朝にはここへ到着させろ」

「はっ」

ジョンが振り返ると、レスターが頷いて踵を返す。その様子を目で追っていたキリエが、立ち止まったジュビリーにぶつかりそうになつて慌てて前に向き直る。

「兄上」

通路の先から若い女性の声が聞こえる。キリエがジュビリーの背から覗き見ると、貴族の令嬢と思しき女性がこちらへ小走りにやってくる。美しい黒髪を綺麗に結い上げ、凜とした端正な顔つきをしている。

「マリーエレン。来ていたのか」

「こちらから使いが参りまして……」

「……悪いのか」

ジュビリーの問いにマリーエレンは固い表情で頷く。そして、キリエに気づくと顔の表情を和らげた。

「レディ・キリエ・アッサーでございますね？」

「あ……、あの」

マリーエレンは跪いてキリエの右手に口を付けると微笑んだ。穏やかな顔つきの女性が現れただけで、キリエの気分はずいぶん落ち着いた。

「マリーエレン・バートランドと申します。ジュビリーの妹にございます」

そして、懐かしそうに囁く。

「……そっくりですね、ケイナ様に」

彼女も母を知っている。キリエは思わずじっとマリーエレンを見つめた。

「お疲れでしょうが、このままベネディクト様のお部屋へ……」

「は、はい」

一行は再び城内を歩き、やがて塔の最奥部へと到着した。

「……」

部屋から医者らしい老人が出てくると、黙って一行を中へ招き入れる。部屋の奥には天蓋付きの寝台が置かれ、そこに数人の従者が佇んでいる。昼の陽光を遮る厚いカーテンから光が一筋部屋に伸びている。寝台には、六十代後半と思しき老人が横たわっていた。従者たちはキリエたちに気がつくと黙って寝台から離れた。

「キリエ様」

マリーエレンがそつと呟き、キリエの手を握った。キリエはマリーエレンの手をぎゅっと握り返し、そつと寝台へと近づいた。

老人はかすかに喘ぎながら呼吸を繰り返していた。灰色の髪が汗で額に張り付き、刻み込まれた深い皺が痛々しい。痩せた顔を取り巻く髭は伸び放題に伸び、細い首に無力に垂れている。

「……ベネディクト様」

マリーエレンが耳元で囁く。

「キリエ様でございますよ。ずっとお会いになりたがっていた……、キリエ様です」

「……………」

ベネディクトはうつすら目を開けた。マリーエレンがキリエの顔を見上げ、キリエはおずおずと顔を祖父に近づけた。

「……おじい様……………」

その小さな声で、ベネディクトの瞳が輝く。何度か瞬きをするとうつくり顔を巡らせ、キリエを見つめる。

「……ケイナ」

ベネディクトの乾いた口から出た言葉は、孫ではなく娘の名前だった。

「……ケイナ……。わしのケイナ……………」

「ベネディクト様……………！ ケイナ様ではございません。お孫様の、キリエ様ですよ！」

マリーエレンの呼びかけでベネディクトは顔をしかめ、まじまじとキリエを凝視する。すると、ジュービリーがキリエの背後までやってくると囁いた。

「……ベネディクト。あなたが十二年前、ロンディニウム教会に預けたキリエだ。あなたに会いに来たのだぞ」

「……キリエ……、キリエ、おまえなのか……………」

「おじい様」

キリエは思わずベネディクトの手を両手で握った。やせ細った手は、見た目からは信じられない力で握り返してきた。そして、ベネディクトの目から大粒の涙が溢れ出る。

「キリエ……………！ お……………、大きくなったな……………！ 会いたかったぞ

……………！ 許してくれ……………！ おまえには……………、何もしてやれなんだ……………。許してくれ……………！」

キリエは顔を振ると、ベネディクトの首に腕を回すと抱きしめた。初めて会う祖父。これが血の絆なのだろうか。こみ上げてくる懐か

しさで胸が一杯になる。そして、ひたすら許しを請う祖父が哀れでならなかった。

「キリエ……。ケイナは、おまえの母親は、おまえを心から愛していた……。おまえが争いに巻き込まれぬようにと、教会へ預けるようわしに言い遺して死んでいった……。わしは……。でき得る限りおまえを守ろうとした。だが……。それも限界だ」
「……………」

限界。その言葉を耳にしてキリエは顔を上げた。ベネディクトは力のこもった瞳でキリエを見つめた。

「おまえは……。わしの後を継ぐのだ。今からおまえは、このグロリアの領主、グロリア女伯爵だ。……これから先のことは、バートランドと……。レスターに任せてある」

「……伯爵様……………」

「そつだ。彼らは何があつてもおまえを守る。わしも……。天からおまえを見守る」

「おじい様！」

ベネディクトの表情が歪む。ぜいぜいと喉を鳴らし、震える声で囁く。

「……おまえには……。これから過酷な運命が待っている……。だが、決して……。くじけてはならん……。！ おまえのためにも……。アングルのためにも……………」

アングルのために。その言葉がキリエの胸に突き刺さる。やがてベネディクトは呻き声を上げて咳を繰り返し、従者たちが慌てて周りを取り囲む。

「もうこれ以上は……………」

医者も厳しい顔でジュビリーを見上げる。ジュビリーは頷くとマリーエレンに目配せする。

「キリエ様、おじい様を休ませてあげましょう。こちらへ……………」
「ま、待つて……。まだ聞きたいことが……………」

マリーエレンが医者を振り返るが、医者は険しい顔つきで頭を振

る。マリーエレンは辛そうにキリエの手を引く。

「待って！ おじい様！」

従者たちが数人がかりでキリエを部屋から連れ出す。

「……………」

喘ぐベネディクトを、ジュビリーが見下ろす。息を整えたベネディクトは顔を歪め、ジュビリーを見つめる。

「……これで、良いのだな……？ 本当に、これで……………」

ジュビリーは黙ってベッドの淵に跪き、ベネディクトの顔に耳を近づける。

「これで…………、おまえの思い通りになった…………。だが、忘れるな……………」

……！ キリエは…………、キリエは…………！」

「わかつている」

ジュビリーが囁く。

「キリエは、私の命がある限り守り続ける…………約束する」

ベネディクトは苦しげな表情でジュビリーを凝視するが、やがて頭を再び枕に沈めた。

「マリーエレン様、おじい様は……………」

廊下を進みながら、キリエが不安そうに訴える。すると、マリーエレンが真顔で振り返る。

「いけません、キリエ様。あなたはこれから女王になれるお方。私などを敬称で呼んではなりません」

キリエは泣き出しそうな顔つきで立ち尽くした。

「ほ、本当に…………、私が女王になれると…………？ 本当に、そう思っているのですか？ おかしいわ…………。皆どうかしてるわ…………！」

「キリエ様……………」

マリーエレンは困ったように溜め息をつく。膝を曲げ、視線を合わせる。

「…………無理ありませんわ…………。十二年の間、何も知らずに教会で過ごしていらっしやっただもの…………。でも、アングルは今、あ

なたを必要としているのですよ。アングルの未来は、あなたにかかっています」

「そんなの、知りません……！ 教会に帰らせて……！」

マリーエレンがどうしたものかと困惑していると、背後からジョンが呼びかけてくる。

「マリー様」

「ジョン……」

困りきった表情のマリーエレンと、涙ぐんで顔を強張らせているキリエの顔を交互に見やると、ジョンも眉をひそめて溜息をつく。

「キリエ様……」

「お、おじい様は心配だけど、でも、私、女王になんかなりません……！」

ジョンも腰を屈めるとどこか必死な表情でキリエに言い含める。

「まだキリエ様にはお話していないことがたくさんあります。あなたにご納得いただけるよう、今から義兄上が説明してくれます。ですから……」

あの冷たい表情をした伯爵から何の話があるというのか。キリエは目に涙を溜めたまま俯いた。そこで、マリーエレンがそっとジョンに囁く。

「ジョン、あなたもクレドへ帰るの？」

「ええ、マリー様も一緒にクレドへお帰りになるようにと、義兄上が仰せです。クレドで軍を整え、明日王都へ向かいます。マリー様にはクレド城をお頼みします」

「軍？」

キリエが不安そうに問いかけると、ジョンは笑って答える。

「ご安心ください。イングレスへ攻め込むわけではありませんよ」

「では、ここも城の守りを……」

「そうですね」

二人のやりとりを聞き、キリエは不思議そうな顔で問いかけた。
「……マリーエレン様は……、ジョン様の奥様なのですか？」

「えッ？」

途端に二人がびっくりして振り返り、ジョンが顔を真っ赤にしてまくしたてる。

「ち、違います！ な、何を仰いますっ！」

「だって、マリーエレン様は伯爵様の妹君でしょう……」

ジョンがジュビリーを兄と呼んでいることを指摘するキリエに、マリーエレンが苦笑する。

「違うですよ、キリエ様」

そして、少しだけ寂しげな表情で続けた。

「ジョンは……、兄の亡くなった妻、エレオノール様の弟なのです」
「えっ……？」

思いも寄らなかった言葉に、キリエは思わず絶句する。あの伯爵に、妻が。もちろんあり得ない話ではないのだが、ずいぶん意外な感じがした。しかも、すでに亡くなっているとは。

「……もう八年も前のことです」

少し遠くを見るような目つきでジョンが呟いた。ほんの少しの間、思い出に浸るような表情を見せるが、すぐにまた笑顔を見せる。

「それより、キリエ様。私のことはどうぞジョンとお呼び下さい。私など、田舎の子爵に過ぎません。もちろん、キリエ様が女王に即位されてからも、ずっとお仕えする所存です」

「でも……」

「そうですね。あなたは女王になられるお方なのですから」

マリーエレンも先ほどのことを繰り返した。

「私のことはマリーとお呼び下さい。今からクレドへ帰らねばなりません、キリエ様の身の回りのことはこれから私が全てお引き受けいたします」

キリエは恐る恐る二人の顔を見比べた。ジュビリーと違って穏やかで柔らかな表情の二人に見つめられ、キリエは小さく頷く。そして深々と頭を下げ、どもりながら囁く。

「よろしく願います。……ジョン、マリー」

ジョンとマリーは顔を見合わせ、微笑んだ。

何とか気を落ち着かせたキリエを部屋へ連れて行く途中、マリー・エレンが不意に足を止めた。壁に掲げられた一枚の肖像画を見上げるとキリエに指し示す。

「キリエ様。このお方があなたの母君、レディ・ケイナ・アッサーですよ」

「えっ」

言われて慌てて見上げる。そこには、上品な深いワイン色のガウンをまとい、ブーケを手にした若い女性が描かれていた。わずかに切れ長な瞳。微笑が浮かぶ唇。キリエと同じ、濃い栗毛。病弱にも見える、雪のように白い肌。確かに、キリエにもその面影がある。

これが、自分の母親……。今まで想像もできなかった母の姿。それが突然、こんな形で会おうとは。高名な画家の手によるものなのか、格調高い気品ある画風にキリエは思わず息をひそめて見つめた。

「……二五歳でお亡くなりになりました。キリエ様は、まだ二歳でいらっしやいました」

二五……。キリエは思わず息を呑んだ。そんな年齢で、この世と別れを告げたのか。まだ幼すぎる娘を遺しての旅発ちは、どんなにか辛かっただろう。

「……マリーは、母をご存知ですか？」

「はい。お綺麗で……、静かなお方でした。キリエ様はよく似ておいですわ」

上目遣いで母の肖像を見つめるキリエに、マリーがそつと肩に手をかける。

「私たちの領地は隣り合っていたので、よく遊びに来たものです。まるで、お姉様のようによく面倒を見ていただきました。私たちは幼い頃に両親を亡くしていましたから……」

マリーの懐かしさを噛み締める言葉に、キリエは思わず彼女を見上げる。そして、そつと肖像画を振り返る。絵の中の母は、心なしか寂しげに見えた。

夕方にマリーとジョンがクレドへ向かった後、キリエは部屋で夕食を出された。

「おじい様の容態は？」

「残念ですが……、よくありません」

侍女は暗い表情で短く答える。他にも色々聞きたいことがたくさんあったが、暗い表情の侍女にはそれ以上声をかけられず、また、侍女が答えられるかも疑わしかった。黙って食事を口に運んでいると、扉を静かに叩かれる。

「伯爵」

伯爵と聞いてキリエは思わず手が止まる。静かに入ってきたジュビリーは、立ち上がるうとするキリエを手で制する。

「少し外せ」

その一言で侍女は黙って部屋を退出していった。

「明日、夜明けと共にイングレスへ向かう」

相変わらず冷たい表情のまま、ジュビリーが言い放つ。

「クレドとグローリアの軍と共にプレセア宮殿へ入城し、王位の宣言を行う。おまえの出自を確認する作業があるだろうが、問題ないはずだ」

「ま、待って下さい」

キリエが青ざめた顔で口を挟む。

「お、王位の宣言って……、わ、私ですか？」

「おまえがしなくてどうする」

「ほ、本気なのですか。私が、女王になると、本気で考えなのですか？」

口ごもりながら問いかけるキリエに、ジュビリーは辛抱強く、ゆっくりと言い含めた。

「心配するな……。おまえが明日、王位を宣言したとしてもすぐ女王になれるわけではない。戴冠しなければ国民や議会から王位を継承したとは認められない。戴冠権を持っているのは、クロイツのム

ンディ大主教だ。イングレスの聖アルビオン大聖堂で戴冠式を挙げて、初めて女王に即位することができる」

ムンディ大主教。

プレシマス大陸及びアングル島で広く信仰されているヴァイス・クロイツ教の総本山、聖都クロイツの支配者。ムンディ大主教は精神世界における事実上の支配者だ。キリエはまさか大主教の名が出てくるとは予想しておらず、目を見張った。

「……大主教……」

ロンディニウム教会のような田舎の小さな教会にいては、一生拝謁の栄に浴することはないのであろう人物。キリエは、ようやく自分の置かれた状況を理解し始めた。

「まずは王位の宣言を行い、国民と議会から支持を得た後にクロイツへ戴冠を要請することになろう」

「で、でも、私は修道女です！」

我知らず叫ぶキリエ。だが、ジュビリーの冷たい目に射すくめられ、恐れ表情が一段と増す。

「私は……、一生を神に捧げる誓いを……、修道誓願を立てた身です。祖父の後を継いで爵位を相続したり、その上、君主になろうなど……、大主教がお許しになるはずがありません……！」

「……それはどうか」

思わぬ言葉にキリエは眉をひそめる。ジュビリーは腰を屈め、キリエの耳元で囁く。

「ムンディはむしろ、おまえがアングルの君主になることを望むだろうな。プレシマス大陸の強国、エスタドのガルシア王はヴァイス・クロイツ教を蔑ろにし、大陸の覇権を握ろうとしている。ムンディは、ヴァイス・クロイツ教の修道女であるおまえがアングル女王になることでエスタドを牽制できると期待するだろう。ムンディにとって悪い話ではない」

「そんな……」

思わず涙ぐむと、キリエは両手で顔を覆った。自分の信仰の指導

者が、そんな政治的駆け引きを望むなど、認めたくなかった。世界は、自分が予想していたよりももっと醜く、恐ろしいものなのか。

「……キリエ」

ジュビリーが更に言葉を続ける。

「……おまえにとつては受け容れ難いことばかりだろう。だが、時間がないのだ。早くしなければ、ガリアから冷血公が舞い戻る」

冷血公の名を聞いてキリエは体を震わせた。

「奴の悪評はおまえも耳にしているはずだ。あの男が王になれば……、間違いなくこの国は滅びる。それを止めることができるのはおまえだけだ」

「……………」

キリエは恐る恐る顔を上げ、不安に満ちた目をジュビリーに向ける。

「待つて。では、ルール公は、私の……」

ジュビリーは険しい顔で頷く。

「異母兄だ」

一瞬、部屋に冷たい空気が張り詰める。キリエはかすかに体を震わせた。だが、そんな彼女にジュビリーは更に追い討ちをかけた。

「それだけではない。王位継承権を持つ者は他にもいる。レノックス・ハートがガリアで戦っている相手……。王太子ギョーム、彼もだ」

「えっ……………」

「彼はガリア王リシャールと、王妃マーガレットの嫡男だ。マーガレット王妃はエドガー王の妹。つまり、アングルの王位継承権とガリアの王位継承権、どちらも保持している。おまえにとつては、従兄にあたるわけだが」

なんとということだ。キリエは呆然とした。プレシアス大陸の覇権をかけた戦いの渦に、今から自分は身を投じようとしている。だが、それでもまだ、自分のことではないような感覚がどこかにあった。これは、どこか遠い異国の話。自分はその物語を聞いているだけ……

…。

「レノックス・ハートを君主にするわけにはいかん。とは言え、異国の王太子を君主に迎えることも避けねばならん。おまえが女王になれば、アングルが望む未来になる」

ジュビリーはそこまで語り終えると、キリエの疲れきった表情に気づき、そつと肩に手をかける。

「……疲れただろう。食事を済ませたら早く休め」

キリエは無言で頷くが、その瞳は空ろだった。

今日という一日は、自分にはわからないことの連続だった。精神的にも肉体的にも疲れきっている。考えなければならぬことが多いすぎる。そして、考えてもわからないことだらけだ。

ジュビリーの言葉が脳裏に蘇る。彼は自分を女王にすると聞いた。遠縁だとも言った。つまり、自分を女王にして、彼は宰相になるつもりか。ヴァイス・クロイツ教では、十八歳に達して初めて成人と認められる。キリエはこれまで孤児として育てられてきたため誕生日がわからず、聖ロンディニウムの祝祭日である六月十日を誕生日の代わりに祝ってきた。つまり、今月十四歳になったばかりだ。成人までには四年ある。四年もあれば、この国を手中に入れられる。

自分が今まで知らずにいた世界が、自分を中心に動こうとしている。そのことにキリエは怯えながら、疲れを癒すためではなく、現実から逃避したいがために寢床へと就いた。

第1章「ロンディニウム教会の修道女」第2話（前書き）

教会を連れ出されたキリエは祖父と再会を果たす。だが、再会の時はあまりにも短かった。

「キリエ、よいか。決してくじけてはならぬ……！」

第1章「ロンディニウム教会の修道女」第2話

「少ないながら、トゥリーの兵も呼び寄せました。イングレスでは何が待っているかわかりませんかね」

クレド城では、ジョンが普段よりもやや興奮した面持ちでマリー・エレンに話しかけていた。

「王太后は以前から人望のあるお方ではありませんでしたから、宮廷でキリエ様を歓迎する者も多いのではないのでしょうか。とは言え、油断はできませんが」

「そうね……」

マリーの気のない返事にジョンが振り返る。マリーは眉間に皺を寄せ、窓から夜空を見上げている。

「マリー様？」

ジョンの呼びかけに、はっと我に返ったように慌てて振り返る。

「……ごめんなさい」

「……どうなさったのです？」

「……嫌な予感がするわ」

マリーの一言に、ジョンは思わず黙り込んだ。

「今更、もう後に引けないことはわかっているけれど……。明日、イングレスでキリエ様が王位宣言を行ったとして、本当にムンディ大主教は戴冠を認めてくださるのかしら。そして、戴冠できたとしてもその先は……。不安なことばかりだわ」

「……エスタド、ユヴェーレン、クラシャンキ帝国……。大陸の列強は、君主不在のアングルを狙うでしょう。アングルの王位継承権を持つガリアのギョーム王太子の反応も気になります」

ジョンは重々しく息をついた。

「ルール公に対抗できるだけの仲間が必要ですね」

「レスターが色々情報網を張り巡らしているけれど……。時間がな
いわ」

マリーエレンはちらりと青年に視線を投げた。生真面目な顔つきに不安の色を滲ませ、頭の中で必死に様々な言葉を探しているのが見てとれる。

「……ごめんなさい、ジョン」

「はい？」

「あなたも巻き込んでしまったわ」

その言葉にジョンは顔を強張らせ、居住まいを正した。

「いいえ。私が自ら志願したのですよ。義兄上のためでもあります。が、姉のため……、そして私自身の誇りのためです。マリー様がお心を痛めることはありません」

真っ直ぐに目を見て言い切るジョンに、マリーは寂しげに微笑んだ。

「……ありがとう」

そして再び夜空を見上げ、小さく呟いた。

「もう、あれから八年ね……」

温かい腕に抱かれ、微笑みを浮かべたたくさんの人々にのぞき込まれている。そのうちのひとりが自分を抱き上げ、周りに笑い声が上がった。やがて床に降ろされ、手を引かれると覚束ない足取りでゆっくりと歩む。と、不意に背後から悲鳴とどよめきが起こり、振り返った瞬間、風を切る音が耳を突く。瞬間、視界が暗転した。闇闇のまま、人々の悲鳴と怒号、金属がぶつかり合う音などが続く。不安と恐怖に駆られ、泣き叫ぶ。その時、怒り狂った男の罵声が響いた。

「気でも触れたか！ その娘を殺せッ！」

そこでキリエは目を覚ました。

「……………」

両目を見開き、荒い呼吸を繰り返す。喉元には生暖かい汗が流れている。幼い頃から時々みる夢だ。特に、疲れた時や悩み事がある

時などが多かった。久しぶりにみた悪夢に、キリエは不吉な思いで喉元の汗を拭う。

この夢をみた時、いつも思うことがあった。気が触れた娘とは、一体誰なのか。それが、もしも自分のことを指しているとしたら……。キリエは表現しようがない重苦しい不安と罪悪感で部屋を見渡した。石造りの重々しい雰囲気のある寝室。今まで使ったこともなかった天蓋付きの寝台。上質のシーツに、美しい刺繍の施されたキルトが掛けられている。窓からは青白い月光に照らされた檜の木が黒々と枝葉を伸ばしていた。

夢のせいで寝付けなくなったキリエは、とうとう我慢できなくなつてそつと寢床から抜け出した。静かに扉を開け、暗い廊下に出る。廊下の壁に所々燭台が置かれ、ちらちらと明かりが揺れている。ベネディクトの寝室はどこだっただろう。小さな教会から出たことがなかったキリエにとつて、巨大なグローリア城は迷路のような場所ではなかった。暗い廊下を不安げに歩き出してしばらくすると、

「……キリエ……」

誰かに名前を呼ばれたような気がして立ち止まる。

「……誰……？」

「……キリエ」

小さな声がした。そちらを振り返るが誰もいない。キリエは声が出た方へ歩き出した。衣擦れの音がする。

「誰……？」

もう一度呼びかけるが答えがない。キリエは暗い廊下で転ばぬよう、壁伝いに小走りに歩く。

「キリエ……」

女の声だ。誰だ。キリエは恐怖や不安もなく、声を追いかけた。声の主はキリエの歩みを待つかのように時々呼びかけ、衣擦れの音を合図のようにして彼女を導いた。何回か階段を上がり、さすがに息を切らしたキリエは立ち止まって呼吸を整えた。その時、

「キリエ」

「ひっ！」

唐突に名を呼ばれ、短い悲鳴を上げる。

「……は、伯爵様！」

胸が割れんばかりに波打ち、キリエは上ずった声で囁いた。暗がりからジュビリーが足音も立てずに歩み寄る。

「どうした」

「……あ、あの……」

キリエは思わず金縛りにでもあつたように立ち尽くした。ジュビリーは顔をしかめ、わずかに首を傾げる。

「……どうやってここまで来た」

「……」

城内を出歩いたことを咎められたようで、キリエは青くなって黙り込んだ。怯えた表情に気づいたジュビリーは慌てて言い直す。

「眠れなかったのか」

黙ったまま見つめてくるキリエに、ジュビリーは少し穏やかな表情を見せた。遠くの燭台の灯火が、二人の顔をぼんやりと照らす。昼間と違ってキリエは頭布を被っておらず、わずかに波打った濃い栗毛が印象的だった。ジュビリーは目を細め、体を固くしている少女を見つめた。修道女の服を脱いだとしても、身も心もまだ修道女のままだ。その身に王の血が流れていなければ、こんな場所へ来ることもなかったろう。冷え切ったはずの心が、ほんの少し痛む。だが、もう決めたのだ。この娘を女王にすると。

「……おじい様が、心配で……」

小さな声でキリエが訴える。

「……お願いです。おじい様の側にいさせて下さい。あのまま、お別れになるなんてことになれば、私……」

どんどん小さくなっていく声を最後まで聞くと、やおらジュビリーはキリエの手を取ると階段を上がり始めた。

「は、伯爵様？」

その言葉にジュビリーが立ち止まり、鋭い目つきで振り返る。

「これから女王になる者が臣下を敬称で呼んでどうする。おまえはこれから、多くの貴族から臣下の礼を受けるのだぞ」

「で、でも、どう呼べば……」

「バートランド、それが無理ならただ伯爵と呼べ」

そう言い放つジュビリーを、黙って見上げていた時。

「伯爵ッ」

階上から不意に呼びかけられる。二人が振り向くと、そこにレスターが佇んでいる。

「キリエ様もおられるのですか？」

「どうした」

「ベネディクト様が」

「！」

二人が急いで階段を上がると、数人の従者が廊下を慌しく行き交っている。

「おじい様はッ？」

ジュビリーが黙ってキリエの手を引いて急ぎ足で部屋へ向かい、静かに扉を開ける。扉が開く音で、中にいた医師が振り返る。そして、キリエの顔を見ると険しい表情で頭を振る。

「ベネディクトは」

「……………」

医師はジュビリーの問いかけにも答えようとしない。キリエが走って寝台へ近づくと、ベネディクトは喘ぎながら必死で呼吸を繰り返していた。

「おじい様ッ」

ベネディクトの瞼がぴくりと痙攣する。

「おじい様、キリエです。おじい様！」

瞼が瞬きすると、濁った目がゆっくりキリエの顔を見つめる。

「……………」

唇が、キリエの名を呼ぼうとくすかに動く。キリエは跪き、祖父の口元に耳を近づけた。

「……キリエ……」

「おじい様！」

「こ、幸運を……」

死に臨んでも孫の幸せを願うベネディクトに、キリエの目から涙が溢れる。

これまで、修道女として教会で死者と向き合う日々だった。しかし今、初めて血の繋がる者と出会い、その臨終に立会っている。家族が死ぬということは、こんなにも寂しく、心細く、悲しいものなのか。修道女でありながら、自分が今まで人の悲しみの半分も理解していなかったことを初めて知った。キリエがベネディクトの手を握ると、彼はなおも唇を開いた。

「……頼む……」

「何？ おじい様」

キリエはさらに耳を近づける。ベネディクトは力を振り絞って言葉を発した。

「……彼を……、救ってくれ……」

キリエは両目を見開いた。そして、祖父の顔をまじまじと見つめる。その目には苦痛だけでなく、深い悲しみが見てとれた。

「……救う……？」

ベネディクトはキリエの手をぐっと握りしめ、耳元で必死に囁いた。

「そうだ……、バートランドを……、ジュビリーを、救ってやってくれ……」

ジュビリーを救ってほしい。死に瀕した状態で、何故そんな願いを？ キリエは混乱した。

「おじい様、どうということ？ おじい様……！」

「ベネディクト様……！」

背後にやってきたレスターに目を向け、ベネディクトは苦しげに囁く。

「……レスター……、後を……頼むぞ……」

「……！」

すると、突然ベネディクトが喘ぎ始めた。

「いかん」

医師がキリエを押しつける。

「おじい様！」

「離れて！ レディ・キリエ」

ベネディクトは呻き声を上げ、胸を掻き毟る。

「おじい様！」

「ベネディクト」

キリエの絶叫が空しく響く。ベネディクトはがくがくと痙攣を繰り返すと、やがてがくりと頭を垂れた。室内に、沈黙が広がる。

「……………」

医師が首に手を押し当てると、キリエを振り返る。

「……おじい様？」

「……お亡くなり」

キリエは両手で口元を覆うとその場に座り込んだ。レスターが思わず片手で顔を覆い、口惜しげに呻き声を漏らす。

「ベネディクト様……！」

嗚咽が響く中、ジュビリーは無言でベネディクトの遺体に歩み寄った。しばらく黙ったまま見下ろすと、痩せたその顔に手を這わせ、目を閉じる。何かを、決意するかのように。

翌朝。あのまま眠らずに夜を明かし、一晚中祈りを捧げていたキリエは、ぼんやりとした表情で椅子に腰掛けていた。やがて外から聞こえてくるざわめきではっと我に返る。窓からそつと外を窺うと、城門から軍勢が整然と行進してくる。

「……ジョン様」

武装したジョンが軍馬に跨り、軍を率いている。

「キリエ様」

「！」

不意に名を呼ばれ、飛び上がった振り返る。そこには昨夜の侍女がひっそりと佇んでいた。

「ご出発の準備を。お着替えを用意してございます。衣装部屋へ」

「……はい」

言われるままに部屋を連れ出される。城内は慌しかった。一方ではキリエの出発を準備し、一方ではベネディクトの葬儀の準備に追われている。この異様な雰囲気、キリエの胸は重く締め付けられた。数人の侍女が待機していた衣装部屋で、キリエは今まで見たこともない豪華な衣装を示され、啞然とした。

「わ、私、こんな贅沢な衣装は……」

「今から王都で王位の宣言を行うのですよ。粗末な衣装でプレセア宮殿へ入城すれば、貴族たちから嘲笑されます」

乾いた声でそう諭され、キリエは否応なしに着替えさせられた。

「プレセア宮殿にはまだ王妃、いえ、王太后がいらつしやいますし」

小さく呟く侍女の言葉に、キリエは眉をひそめた。

「……ベル王太后？」

「ええ」

ベル・フォン・ユヴェーレン。崩御したエドガー王の妃だ。王と王妃の争いが絶えなかったという噂は、このロンディニウムにも伝わっていた。教会でも、ボルダーが暗にエドガーとベルのことを引き合いに出し、家庭を円満にすることが幸福につながると説教していたことがあったほどだ。

エドガーとベルの間には嫡男エドワードがいたが、狩りの最中に落馬したことが原因で十歳という幼さで亡くなっている。そのこともあって、次々と庶子を生む愛妾たちに対し、王妃は露骨に敵意を見せていたというから、キリエに対しても好意的なはずがないだろう。キリエは憂鬱そうに溜め息をついた。と、その時、彼女は眉をひそめた。

（王太子……）

父と妃の息子ということは、亡くなったエドワード王太子は自分

の異母兄だ。キリエは不吉な胸騒ぎを感じた。今まで知らされていなかった事実が次々と姿を現してくる。自分は、一体誰なのだ？
これから、どうなるのだ？

不安そうなキリエに構わず、侍女たちは手際よく衣装を着付けてゆく。金欄で縁取られた目にも鮮やかな青いワンピース。幾重にも重ねられた上質なペチコート。今まで触れたこともなかった金銀の装身具。長い栗毛は綺麗に結い上げられた。仕上げに化粧を施すと告げられたが、キリエはそれだけは頑なに拒んだ。長年教会で育ってきたキリエにとって、化粧はどうしても背徳行為にしか思えなかったのだ。装身具すら、彼女は用意されたものの半分ほどしか身につけようとはしなかった。

「失礼」

衣裳部屋の扉の向こうから、レスターが声をかける。

「お着替えは？」

「そろそろ終わります」

「お食事をご用意しております。出発が迫っております故……」
レスターの言葉にキリエは俯いた。

「……食欲がないわ」

「少しでもお召し上がり下さいませ。インGRESまで三時間はかかります」

侍女がぴしゃりとたしなめる。ようやく着替えが終わり、危なっかしい足取りで部屋から出てきたキリエに、レスターが満足げに頷く。が、その顔は一晚で老け込んだようにも見える。

「おお。昨日の修道女姿からは想像もつかないお姿ですな。結構結構」

慣れない衣装にてこずりながら朝食を済ませた後、キリエは城の礼拝堂へ向かった。礼拝堂という名ではあったが、その豪華さは目を見張るものがあつた。手入れの行き届き具合を見る限り、ベネディクトは生前から信仰を大事にしてきたらしい。礼拝堂に安置された棺の中で、盛装されたベネディクトが静かに眠りにについている。

棺の側で跪くと、キリエは両手を合わせた。

「……あなたの御霊が天使に導かれ、雲間に居ます神の下へと、迷うことなく向かわれることを祈ります……」

淀みなく呟く祈りの言葉が、やがて途切れ途切れになる。

「……あなたが残した……、多くの善行が……、神に認められ……、天で祝福されますよう……」

キリエの閉じた瞼から涙が溢れ出す。今まで何度も唱えてきた死者への哀悼の祈り。まさか、血の繋がった者のために唱える日が来ようとは思ってもいなかった。それでも祈りの文句を最後まで詠唱すると、キリエは静かに立ち上がった。ベネディクトの頬にそっと唇を押し当てるとその死に顔を見つめる。

「……おじい様……」

沈黙のベネディクトに、キリエは心の中で呼びかけた。

（伯爵を救うとは、一体どうということなのでしょう。彼を、何から救えば良いのですか）

答えを得られないまま、キリエはベネディクトに別れを告げた。

侍女たちに見送られて礼拝堂を後にすると、レスターが一人佇んでいる。

「キリエ様。……こちらへ」

言葉少なげに呟くとキリエを導く。礼拝堂を出て城の裏手へ回ると、夏の花で彩られた庭園が広がっている。教会の薬草園を思い出したキリエは、思わず胸が詰まった。庭園の色鮮やかな花々は、二人を黙って迎え入れた。

「……キリエ様」

低い声で呼びかけると、レスターはある一角を指し示した。

「こちらが、レディ・ケイナの墓標でございます」

「……！」

キリエは息を呑んで立ち尽くした。石のように固まって動かないキリエに、レスターは寂しげな微笑を浮かべるとそっと肩に手を添える。

「どうぞご挨拶を。ベネディクト様同様、ケイナ様もキリエ様にお会いしたかったです」

キリエは覚束ない足取りでゆっくりと歩み寄った。草むらに隠れるように、母の墓標はひっそりとそこに横たわっていた。冷たく硬い石に、「我が慈愛は祈りと共に」と刻まれている。キリエは静かに跪くと、恐る恐る手を伸ばし、墓標に触れる。

「……お母様……」

口の中でそつと呟いてみる。昨日見かけた母の肖像画が脳裏に蘇ると同時に、キリエの目から涙が溢れ出た。

何故、こんなことになったのだろう……。何故、自分には母の記憶がないのか。何故、自分は母と引き離され、身分を隠され、真実から遠ざけられていたのか。それが、自分の身を守るためといわれ、でも理解できなかった。十四年前に、何があったのだ。

キリエは涙を拭いた。墓標の上の部分に、蝶の紋章が刻まれている。指輪と同じものだ。キリエは右の手のひらに口づけると、そつと墓標に添えた。

「行つてまいります。……母上」

そして、両手を合わせると静かに祈りを捧げる。と、草を踏む靴音が耳に入り、はつと後ろを振り返る。そこには、正装したジュビリーが背後に佇んでいた。相変わらず冷たい表情だが、その目にはどこか同情の色が感じられる。

「……良いか」

「……はい」

キリエは墓標をもう一度振り返ってから立ち上がった。

「キリエ様」

背後からレスターに呼びかけられ、立ち止まる。

「私はここでグローリアとクレドの守備に務めます。ご成功をお祈りしております」

固い表情で頷くと、キリエはジュビリーに促されるまま庭園を後にした。

「私はレノックス・ハートなど認めぬ！」

耳を突く刺々しい叫び声に、廷臣たちは苦勞してうんざりした表情を押し隠す。

「しかし、王太后。早晚ルール公はお戻りになられます。早く次期君主を決めねば、なし崩しのルール公が王位を継承してしまいますぞ」

王太后ベル・フォン・ユヴェーレンは、廷臣が王ではなく、わざわざ君主と呼んだことに目ざとく反応した。

「そなたは王より女王が良いのか？」

「そうではございませんが……」

今度ばかりは不快な表情を隠そうともせず、廷臣は正直に言上した。

「王位継承権を持つ者は男性とは限りませんからな」

「ルール公だけは許さぬ。あの野蛮な獣……。あれがこのプレセア宮殿の玉座に座ると思っただけで虫唾が走る……。国民のためにもならないわ」

「それはそうですが……。そうとなれば他の王位継承権を持った人物に……」

「私の甥はどう？」

「は？」

その場にいた廷臣たちがいぶかしむ。

「ユヴェーレンのエルネスト王子よ。冷血公よりは適任ではないかしら？」

「とんでもない……。！ エドガー王の血を引かぬお方をアングルの君主に迎えるなど……。！ 国民の理解を得られません！」

「それに、ただいまホワイトピークに早馬を遣わしております。ホワイトピーク公にもお伺いを立てねば」

ホワイトピーク公。その名にベルは黙り込んだ。

「公爵は先々代の王、アルバート・オブ・アングル様の庶子のご長

男でいらつしゃいます。傍系と言っても、アングル王家の血脈を受けておいでです」

ベルはその美しい顔を歪めた。アングルの要衝、軍港ホワイトピークを守るホワイトピーク公爵ウィリアム・デーバーは、エドガーの父アルバートが寵愛した庶子サラ・デーバーの長男だった。エドガーにとってサラは腹違いの姉であり、ウィリアムは甥になる。

その時、まるでその頃合いを見計らっていたかのように廷臣が大広間に駆け込んでくる。

「ホワイトピークから使者が帰還しました！」

皆が振り返ると、廷臣は息を整えてから言上する。

「公爵のお言葉をお伝えいたします。『自分はホワイトピークを盾にアングルを守ることが使命である。王位の継承に名乗りを上げることは許されない』」

その言葉に廷臣たちが溜息をつく。

「やはり……」

ウィリアム・デーバーは堅物で生真面目な男として知られており、だからこそ王位に相応しいのでは、という声も上がっていたのである。

「そして」

なおも廷臣が声を上げる。

「こう仰せられました。『エドガー王には嫡子でなくともお子がいらつしゃる。庶子と言えど、先王直系の子孫が王位を継承することが望ましい』と」

大広間が沈黙に包まれ、廷臣たちは戸惑った様子で顔を見合わせた。ベルはひとり、いらいらした様子で口元を歪めている。

「……しかし、陛下のお子となると……」

「やはり、ルール公ということに……」

人々が諦めの表情で溜息をつく。その重苦しい空気を破るように、慌しく数人の侍従が駆け込んでくる。

「申し上げます！」

皆が今度は何事かと顔を上げる。

「先ほどグローリアから使者が参り、現在グローリア女伯がこちらへ向かっているとのことですよ！」

ベルの顔が引きつる。

「グローリア、女伯……？」

その場に居合わせた人々が顔をしかめる。

「グローリア伯はまだご存命のはず。体調を崩されていると聞き及んでいたが……」

その時、ひとりの騎士がはつと顔を上げた。

「……レディ・キリエ・アッサー！」

その名に人々は息を呑んだ。ベルの顔色がさつと青ざめる。

「……キリエ……、アッサー……！」

ベルは顔を歪め、苦々しげに吐き棄てる。

「あの……、あの女の娘か！」

「落ち着いて下さいませ、王太后」

宮廷侍従長、セヴィル伯が侍従に問いたです。

「共の者は？」

「クレド伯が先導しているとのことですよ」

クレド伯という名を耳にして、その場がざわめく。

「クレド伯？ 何故……！」

その疑問に先ほどの騎士が身を乗り出す。

「グローリア伯はかつて、クレド伯の後見人でいらっしやいました故」

「しかし……」

廷臣たちの言い合いに、ベルが玉座を立つ。

「あの妾腹を女王に就ける気か！ もしもそうなれば私はどうなる！ ユヴェーレンに帰れと申すか！」

「レディ・キリエは修道女になられたはず。ご自分から王位を望むとは考えられませぬ。いずれにしろ、彼女の出方を待つしかないかと」

煮え切らない廷臣たちの態度に苛立ったベルは怒りのぶつけようもなく、大広間を飛び出した。

「さて……、どうなるかな」

セヴィル伯が困り果てた様子で呟くと、廷臣たちが彼の周りに集まってくる。

「キリエ・アッサー……。あの幼かった娘が帰ってくるというのか」

「しかし、エドガー王の血を引くことは確かだ。冷血公がアングル王に就くことを考えれば、修道女の方がまだ良いというもの」

「しかし、傀儡には使えませんな」

ひとりが陰険な表情で囁く。

「クレド伯爵……。確か彼はアッサー家と遠縁に当たるはずだ」

「……宰相の座に納まるうというわけか」

一同は重々しく溜め息をついた。

「久しく見かけていなかったが……」

「細君に死なれてからは領地に引き籠もっていたからな」

「モーティマー、そなたはクレド伯と親しかったであろう」

皆の視線を集めたのは、先ほどの若い騎士だった。国王直属秘書官、サー・ロバート・モーティマーだ。

「親しいといえるほどでは……」

彼は口ごもると、緊張した顔つきで付け足した。

「一度、護送任務に同行させていただいただけです」

モーティマーは、野心的な雰囲気であっても、宮廷では決して出しゃばるような人間ではなかったジユビリー・バートランドの姿を思い起こした。その記憶は決して楽しいものではない。だが、それはジユビリーのせいではなかった。

「レディ・キリエ……。国内にいる王位継承権者の中で最も適した人物である以上……、入城を拒む理由はありませんね」

「しかし、ルール公は？」

ひとりがそう問いかけ、セヴィル伯は苦しげに唸った。

「……黙ってはおるまい」

キリエ一行の元にプレセア宮殿の使者が出迎えにきたのは、イングレス郊外に差し掛かった頃だった。沿道で周辺の住民たちが不安そうに遠巻きに見守る中、使者は丁寧な挨拶をもって迎えた。
「プレセア宮殿より、レディ・キリエ・アッサーをお迎えに参上いたしました」

「……どなたの命だ？」

下馬し、短く問いかけるジュビリーに対し、使者は複雑な顔をしてみせると、曖昧な答えを返した。

「……宮殿の廷臣は皆、レディ・キリエ・アッサーの入城を歓迎いたしておりますが、歓迎していない者もおります」

「ベル王太后かな」

返事をする代わりに、使者が苦笑する。

「……ご安心下さい。今や王太后の力は無きに等しい状況にございます」

「……先を急ごう」

表情を変えず、ジュビリーはそう言い放つと再び馬に跨った。

それから一時間もしないうちに、一行はイングレスに入った。アングル王国の都イングレスは、プレシアス大陸から切り離された場所であるにも関わらず、巨大な都市の様相を呈していた。十万人近い市民がひしめき合うように暮らし、名実共に文化の中心地であった。

市民で埋まった大通りを隊列が縫うように行進してゆき、物見高いイングレスの市民たちは驚きと不安のこもった目で見守った。市民にとっても、王位継承問題は自分のたちの生活を左右する一大事であった。悪評高い冷血公に比べれば、全くの無名であってもロンディニウム教会の修道女の方が印象は良い。だが、この島国を巡って大陸の列強は虎視眈々と付け入る隙を狙っている。そんな国を背負っていけるのか、その不安も拭いきれなかった。

「……ここが、イングレス……」

初めて見る 都市 にキリエは目を奪われた。村では見ることはない、せめぎあうようにして林立する建物。彩り鮮やかな品々が並ぶ市場。着飾った者たちと、キリエの軍勢など目に入る様子もない物乞いをする者たち。豊かさと貧困、華やかさと醜さが同居する都を、キリエはどう受け止めてよいかわからなかった。

やがて、軍はプレセア宮殿に差し掛かった。プレセア宮殿は市街地を貫くノーヴァ川を堀の代わりにしており、川の上には跳ね橋が架けられている。中庭で近衛兵たちが出迎えのために整列しているのが見える。橋門をくぐったところで、ジュビリーはキリエを馬車から降ろした。

「あッ」

裾を踏みつけて転がり落ちそうになるキリエを、ジュビリーの大きな両手が支える。

「ご、ごめんなさい……」

ジュビリーに抱きかかえられるようにして地に足をつけると、顔を真っ赤にして呟く。

「慣れない衣装だ。気にするな」

言葉とは裏腹な冷たい口調にキリエはぐくりと唾を飲み込む。

「落ち着いたらマリーエレンを呼び寄せる。宮廷には宮廷の儀礼がある」

宮廷儀礼を学ぶ前に王宮へ押しかけるということは、それほど切迫した事態ということなのだろう。確かに、王位継承に一刻の猶予も許されない。

息を整えると、キリエは辺りを見渡した。ぐるりと囲む衛兵たち。その周りにひしめく貴族たち。まるでキリエを呑み込むかのように聳え立つ宮殿。彼女は、足がすくんだ。震えを感じながら思わず背後を振り返ると、門の外では市民らが固唾を飲んで見守っている。

貴族たちは、キリエの不均衡な姿に目を奪われた。目の覚めるような美しい青のドレスをまといながらも、顔にはほとんど化粧を施さず、装身具も申し訳程度しか身につけていない。それでも、幼く

も無垢な瞳を持つ少女に、賞賛の溜め息が零れる。

やがて、歴代君主の紋章旗がはためく導入室間アプローチに通されると、きらびやかな内装にキリエは息を呑んだ。グローリア城と違い、華やかな装飾が施され、まるで異国にでもいるかのような感覚に陥る。豪華な絨毯が広間を覆い尽くし、極彩色のタペストリーに混じって数々の絵画が掛けられている。が、何体もの甲冑が飾られているのを見て、キリエは不安と緊張を感じてドレスの裾をぎゅうと握りしめる。廷臣や貴族たちが遠巻きで固唾を飲んで見守る中、数人の廷臣たちがこちらへやってくる。

「グローリア女伯」

廷臣たちは皆、深々と最敬礼してみせた。ひとりの騎士が前へ進み出ると恭しく跪く。

「プレセア宮殿へようこそいらつしやいました。我々は女伯を歓迎いたします。私は亡きエドガー王の首席秘書官、ロバート・モーティマーと申します」

キリエは恐々と手を合わせると頭を下げる。そんな幼い少女にモーターティマーはどこか懐かしげに笑いかけた。そして、首を巡らすとジュビリーに向かって一礼する。

「お久しぶりでございます」

それに対して、ジュビリーはかすかに頷いただけだった。

「では、ご案内します」

モーターティマーが先導して歩み始めると、キリエは恐る恐る後に続いた。

その時、前方で突然ざわめきが起ったかと思うと、人だかりがさあっと左右に分かれた。通路の先に、緋色のドレスをまとった黒髪の美女が佇んでいる。並み居る貴族たちよりもっと高貴な人物であることが、キリエにもわかった。では、この女性がベル・フォン・ユヴェーレンか。

ベルは、青白い顔つきでキリエを正面から見据えていた。後ろに控えている女官たちは、いつ王太后が癪癪を起すかと不安げな表情

で見守っている。しばらくその場に立ち尽くしていたベルは、ゆつくりとキリエに向かって歩き出した。キリエも数歩歩み寄ったが、不意にどよめきが起こる。キリエが両手を合わせて片膝を突き、教会式に恭しく最敬礼をしたのだ。貴族や兵士たちのどよめきが続く中、ベルは眉をひそめた。

「キリエ……、キリエ・アッサーと、申します。天なる神に、お恵みと今日の出会いに感謝いたします。……身罷られた国王陛下エドガー・オブ・アングル様の御霊が、神に祝福されますよう……」

「！」
エドガーの名を耳にしてベルはかっとな頭に血が上った。が、モイティマーが鋭く振り返り、彼女は息を吐き出すと気を落ち着けた。

「……よう参られた」
かすれた声でそう呟くと、ベルはモイティマーに命令を下す。
「グローリア女伯を丁重にもてなすよう」
「はっ」

それだけ言い放つとベルは踵を返し、女官たちを伴って引き上げた。その様子を見守るジュビリーの口元に冷たい笑みが浮かぶ。キリエがベルに対して最上級の礼を尽くしたことで、キリエの評価は上がったはずだ。廷臣たちは二人の立場が逆転することを理解しただろう。キリエに敗れて何も言わなかったのが幸いした。

（最初の顔見せとしては上出来だ）
ジュビリーは慎重に胸中で呟いた。

第1章「ロンドン・ユニウム教会の修道女」第3話（前書き）

祖父との別れを告げると、キリエはジュビリーと共に王都イングレスへ向かった。そこに待ち受けていたのは……。

第1章「ロンディニウム教会の修道女」第3話

キリエたちはまず玉座の間へ通された。寒々しいほど広い空間。天井を支える、細かい細工が施された列柱。夢のような色彩に溢れた世界が描かれた天井画。煌く豪華絢爛な空間に、キリエは息をひそめて圧倒されていたが、大理石の床に敷かれた金色の絨毯の先に鎮座する玉座を目にし、彼女はますます緊張した。

「グローリア女伯、どうぞ楽になさって下さい」

白髪の廷臣がわずかに気の毒そうな表情で声をかける。

「私は宮廷侍従長セヴィル伯爵。先王陛下の御世から宮廷の管理を任されております」

キリエは強張った顔つきを崩さないまま、小さく頷く。セヴィル伯は目を細めて幼い女伯爵を見つめる。

「……お懐かしゅうございます。あんなに幼かったレディ・キリエが、このように慎ましくかで立派な女性にお成りとは……。時が経つのは早うございますな」

自分に記憶はないが、相手は自分を知っている。そんな人々が次々と現れ、戸惑いを隠しきれないキリエは怯えた表情でジュービリーに視線を向けるが、彼は黙って頷くだけだった。

「先王陛下がご存命でしたら、女伯のご成長にお喜びになられたことでしょう」

感慨にふけるセヴィル伯の周りに、廷臣たちが肅々と手に何かを捧げてやってくる。巨大なテーブルに一冊の本が恭しく置かれる。

モーティマーが前へ出ると厳かに申し立てた。

「それでは、始めましょう」

キリエは無言で頷いた。

「一四七九年、レディ・ケイナ・アッサーがエドガー王との御子を懐妊……。出産後、二年間はプレセア宮殿で生活したと記録がございます」

そう言われても、記憶のないキリエは戸惑うばかりだ。

「そして、一四八一年にレディ・ケイナが死去。祖父であるグロリア伯爵が、エドガー王の反対を押し切ってロンディニウム教会へ預けたとされています」

「反対を……、押し切って？」

意外な事実にはキリエが思わず聞き返す。

「陛下はレディ・キリエを大変可愛がっておいででしたから」

モーティマーが控えめに口を挟む。そして、セヴィル伯が声高に呼びかける。

「レディ・キリエ・アッサー。あなたには王家の血縁を示す証拠がありますか？」

皆の視線を一齐に受け、キリエは困惑の表情でジュビリーを振り返る。彼に目で指示を下され、キリエはおずおずと左手を差し上げると、中指にはめた指輪をそつと外した。

「失礼」

モーティマーが指輪を受け取ると、目を眇めて指輪を見つめる。

「……一四七九年。K・Aへ。E・O・Aより」

廷臣たちの口から控えめながらざわめきが零れる。

「あなたがエドガー王の御子であることが確認されました」

廷臣たちが改めて深々と敬礼する。が、キリエは内心呆気にとられていた。こんな簡単な確認で済まされるものなのか？　だが、彼女の思いとは裏腹に、運命の歯車はゆっくりと確実に回ろうとしていた。モーティマーがキリエを玉座に座るよう促す。怯えた目で再びジュビリーを振り返るキリエ。

「……………」

ジュビリーに目で促され、恐る恐る玉座に歩み寄る。重厚な櫥の木で作られた玉座には深いワイン色のビロードが張られ、主を無言で待っていた。キリエがしばらく玉座を凝視していると、傍らにジュビリーが音もなくやってくる。そして、手を添えて座るよう促す。キリエは泣き出しそんな顔つきで椅子に歩み寄ると、ぎこちない動

作で腰掛けた。その様子を、キリエ同様、緊張した面持ちのジョンが見守る。

「……レディ・キリエ・アッサー」

セヴィル伯らが跪き、居心地悪げに座り込んだキリエを見上げる。

「……王位の宣言をいたしますか」

キリエはわずかに視線を上げた。玉座の間の天井には、見事なフレスコ画が描かれている。青空に雲が湧き上がり、神が戴冠式を挙げる王を祝福する様子が描かれている。描かれているのは、現在のアングル王家の始祖ウィリアムだ。五百年続くアングル王家の歴史に、自分のような庶子が記録されて良いものか。キリエは最後まで迷った。だが、昨夜のジュビリーの言葉が蘇る。ベネディクトの顔も脳裏をよぎった。キリエはしばらく目を閉じ、胸の中で神への祈りを唱えると、ゆっくりと目を開けた。

「……王位を、宣言します」

か細い声でキリエが囁き、その場にいた者たちは皆、深々と頭を下げた。

「早速、クロイツのムンディ大主教へ使いを送りましょう」

「その前に」

キリエが遮る。

「国王陛下……、父の、墓前に……」

モーティマーは頷いた。

「畏まりました。ご遺体は聖アルビオン大聖堂の礼拝堂に安置してございます。参りましょう」

立ち上がるうとするキリエに、ジュビリーがそつと手を差し伸べる。その手を取って立ち上がる際、彼はキリエにそつと耳打ちした。「上出来だ」

「……………」

そんなジュビリーを、キリエは黙って上目遣いで見つめる。

いつかは訪れるのが夢だった聖アルビオン大聖堂。アングル王国におけるヴァイス・クロイツ教の総本山であり、国の宗教的中心地

だ。主要な王室行事はほとんどここで行われる。例えば君主の戴冠式や結婚式。様々な歴史の舞台になってきた場所だ。自分がそこへ、こんな形で訪れることになるうとは。

これから先に一体何が待っているのか、不安ばかり膨れ上がる中、モーティマーの先導で玉座を離れた時。突然外からざわめきが上がる。キリエが思わず不安げにジュビリーに寄り添うと、大広間に衛兵がひとり飛び込んでくる。

「申し上げます！ ルール公の使者が謁見を求めて参りました！」

ルール公。その名を耳にした瞬間、その場に緊張が走る。

「ルール公が……、もう帰られたのか？」

「こんな時に……！」

セヴィル伯の切迫した様子の呟きに、キリエの顔から血の気が引く。

「……伯爵……！」

ジュビリーは目を眇め、眉間に深い皺が刻まれる。

「義兄上……！」

ジョンが側へ小走りに駆け寄ると口走る。そんな中、モーティマーは顔色ひとつ変えずに、つかつかと衛兵に歩み寄った。

「追い返せ」

思ってもみない言葉にキリエが息を呑む。

「すでにグローリア女伯が王位を宣言された。不服があるならば使者ではなく、ご本人が入城するよう、言って追い返せ」

「しかし……！」

再び外でどよめきが起ったかと思うと、侍従や衛兵の制止を振り切ってひとりの男が押し入る。

「サー・オリヴァー！」

モーティマーが怒気を込めて名を叫ぶ。

（オリヴァー・ヒューイット……）

ジュビリーは胸の中でその名を呟いた。ルール公レノックス・ハートの腹心だ。レノックスの数々の黒い噂の処理を任されていると言われる、陰険な男だ。

「その様子では」

ヒューイットは鷹揚な調子で声高に言い放った。艶のない黒い髪、いかつい体に、あばたの多い浅黒い顔。彼は奥まった目で並み居る廷臣らを眺め渡した。

「すでに王位宣言を済まされたのかな」

「その通りだ、ヒューイット。グローリア女伯はすでに王位を宣言された。出直して、そなたの主君にお伝えしろ。王位の宣言をされたいならば、御本人がプレセア宮殿に参内するようにと」

モーティマーに言われ、ヒューイットは胡散臭げにキリエの顔をじろりと睨みつける。突然のことにキリエは声も上げられず、ただ怯えた表情で見つめ返すことしかできない。

「あなたがレディ・キリエ・アッサーか」

「その通り」

ジユビリーが一步前へ出る。

「王位継承権者である。礼を尽くせ」

「ふん」

ヒューイットは鼻で笑うとキリエにゆっくりと歩み寄る。

「ルール公にお仕えするオリヴァー・ヒューイットと申します」

跪き、型通りの敬礼はするものの、ヒューイットの狡猾そうな瞳にキリエは思わず顔を強張らせて後ずさる。

「兄君から伝言をお預かりいたしております」

「あ、兄の……？」

ヒューイットは目を細め、口元に笑みを浮かべると言い放った。

「そなたの王位は認めぬ」

その場にいた者たちが一瞬凍りつくが、間髪入れずにモーティマーが怒鳴る。

「口を慎めッ！ ヒューイット！」

「私は主君の言葉をお伝えしているだけですよ、サー・ロバート」
ヒューイットは立ち上がるとキリエを見下ろした。

「あなたは一介の修道女に過ぎない。十二年もの間教会に閉じこも

り、世界を知らぬ少女にこの国の未来を任せるわけには参らないのですよ。当然、エドガー王の血を引く成年男子であるルール公が君主に相応しい。あなたにルール公の王位を認めていただけるのであれば、公はあなたに公爵位を叙位すると仰せです」

「勝手なことを申すなッ」

ジュビリーが鋭く言い放つ。

「勝手？ そちらこそルール公がお留守の間の勝手極まりない行為ルール公はお怒りでございますよ」

「先王陛下に嫡子がいらっしやらない以上、レディ・キリエにも王位継承権がある。君主には性別や年齢、経験よりも必要なものがあるのではないか？」

「それではまるで、ルール公は君主の器ではない、と仰せのような言い草ですな、クレド伯」

ヒューイットはジュビリーに詰め寄り、傍らのキリエにちらりと視線を移す。

「レディ・キリエ。あなたのような修道女が王位継承で争いを起せば、クロイツのムンディ大主教はお怒りになられるでしょうなあ。

修道女の本分を忘れ、欲に駆られて権力を望めば、大主教はあなたを破門にするかもしれませんぞ」

「！」

破門という言葉にキリエは思わず両手で口を覆う。

「黙れ、ヒューイット！ そなたの主君も今までどれだけ多くの問題を引き起こしてきたか、知らぬわけではあるまい！」

「ルール公が、いつどのような問題を？」

「白々しい……！」

ヒューイットとモーティマーの言い争いをジュビリーは不審げな目で見守っていた。

（オリヴァー・ヒューイット……。これほど饒舌な奴だったか？）
ジュビリーが知っているヒューイットはいつもレノックスの影に隠れ、不始末の始末をさせられる小心者といった姿だった。

「よく考えてみなされ。レディ・キリエはまだ十四歳にも満たない少女。ガリアやエスタド、ユヴェーレンといった列強が我が国を狙っておりますぞ。不安に駆られた国民が反乱を起こしかねないではありませんか……」

ぺらぺらと調子よくしゃべり続けるヒューイットが、ちらちらと視線を動かすのにジユビリーが気づく。

「それに比べ、ルール公は内戦や外国での戦争でも戦績を上げ、国を背負うに十分な素質をお持ちでございます。レディ・キリエがルール公の王位をお認めになり、協力していただけるのであれば、兄妹仲睦まじく暮らせることができるというもの……。レディ・キリエも、もう鳥籠同然の暮らしに戻りたくはないでしょう？」

そこで、ヒューイットは再び視線を動かした。その目が広間の大時計を捉えていることに気づいたジユビリーは、はっとした。

（まさか……！）

そして、モーティマーに向かって叫ぶ。

「城門を閉めさせるッ！ モーティマー！」

「！」

だが、ヒューイットが手を上げて制すると怒鳴り返す。

「気づくのが遅いですが、クレド伯！ ルール公はすでに市街へ入っておりますよ！」

「！」

叫ぶや否やヒューイットが腰の長剣を抜き放ち、キリエが短い悲鳴を上げる。が、ヒューイットの背後から素早く抜剣したジョンが斬りかかり、ヒューイットは体を仰け反らす。

「義兄上！」

「伯爵ッ！」

金切り声を上げるキリエの手を引っ張ると、ジユビリーが駆け出す。が、外からも人々の怒号や斬り合う音が聞こえてくる。ジユビリーは舌打ちすると剣の柄に手をかけながら壁に寄り添い、外の様子を窺った。ヒューイットと共に入城した使節団だろうか。武装し

た騎士たちが宮殿の衛兵と斬り合いを繰り広げている。大廊下の奥からは女官たちの悲鳴が聞こえてくる。

「ジョン！」

ジュビリーから名を呼ばれると、ジョンはヒューイットと二度三度と刃を打ち合わせ、渾身の力で剣を振り下ろした。

「！」

鈍い音と共にヒューイットの長剣が叩き折られ、ガランと床に転がる。思わず剣の柄を凝視するヒューイットを蹴倒すと、ジョンは身を翻して義兄の元へ馳せ参じた。

「義兄上！」

「クレドへ帰るぞ！ 出直した……！」

さすがに悔しげな表情で口走ると、ジュビリーはキリエを脇に抱えるようにして抱き寄せて走り出した。

「は……、伯爵……！」

腕の中でキリエが消え入りそうな声を出す。

「歯を食いしばれ。舌を噛むなっ」

ジュビリーたちはキリエを中心に一気に大通路を突っ走った。ヒューイットの使節団も元々人数が多いわけではないらしい。入り乱れる侍従や衛兵たちをやり過ごし、宮殿を飛び出すと、ジョンがあつと声を上げる。城門から火の手が見える。よく見ると城門で宮殿の軍が交戦している。

「北門から出るぞ」

「はいッ！」

ジョンたちは待機させていたクレドとグローリアの軍を呼び集め、北門へ誘導する。ジュビリーが馬に跨るとキリエの体を引っ張り上げた。

「今からクレドまで走る。ルール軍を引き離すまで馬から降りんぞ。良いなッ」

「ま、待って！ 待って！ 伯爵！ わ、私……！」

キリエが半狂乱で叫ぶが、ジュビリーは指先でキリエの口を塞い

だ。そして顔を近づけて囁く。

「今はこの場を脱することが先決だ！」

そして馬の腹を蹴ると走らせる。

「義兄上！」

後方で軍をまとめるジョンが叫ぶ。振り返るとジョンが顔を歪め、後ろを指差している。目を凝らしてみると、炎と煙で軍勢が見え隠れする中、黄色の紋章旗が翻っているのが見える。黄色の旗に、心臓ハートが描かれた盾が重ねられた絵柄。はためく紋章旗の影から、一人の騎乗の男が現れる。

「……レノックス・ハート……」

ジュビリーの呟きに、キリエがびくつと体を震わせる。甲冑姿の青年は大声で命令を下していたが、やがてこちらに気づくと素早く兜を脱いだ。

（気づかれた）

ジュビリーが舌打ちする。

キリエに似た栗毛に、冷たいアイスグレーの瞳。青年は獲物を見つけた猟犬のような残忍な笑みを浮かべ、馬の腹を蹴った。

ジョンが怒鳴り声を上げ、騎兵たちを巧みに誘導するとレノックスの部隊を即座に包囲する。その場で騎兵による白兵戦が始まるが、一際目立つ長身のレノックスは幅広の長剣で騎士たちを次々と馬から叩き落してゆく。

「逃がさんぞッ！ キリエ・アッサー！」

レノックスの咆哮を耳にしたキリエは全身が栗立った。包囲を突破すると、レノックスは怒涛の勢いでジュビリーに迫る。彼はキリエをぐいと馬の首へと押し倒し、耳元で怒鳴った。

「顔を上げるな！」

返事もできないでいるキリエの耳に、鞘から剣が走る音が飛び込む。

「ひッ……！」

刃物や風を切る音は大嫌いだった。

「おおッ！」

レノックスが叫び声を上げながら長剣を振りかざし、打ちかかる。ジュビリーは馬を巡らしながら剣を打ち流し、返す剣でレノックスの顔をなぎ払う。頬と鼻から鮮血が飛び散り、キリエの衣装に降りかかる。相手は思わず箆手ゴントレットを嵌めた手で顔を覆うが、怒りのこもった目でジュビリーを凝視すると、再び剣を振りかぶる。正確にジュビリーの脳天を目掛けて斬りかかるレノックスだったが、ジュビリーはそのことごとくを打ち返した。そして、頭上で鳴り響く剣戟の音に体を震わせているキリエに気づくと、レノックスはキリエに向けて剣を振りかぶった。その瞬間、ジュビリーは肩に羽織サイコートついていた外衣を引きちぎると投げつけた。

「ッ！」

その隙にジュビリーは手綱を引くとその場を脱した。外衣を叩き落とすがその外衣に馬が足を取られ、一瞬馬が棒立ちになる。

「くそッ！」

レノックスが苛立たしげに喚くと、すでにキリエとジュビリーを乗せた馬は黒煙と土煙にかき消されていた。

「あいつ……、ジュビリー・バートランド……！」

レノックスは齒嚙みするとその名を呟く。顔から流れる血が唇を濡らした。

「公爵！」

後ろから慌てふためいたヒューイットの声が投げかけられる。

「お、お怪我は……！」

「この、間抜けがッ！」

レノックスは振り向きざまに腕をヒューイットに叩き込む。ヒューイットは呻き声を上げて馬から転げ落ちた。

「貴様がキリエ・アッサーを殺しておけば、こんなに手がかかることはなかったのだッ！ 愚か者めがッ！」

「も、申し訳ございません……！」

レノックスは荒々しく呼吸を繰り返すとジュビリーたちが逃走し

た方角を睨み、頭を振る。

「腕のない貴様をやったのがわが身の不幸よ。時間がなかったとは言え……」

「……公爵……」

「なんだ」

「王太后を捕らえましたが……」

ヒューイットの言葉に、レノックスはうんざりしたように天を仰ぐ。

「あんな女など打っちゃっておけ！ 殺せばユヴェーレンとの間に軋轢が生じる。生かしておいても何の役にも立たん。どうしようもない女だ！」

「い、いかが計らいましょう」

「ベイズヒル宮殿にでも幽閉しておけ」

イングレス郊外の小さな宮殿の名を挙げ、レノックスはこの話を切り上げた。

「……それにしても」

ようやく落ち着きを取り戻したレノックスが声の調子を落とす。

「あの娘が、本当にキリエ・アッサーか？」

「まだ十四歳に満たないはずです。未だに修道女としての意識が抜け切らないらしく、おどおどした様子でした」

「昨日の今日だ。当然だ」

レノックスは過去に何度かプレセア宮殿でキリエを見かけていた。その時彼はまだ八歳。キリエは二歳になったばかりだった。父の愛妾、ケイナ・アッサーに抱かれていた姿が目には焼きついている。父エドガーはキリエに夢中になり、レディ・ケイナの住む離宮に入り浸り、王宮を留守にすることが多かった。あの時の幼子が、自分を出し抜いて王位を宣言した。レノックスは目を眇め、奥歯を噛み締めた。

すでに、クレドの軍勢はあらかた逃亡し、傷ついた者や命を落とした者たちが地面に無残に転がっている。

「火を消せ。プレセア宮殿を支配下に置かねばならん。クロイツへ使者を送る準備もさせろ」

「はッ」

レノックスは顔の血を拭くと、手のひらを見つめる。精悍で男らしい顔つきは、性格を除けば美青年の内に入るだろう。だが、血に汚れたその顔からは狂気が見え隠れする。

ロンディニウム教会の修道女 など、すぐに葬り去って王位宣言ができるものと考えていたレノックスにとって、キリエを取り逃がしたことは予想外だった。

「……これは、長引くかもしれんな」

レノックスの予測は、決して間違っではないなかった。

無言で馬の首にしがみついたままのキリエを乗せ、ジュビリーは駆け続けた。しばらく軍を走らせていると、供の者が声を上げる。

「伯爵！ あれを！」

前方に目を凝らすと、丘の頂から騎馬の音が響いてくる。皆に緊張が走るが、やがて軍勢が姿を現す。先頭の騎兵が持つ軍旗は 青蝶 だ。

「レスター……」

一斉に安堵の声上がる。

「伯爵！」

前方で馬を駆っていたレスターが声を張り上げる。

「レスター、よく来てくれたな」

「遅くなりました。ルール公が帰国したとの報せを受け、すぐにグロリアを発ったのですが」

ジュビリーはちらりと後方を見やった。

「ルール軍もすでに追ってきていない。我々を追うよりもプレセア宮殿を手中に入れることを優先したのだろう」

「キリエ様は？」

レスターの言葉に、ジュビリーは震えているキリエの肩に手をか

けた。

「大丈夫か、キリエ」

そう言って体を起こそうとするが、キリエは短く「放して!」と叫ぶ。レスターが一瞬顔をしかめるが、ジュビリーは表情を変えない。

「……馬から降ろして……!」

「降りてどうする」

「教会に帰るのよッ。もう……、こんなの耐えられない……!」

両手で肩を抱き、身を震わせて叫ぶキリエを、ジュビリーは疲れきった表情ながらもじつと見つめる。

「あの人が王になりたいならならせてあげればいいわ……。私には、関係ない……。私が女王になんかなれるわけがない……。! 今までどおり、修道女でいちゃいけないの? どうして、私がこんな目に遭わなければならぬ……。!」

言葉の最後は涙声になってかき消された。レスターは気の毒そうな表情でキリエをただ見つめることしかできなかった。ここまで言われれば、何も言い返す言葉はない。心を閉ざし、一切を拒否するキリエにどう声をかけるのか、レスターは黙ってジュビリーに目を移す。

「……キリエ」

彼は低く呟くと体を屈め、耳元でもう一度呟く。

「よく聞け、キリエ」

「いや……!」

「聞け」

ジュビリーは無理やりキリエの頬を両手で包むと顔を上げさせた。

「やめて、放して……!」

「いいから聞け」

涙と血で汚れたキリエの顔が苦痛に歪む。

「いいか、二度は言わんぞ」

そう前置きすると、ジュビリーは鼻が触れ合うほどに顔を近づけ

た。

「王には嫡子がいたが死んだ。……私が殺したのだ。おまえを女王にするために」

耳鳴りが鳴り響く頭に、その言葉はまるで何の意味も成さない言葉のように漂った。だが、次第にはつきりしてくる頭が徐々にその言葉を理解し始め、キリエの顔から血の気が引いてゆく。

「……今、なんて……」

「二度も言わせるな」

キリエの背に寒気が走る。唇をかすかに震わせ、目の前にいる男を凝視する。すぐ側に控えているレスターが険しい顔で俯く。彼はこの事実を知っているようだ。

「……私の、ために……？」

「そうだ。運命の車輪はすでに回り始めている。とつくの昔にな」

「……どうして……」

ぼんやりと呟くキリエに、ジュビリーはわずかに顔を歪める。

「おまえにとつては、確かに迷惑な話だろう。だが、もう始まったことなのだ。すべてはアングルのためだ」

そう言うと、ジュビリーは両手の力をゆるめた。しばらく二人が見つめ合っていると、殿を務めていたジョンしんがりがやってくる。

「……義兄上……？」

二人のただならぬ様子に息を呑むが、それ以上は口を挟まない。

「……ジョン。引き続き追っ手に警戒しろ」

「はッ」

プレセア宮殿とその周辺は、ようやく戦闘の後片づけを始めていた。傷ついた者たちは兵舎や教会へ運ばれ、怪我の浅い者は死者の埋葬を始めた。そして、内戦の勃発に、皆不安で一杯の表情で宮殿を見守っていた。

すでに王太后ベルをベイズヒル宮殿へ追い払ったレノックスは、治療を終えるとロバート・モーターを呼びつけた。その口調が

ら、キリエの擁立に傾いていたと思われるモーティマーをどう処分するつもりなのか、ヒューイットは高みの見物を決め込んだ。

「キリエ・アッサーを女王に擁立するつもりだったのか？」

レノックスは玉座に足を組んで座り込み、頬杖についてモーティマーを見下ろした。顔面に巻かれた包帯が手負いの獣のような印象を与えるが、その瞳には獰猛な光をたたえている。

「……私はエドガー王の秘書官です」

目を伏せ、不機嫌そうに答えるモーティマー。若いのになかなか度胸の据わった奴だ、とヒューイットは内心嘲笑った。

「どなたが君主になろうと、それは私の関知しないこと。ですが、秘書官として君主に相応しい王位継承者を正しい手続きで迎えたい。それだけのことです」

「なるほどなるほど。相変わらず生真面目な奴よ」

レノックスはつまらなげに目を閉じ、眉をひそめる。

「……父上もおまえのその堅物ぶりを気に入っていた」

モーティマーは黙って冷血公を見上げた。若い頃から王に可愛がられていた自分をレノックスが目の敵にしていたことぐらい、彼は知っていた。

「私はな、合理主義者だ」

突然、およそ似合わない言葉を言い出したレノックスにモーティマーは口をわずかに歪めた。

「使えるものは使い、使えんものは捨てる。あの女、捨てたいのは山々なんだが……」

王太后ベルのことだ。

「捨てるにしても捨て方に悩むところだ。とりあえずベイズヒル宮殿に幽閉することにした。そこで、おまえには監視係を命じる」

「……私ですか？」

思わず迷惑そうな顔つきをしたモーティマーに、レノックスは満足げな笑みを浮かべる。

「つまらん毎日になりそうだな？」

レノックスの真意を量りかね、モーティマーは黙って射るように凝視する。

「私は合理主義者だと言ったはずだ。おまえは秘書官としてこの宮殿の機能に熟知している。消すには惜しい」

それだけのことが……。秘書官という立場でなければ簡単に殺されていたかもしれない。自分がいつでも消される可能性がある存在だと思い知らされたものの、どこか他人事のような気がしてならなかった。

エドガー王に仕えて十年余り。モーティマーは彼なりに誠心誠意仕えてきたつもりだった。愛妾たちとの愛欲の生活に溺れ、妻への誠意は微塵も感じられず、庶子を溺愛する王。特にレノックスが次々としてかす醜聞に甘い処分を下し続け、国民や議会からの不満を逸らすのに多くの時間と労力を費やされた。しかし、その罪滅ぼしのつもりか、一方では救貧法を発布して貧しい者を保護し、教会や修道院に多額の寄付も行った。それ故に、農民や下層の市民らは王のふしだらさにも寛大だったのだ。

特にモーティマーは幼い頃から側に仕えていたために可愛がられた。そして、身勝手で傍若無人でありながら、王としての技量も兼ね備えていたことを知っていた彼は、王に対して余り悪い印象はなかった。そんな主君を失い、正直誰が王位に就こうがどうでもよかった。王は、死んだのだ。

「監視係では不満か？」

「いえ、別に」

虚ろな表情でモーティマーは頭を下げた。

「……仰せの通りにいたします」

レノックスがプレセア宮殿を手中に入れたその頃。王都イングレス郊外のサーセン聖堂では修道士たちが慌しく行き交い、礼拝にやってきた信徒たちは皆不安げに彼らの様子を見守っていた。

聖堂に隣接する僧坊の一室。ひとりの青年が椅子に腰掛け、数人

の修道士が忙しげに旅支度をしているのを黙って見守っている。否、その目は堅く閉ざされている。気品がある整った顔立ちをしているが、閉ざされた両目には青黒いクマが広がっていた。やがて、部屋の扉を叩かれる。

「司教……！」

どこか切羽詰った呼びかけに、眉をひそめながら修道士が扉を開ける。

「司教……！ イングレスに行つてはなりません！ ルール公がイングレスを支配下に置きました！」

瞬間、人々が絶句する中、司教と呼ばれた青年が目を閉じたまま顔をもたげる。

「……レノックスが？」

「その直前にグローリア女伯が王位宣言をしたのですが、ルール公の軍と衝突し、女伯は敗走したようです」

青年の顔がぴくりと引きつる。

「グローリア、女伯……？」

「……レディ・キリエ・アッサーです」

修道士の言葉に、青年は辛そうに眉間に皺を寄せた。

「……キリエ……」

それから数時間後。キリエたちは疲れきった体を引きずるようにしてクレド城に帰還した。日が長くなつたとはいえ、すでに夕刻に差し掛かっている。

初めて見るクレド城はグローリア城よりももっと大きく、威圧感のある城壁がそびえ立ち、オレンジ色に焼けた太陽を背に、その姿を黒く浮き上がらせていた。クレド城を見上げたキリエは、やがて憂鬱そうに黙りこくって目を伏せ、ジョンの呼びかけにも応じなかった。

今回のイングレス入りに率いられた軍勢は、クレドが擁する兵の三分の一にも満たなかったらしい。多くの兵たちが出迎え、そして周

辺の国境の周りを固めるため、守備隊が出動していく。

「殿、お帰りなさいませ」

クレド城代家令ハーバート・ビュート男爵が緊張した面持ちで出迎えた。

「お怪我は……」

「ない。警戒を怠るな」

「はっ」

「兄上！ キリエ様！」

振り返ると、城門のアーチからマリーエレンが駆け寄ってくる。

「皆様、ご無事ですか」

「キリエを頼む」

「キリエ様、お怪我は？」

マリーが腰を屈め、キリエの髪を優しく撫でる。が、固い表情のキリエはかすかに顔を横に振るだけだった。

「お可愛そうに……。お疲れでしょう。さ、体を清めましょう」

そう言って優しく手を取るとその場から連れ出す。

「ジョン、グローリアとトゥリーにも使いをやれ」

さすがに疲れた声でジユビリーが命令を下す。

「レスター、イングレスへの監視は……」

「斥候を放っております」

「よし」

男たちは重い足取りで城内へ入ると疲れた体に鞭打ち、城主の間に集まる。簡単な食事をワインと共に済ませると、三人はアングルの地図を広げ、これからの対策を練り始めた。

「ルール公がすでにイングレスに入っていたとは……」

「父王の死を聞いたらすぐさま戻ってくるだろうと予想はしていたが、……油断した。考えてみればすでに三日経っているのだ」

「プレセア宮殿はルール公の手に落ちた……。しばらくは、実質的なイングレスの支配者となりますね」

ジユビリーは大きく息を吐くと額を押さえた。事がうまく運ぶと

は思ってもいなかったが、イングレスでレノックスと戦闘に及ぶとは予想していなかった。キリエの精神的な動揺も心配だった。

「宮殿内の様子はいかがでしたか。キリエ様を拒む者たちはおりましたか」

「廷臣たちは歓迎していたよ」

レスターの問いにジョンが答える。

「皆、あの冷血公に比べれば修道女の方が良いに決まっている、といった態度だった。ただ、王太后は不満そうだったな」

「そういえば、王太后は今……？」

「さあな。どうなったか知ったことではない」

思わず本音を漏らすジュビリーだったが、レスターは眉をひそめる。

「しかし、ベル王太后はユヴェーレンのオーギュスト王の姫君。手にかけてとあつては、黙つてはおりますまい」

「レノックスも王太后を殺すほど馬鹿ではあるまい」

「そう願いたいのですが……」

レスターの考え深げな表情に、ジョンまで不安そうな顔つきになる。キリエを盛り立てる一派の中にあつて、最も老練な策士であるレスターを、ジュビリーも頼りにしている。重苦しい空気が流れる中、扉を控えめに叩く音がする。

「……兄上」

「入れ」

扉が静かに開かれ、思い詰めた表情のマリーが顔を覗かせる。

「キリエの様子はどうか」

「それが……」

「どうした」

「お体を清めて、食事をご用意したのですが、一口もお召し上がりにならないのです」

ジョンが思わずジュビリーを振り返る。

「戦場で怖い思いをされたのでしょうか。それにしても、一言も口を

きいては下さらないし……」

ジュビリーは椅子にもたれかかり、足を投げ出して天井を仰ぎ見た。およそジュビリーらしくない投げやりな姿だ。

「……義兄上……」

ジョンに促され、ジュビリーは重い口を開いた。

「……キリエに……、王太子を殺したことを告げた」

「い、いつ……!」

ジョンとマリーが顔を青ざめさせる。

「軍を退却させる時に……、教会へ帰ると言い出して聞かないものだから……」

「しかし……」

「キリエ様はまだ、兄上に対して不信感をお持ちです。そんな状態で王太子の件を持ち出すなど……」

「それなら」

首をもたげ、妹に視線を向ける。

「信頼関係を結んだ後になって真実を聞かされたらどうする。あの娘の性格だと、その方が打ちのめされる」

「それは、そうですが……」

「いずれにしろ、今の状況とキリエ自身の立場をわからせるためには、遅かれ早かれ告げねばならなかった。……確かに、あの場で告げたのが正しかったかどうかは、わからんがな」

ジュビリーの言葉に三人は押し黙った。しばらくするとジュビリーは重い溜め息を吐き出すと、体を起した。

「近い内にレノックスはクロイツに使者を送るだろう。大主教がどんな判断を下すか……。これまでに、行いの悪いレノックスに対して何度も破門をちらつかせてきた大主教だ。まさか戴冠要求を受け入れるとは思わんが」

「クロイツを味方に引き入れなければなりませんね」

「大主教の周辺に人をやります」

「頼む」

男たちの会話を、マリーはひとり不安げな表情で見守っていた。

「何か必要なものがあれば、いつでも仰って下さいませ、レディ・キリエ。外に歩哨を立たせておきます故」

華美な衣装から多少落ち着いたワンピースに着替えたキリエは、強張った表情で頷いた。城主と違って人が良さそうな顔つきをした家令は、誰も寄せ付けない固い表情を崩さないキリエを気の毒そうに見つめてから部屋を退出した。扉が閉まるとキリエはゆっくりと窓辺に歩み寄り、外を眺めた。夕暮れの陽射しがクレド城の城壁を照らし、城壁の周りには静かな町が広がっている。その向こうには見慣れた田園風景が広がる。

外に歩哨を立たされていては、自由に部屋を出ることもできない。キリエは自分の立場を思って戦慄した。戦闘の恐怖もまだ癒えていない。そして、先ほど聞かされたジュビリーの告白。キリエは、まるで悪夢を見ているようだった。

王太子エドワードは、五年前に狩りの最中に落馬が原因で夭折したとされていた。まだ十歳だった。それが落馬ではなく、ジュビリーによる暗殺が真実だったとは。エドワードは自分の異母兄だ。実権を握るつもりで王太子に手をかけ、自分を女王に擁立したとしたら……。

（言うことを聞かない私に業を煮やせば、私も殺すかもしれない）
キリエは胸騒ぎを覚えながら呟いた。

（権力のために人を殺すのであれば、レノックス・ハートと一緒にだわ。私は、どうすればいいの……）

考えていても答えは出ず、キリエはよろよろと窓から離れると部屋を見渡した。壁に、美しい細工が施された地図が飾られている。見るとこのクレド及びグローリア周辺の地図だ。キリエはじつとその地図を見つめ、やがて再び窓を眺める。日が先ほどよりも落ちていく。胸騒ぎが一段と強まる。キリエの脳裏に、オリヴァー・ヒュースの言葉が響く。

「あなたも、鳥籠同然の暮らしには戻りたくないでしょう」

（鳥籠……）

キリエは呆然と呟く。

「そうだ……。鳥籠に戻れば良い……」

キリエは窓際に駆け寄った。日が落ちる方角を確かめ、地図を仰ぎ見る。外の世界を歩いたことはほとんどないが、今はそんなことを言っている場合ではない。まずは、ここから逃げなくては。キリエは忙しなく呼吸を繰り返し、必死に考えを巡らした。窓から身を乗り出すと、城壁の遥か下の方で農夫たちが荷車を数台率いて城の召使と話をしているのが見える。あれだ。キリエは扉に駆け寄ると拳で力いっぱい叩いた。扉のすぐ外で歩哨に立っていた兵士はびつくりして飛び上がると、慌てて扉を開く。

「いかがでしたかッ」

「や、薬草よ！」

キリエが上ずった声で叫び、歩哨は眉をひそめる。

「早く薬草と水を持ってきて！ でないと、私……、し、死んでしまっわ！」

死ぬと言われて歩哨は慌てた。

「な、何があつたのですかッ」

「いいから早くッ！ 毒消しの薬草を持って来てッ！」

キリエに煽られ、歩哨は慌てふためいてその場を走り去った。その後姿を見送ると、キリエは部屋を飛び出した。

クレド城はグローリア城よりも大きい。キリエは息を潜めて石の廊下を走った。時折、侍女や従者の姿を見かけると、飾られた調度品に隠れるなどしてやり過ごす。最上階から三階ぐらいまで降りたものの、キリエは道に迷ってしまった。不安げにおろおろと周りを見渡していると、どこからか人々の話し声が近付いてくる。慌てたキリエは、手近にあった小部屋の扉を押すと中へ飛び込んだ。すると、

「きゃッ」

そこは急な斜面になっており、キリエは闇の中に転がり落ちていった。

「痛ッ……!!」

壁に体を強打してようやく止まると、キリエは顔を押さえながら立ち上がる。闇の中で壁を探ると取手らしきものがあり、そつと押し開く。さつと光が流れ込み、同時に土や草の香りが鼻をつく。恐る恐る顔を出すと、すぐそこは屋外だった。辺りに警戒しながら出ると背後を振り返る。どうやら緊急用の脱出口だったらしい。キリエは体を低くしながら城壁伝いに駆け出した。そこへ、賑やかな話し声が聞こえてくる。城壁に身を隠しながらそつと様子を窺うと、農夫たちが談笑しながら藁束を庭に放り投げていく姿が見えた。キリエは農夫たちが作業を終えようとしているのを見計らうと、荷馬車に飛び込んだ。中には農具を入れる大きな麻袋が何枚もあり、その中のひとつに潜り込む。

やがて農夫たちは作業を終えると荷馬車につないだ馬に鞭をくれ、城門に向かった。キリエは、息を殺して荷馬車が揺れるのに身を任せた。

国境周辺の警備に抜かりがないか、ジュビリーがレスターと話しながら廊下を歩いていると、マリーエレンの声が響き渡った。

「兄上！ 兄上！」

顔をしかめて振り返ると、妹と兵士が血相を変えて駆け寄ってくる。

「どうした」

「き、キリエ様がッ……!!」

マリーが息を切らして叫ぶ。

「キリエがどうしたッ」

ジュビリーの詰問に兵士が答える。

「さ、先ほど、女伯がただならぬご様子で薬草を持ってくるように仰せられて……、そ、それで慌てて医師の元へ行き、戻ってくると

……、女伯のお姿が……！」

ジュビリーの無表情だった顔に険しい皺が刻まれる。

「この……、馬鹿者がッ！」

思わず握り拳で兵士の顔を殴りつける。呻き声を押し殺してその場にひれ伏す兵士。レスターが真つ青な顔でジュビリーを振り返る。

「い、一体どこへ……！」

「探せ！ 城内をくまなく探せ！ 城の外もだ！」

その場にいた兵士や召使いたちが慌てて四方へ散る。

「城の外へ出られるでしょうか。まだこの城の内部を熟知していないキリエ様が……」

「手負いの狐は何をしでかすかわからん。最悪な事態は避けねばならん……！」

「はッ！ グローリアにも知らせろ！ 一刻も早くキリエ様を連れ戻すのだ！」

レスターの怒鳴り声が響き渡る。ジュビリーは大きく呼吸を繰り返し、唇を噛み締めた。

「キリエ……、早まるな……。おまえにはまだ、話さなければならぬことがたくさんあるのだ……！」

荷馬車の荷台から、そつと顔を出して外の様子を窺うキリエ。すでに日は落ちかけ、辺りは暗くなり始めていた。やがて、通り過ぎてゆく道の傍らに里程石マイルストーンが見えてくる。キリエは思い切つて荷台から飛び降りた。帰路を急ぐ農夫たちは、荷台からキリエが飛び降りたことにも気づかなかつた。道端に転がり落ちたキリエは、痛みに顔を歪めながら体を起こした。マイルストーンまで歩み寄ると、沈む夕日の最後の光で刻んである文字を読み取る。

西、クレド。東、グローリア。

ロンディニウム村はクレド伯領との境に近いグローリア伯領だ。キリエはごくりと唾を飲み込むと、意を決して夕日を背に歩き始めた。

やがて日は落ちた。キリエは飲まず食わずの状態でひたすら歩き続けた。幸いなことにこの日は満月だった。月明かりは思った以上に足元を照らしてくれる。轍がひどい道をとぼとぼと歩く。左右には寂しげな細い白樺が月光を受けて青白く浮かび上がっている。キリエは俯き、できるだけジュビリーのことは思い返さず、教会で過ごした日々を思い出した。

静かで落ち着いた教会だったが、キリエが成長することに明るさが増していくようだった。教会の人々は皆キリエを可愛がってくれた。今思い起こせば、ロンディニウム教会にはキリエと同じ年頃の子どもはいなかった。そのため、彼女は皆の子どものように大事に育てられた。

幼い頃、大怪我をした時にロレインが処方してくれた薬草で傷が癒えた経験があった。それから薬草に興味を持ち始め、自分の薬草園を作った。手をかければかけるほど質の良い薬草が採れ、キリエは夢中になった。

いつも暗い表情で沈黙しているボルダー司教よりも、キリエは厳しくも優しいロレイン修道女が大好きだった。ロレインはキリエに読み書きや計算だけでなく、アングルはもちろん諸外国の歴史まで教えた。そして、ヴァイス・クロイツ教にとつての公用語であるユヴェーレン語に留まらず、エスタド語やガリア語まで伝授した。キリエは、孤児でありながら四ヶ国語に精通した少女に成長した。

「今思えば」とキリエは胸の中で呟く。あれが彼女なりの英才教育だったのだ。だが、教会を出たあの日、キリエを抱きしめて「この日が来なければ」と呟いたロレイン。彼女にとつてもキリエは娘のような存在だったに違いない。キリエは、胸が締め付けられる思いだった。

もうすぐロンディニウム教会へ、ロレインの元へ帰れる。息が切れながらも気力を振り絞って歩みを進めていたキリエの耳に、不意に馬の嘶きが飛び込む。

「！」

ぎよつとして立ち止まり、周囲を見渡すと、遠くから複数の馬の
だく足の音が響いてくる。狼狽たえたキリエはしばらく立ち尽くし
ていたが、やがて慌てて白樺の根元に身を隠した。

それから数分後、十数メートル前方を数頭の騎馬が駆け抜けていっ
た。武装した兵士なのか、それとも民間人なのかは暗くてよくわか
らない。キリエは息を殺してその様子を見守った。

馬の集団が通り過ぎた後、かなり時間が経ってからキリエは体を起
した。膝ががくがくと震えており、思うように歩けない。キリエは
道の中央に這うように戻ると、顔に涙が流れていることに気づいて
その場にへたり込んだ。汚れた手で顔の涙を拭う。すると、月明か
りで指輪がざらりと光る。思わず左手を見つめると、月光を受けた
赤い蝶が毒々しい血のような光を放っていた。

「……！」

唐突に、背筋が寒くなったキリエはとつさに指輪を外そうとした
が、何故か指輪は指の途中で止まった。キリエは震える指で蝶をそ
っと撫でる。

「……どうして……」

キリエはかすれた声で呟いた。

「どうして、私が、こんな目に……？」

涙がぼろぼろと零れ落ちる。顔を歪め、体を丸めてキリエは突然
自分の身に起きたことを思い返した。

遠縁と名乗る黒衣の伯爵。祖父との出会いと別れ。絢爛豪華な王宮
で行われた王位宣言と、その後の乱闘。キリエには、何が起きてい
るのか、皆が何を望み、自分をどこへ連れていこうとしているのか、
皆目わからなかった。もう嫌だ。もう、あんな所には戻らない！

キリエは顔を拭くと、ゆっくりと立ち上がった。

第1章「ロンディニウム教会の修道女」第4話（前書き）

クレド城を飛び出したキリエはロンディニウム教会へと向かった。
だが、そこで彼女を待ち受けていたのは。第1章完結。

第1章「ロンディニウム教会の修道女」第4話

真夜中のロンディニウム教会。眉間に皺を寄せたロレイン修道女の表情を、弱々しい蠟燭の明りが照らし出していた。経典を開いてはいたが、視線はそこに注がれてはいない。小さく息を吐くと、窓から見える月を見上げる。

夕食時に、イングレスから早馬が着いた。その報せによると、「グローリア女伯レディ・キリエ・アッサー」が王位を宣言したが、ルール公レノックス・ハートがプレセア宮殿を急襲したと言う。グローリア女伯は敗走したらしいが詳しいことはわからない。その報せにロレインの顔は青ざめた。

村では、キリエのことは誰も口にしようとはしなかった。教会の修道女が不意に姿を消したかと思うと、実は領主の孫だったと知らされ、村人たちは啞然とした。更には国王の庶子であり、間もなく王位を宣言するとなると、村人たちは歓迎どころか自分たちの身の安全を心配し始めた。次期国王の候補としては悪名高い冷血公がいる。キリエはルール公に消されるのではないか。そうなると、このグローリア伯領も無事では済まないかもしれない。現に、プレセア宮殿に到着したキリエはレノックスに襲われ、内戦が始まった。キリエの屈託のない明るい笑顔を思い出し、村人たちはひそかに彼女を哀れんだ。

ロレインは静かに立ち上がり、窓を開くと月に向かって手を合わせる。

（キリエ……、どうか無事で……。命があれば、必ず光は差します）
抑えきれない胸騒ぎを感じながら、ロレインはひたすら祈った。
彼女は、キリエが教会にやって来た日を昨日のことのように記憶していた。

あの日、一台の馬車が目人を避けるようにやってくると、グローリア伯爵ベネディクト・アッサーと、幼子を連れた侍女が現れた。

唐突な領主の訪問にロレインやボルダーは驚いたが、ベネディクトの申し出にさらに啞然とした。

「この子は私の孫だ」

ベネディクトは愛おしげにキリエの髪を撫でながら呟いた。

「父親は……、国王陛下だ。だが、この子の母親である私の娘は先日病死した。王には嫡男がいらずしやるが、王宮の陰謀に巻き込まれないという保証はない。ここで……、修道女として育ててほしい。誰の目にも触れぬよう」

領主の申し出にボルダーは難色を示したが、キリエのあどけない姿に心を奪われたロレインはじつと幼子を見つめた。ロレインの視線に気づいたベネディクトは彼女に孫を抱かせた。修道女であり、結婚して子を産むことができないロレインは嬉しそうにキリエを抱き上げた。キリエは大きく目を見開くと、ロレインを見つめて囁いた。

「……ははうえ」

ロレインは思わず息を呑んだ。ベネディクトは悲しげに目を細めた。思えば、ケイナはちょうどこの修道女と同じ年頃で逝ってしまった。

「キリエ……、その人は母上ではないぞ」

祖父の言葉に振り返ると、キリエは顔を歪めた。

「ははうえ……。ははうえは？」

戸惑った表情で母を探すキリエを、ロレインは思わず抱きしめた。その様子を見守っていたベネディクトは、ボルダーに再び頼み込んだ。

「できるだけ、私の目が届くところで育てたいのだ。頼む、ボルダー司教」

そして、キリエはロンディニウム教会に受け入れられた。今から十二年前のことだ。

やがてロレインは静かに目を開け、教会の庭を見下ろした。そして、何気なく教会に巡らされた垣根を見つめていると、垣根の一角が不

自然に動いているのに気づく。

「……誰です？」

警戒しながら声高に呼びかける。垣根は一瞬動きを止め、静まり返る。

「……………」

しばらく見つめていたロレインが、狐か何かだろうかと思った時。垣根からそっと少女が顔を出す。

「誰？」

驚いたロレインが小さく囁く。

「……ロレイン様……！」

「……キリエ！」

思わず口を手で押さえる。

「そ、そこにいなさい！」

ロレインはそう囁くと部屋を飛び出した。音を立てないように階段を下り、庭へ出るとキリエを引き寄せ、思わず抱きしめる。

「よかった、無事で……！」

涙声でそう呟くロレインに、キリエは夢中ですがりついた。懐かしい、優しいロレインの温もり。彼女は体を離し、キリエの顔を覗きこんだ。

「プレセア宮殿でのことは聞きました。クレドに落ち延びたのではなかったのですか？」

疲れきった表情でキリエは顔を横に振る。

「……逃げてきました」

その一言で事情を察したロレインは、そっとその場から連れ出すと周囲に気づかれないよう自室へ導いた。

部屋へ辿り着くと、キリエは張り詰めていた力がほどけ、その場に崩れ落ちた。慌てて抱き起こそうとするロレインが思わずキリエの腹に触れ、息を呑む。

「あなた……、何も食べていないの？」

無言で頷くキリエを見ると、ロレインは再び部屋を出た。音を忍

ばせて廊下を下りてゆき、厨房へ向かう。通路の角を曲がったところで、

「ロレイン？」

「……！」

飛び上がって振り返ると、ランプを手にしたボルダー司教がひっそりと立ち尽くしている。

「……司教様」

「先ほど物音がしたと思ったが……、おまえも聞こえたか」

「は、はい」

ロレインはぐくりと唾を飲み込むと平静を装った。

「見てまいりましたが、……狐でした」

「そうか。最近増えておるからな。困ったものだ」

「はい……」

背を向けようとしたボルダーだったが、陰気な表情でロレインを見つめなおす。

「……どうした。顔色が悪いぞ」

「……いえ、何でもございません」

それでも目を眇めてロレインを見つめるが、やがて肩をすくめる。
「早く休むようにな」

「はい」

ボルダーがゆっくり自室へ帰っていくのを見届けると、ロレインは足早に厨房へ向かい、ミルクと黒パンを持って自室へ戻る。キリエに差し出すと、彼女は無言で貪り食べた。思えば夜明け前にグロリア城で朝食を食べたきりだ。それから丸一日食べていない。ロレインは、キリエの傷だらけの両足に気づいた。

「まさか……、クレドから歩いてきたの？」

食べながら頷くキリエ。グロリアからクレドまで、馬車でも二時間はかかる。少女の足なら倍以上はかかる。ロレインは思わず涙目になる。

「そこまでして……、クレドからここへ……」

キリエは食べる手を止めた。強張った表情でしばらく黙り込むと、かすれた声で呟く。

「……死ぬかと思いました」

「……キリエ」

「初めて……、ルール公をお見かけしました。あ、あんな人が……、私の兄だなんて……」

「でも、このままだとそのルール公が国王になってしまっわ」

「もう、関係ありません……！」

キリエが声を詰まらせながらも呟く。

「誰が君主になるうと……、関係ありません……！ 私は、修道女にしかありません。今から女王になるなんて、考えられません！ 私を放っておいて……！」

啜り泣きを始めるキリエをそつと抱き寄せ、ロレインは言い含めた。

「あなたが背負うには重すぎる運命だとは、わかっています……。でも、あなたはまだ知らないでしょうが、ルール公の黒い噂は数え切れません」

キリエがそつと顔を上げる。

「国王が催した馬上槍試合で、相手が降参したにも関わらず攻撃を続け、死に至らしめたことがありました。他にも、愛人の夫から決闘を申し込まれ、返り討ちにしたことも数回ありました。それらのほとんどを、エドガー王は甘い処分で済ませています。それに、父王に溺愛されている異母兄弟を妬み、危害を加えたという話も……」

キリエが思わずびくりと体を震わせる。ロレインは真っ直ぐキリエを見つめて続ける。

「ベネディクト様はその噂もあって、レディ・ケイナが亡くなった後にあなたをここへ預けたのです。修道女として生涯を捧げる姿を見せることで、あなたに累が及ばないようにと……。ですが、周りの状況がそれを許さなかった」

「おじい様……」

「クレド伯はベネディクト様の意向を汲んでいるはず。クレドへ、お帰りなさい」

「い、嫌です」

キリエは低く呟いた。ジュビリーの言葉が頭を離れない。異母兄エドワードの殺害を告白したジュビリーの元に帰るなど、考えられなかった。

「キリエ……」

「帰りたく、ありません」

頑なに拒むキリエを、ロレインは困り果てた様子で見つめた。何があつたのだらう。城を抜け出し、ロンディニウムまで夜通し歩いて逃げ帰つたのだ。よほど耐え難い何かがあつたのだらう。ロレインはそう想像するしかなかった。やがて、彼女の脳裏にある考えが浮かぶ。キリエの手をそつと取ると囁く。

「……キリエ。この国を出る決意が、できますか？」

「え？」

ロレインの言葉にキリエは眉をひそめる。

「クロイツへ逃げましょう」

クロイツ。ヴァイス・クロイツ教の聖地。王家の戴冠権を持つ大主教が君臨する宗教都市国家。今や、このアングルを制するがために、クロイツへの注目が高まっている。王位を捨て、クロイツへ逃げ込めば大主教は自分を迎え入れてくれるだらうか。それとも、王位を否定し、一介の修道女になれば、大主教は自分への興味を失うだらうか。

「大主教猊下は、私をどうするでしょうか……」

「自治都市であるクロイツへ留まることができれば、アングルから干渉を受けずにすみませう。猊下があなたをどう扱うかはわかりませんが、冷遇はしないでしょ。アングルに留まるよりは、安全かもしれません」

一種の賭けだ。だが、このまま危険なアングルに留まるよりはいいかもしれない。可能性に賭けよう。キリエは頷いた。

「……クロイツへ、行きます」

ロレインも頷く。

「今は少し眠りなさい。夜明け前にここを出ましょう」

「はい」

短い食事を済ませるとキリエは部屋の隅に蹲り、束の間眠りに落ちた。その間、ロレインは静かに身の回りの品を揃えた。

東の空がわずかに白み始めた頃。キリエは自ら目を覚ました。

「……ロレイン様」

「……起きましたか」

ロレインが囁き返す。クロイツとアングルの間には海が隔たっている。最短経路でも、アングル島最東端の街ホワイトピークまで行き、船に乗らねばならない。まずそこまで辿り着けるのか。ロレインが不安な胸の内を隠しながら、キリエに服を着替えさせようとした時。突然扉を叩く音で二人は飛び上がった。

「ロレイン。……ロレイン、いるのだろう？」

ボルダーの声だ。おろおろするキリエを、ロレインはとりあえずベッドの下に押し込む。

「し、司教様？」

「開けなさい」

「何事ですか」

ロレインが鍵を開け、扉を開くときよつと立ち尽くす。ボルダーの背後に立っているのは村一番の嫌われ者、粉挽き職人のウィルキンスだ。

「ウィルキンス？ 何故……」

最後まで言わず、ウィルキンスは突然押し入るとロレインの腹部にナイフを叩き込んだ。

「うッ……！」

呻き声を上げると、ウィルキンスの肩を突き飛ばすが、その拍子にロレインの腹から鮮血が迸る。

「ロレイン様ッ！」

思わずベッドの下から叫び声を上げるキリエ。するとウィルキンスが笑い声を上げて部屋へなだれ込む。

「そこにいたのか、修道女！」

そう叫ぶとキリエをベッドの下から引きずり出すが、彼女はウィルキンスの手を振りほどいて倒れこんだロレインに駆け寄る。

「ロレイン様！　ロレイン様！」

「……！」

一瞬苦痛に歪んだ表情のロレインが目を開け、キリエを見つめるが、やがてぐったりと仰け反る。

「……ロレイン様……！」

なおも叫ぶキリエをボルダーが引つ張り上げる。

「し、司教様……！　何てことを……、何てことをッ！」

「おまえこそ、何てことをしてくれたのだ」

ボルダーの乾いた声がキリエに投げつけられる。彼の顔はいつもと変わらず陰鬱で気が滅入りそうな表情をしていた。

「おまえが王位宣言をしたことで内戦が起こった。この村もグローリア伯領だ。ルール軍の攻撃に晒されるだろう。平和な村を、おまえが危険に晒したのだ」

思ってもみなかった言葉を突きつけられ、キリエは耳を疑った。

そして、逃げ出そうとするキリエをウィルキンスが腕をねじ上げる。

「痛ッ……！」

「可愛そうなロレイン修道女！　こんな疫病神を可愛がったばかりに、命を落とす羽目になるなんてな！」

「……！」

自分のせいでロレインが殺された。この事実気づかされたキリエは言葉を失った。自分のせいで、人が死んだ。プレセア宮殿での戦闘でも犠牲者が出たはずだ。キリエは、自分が振りまいた悲劇にようやく気づいた。

「ろ、ロレイン様……。ロレイン様ッ！」

「黙ってろって！」

ウィルキンスは用意していた布でキリエに猿轡をかませ、両手を縛った。

「よくやった、ウィルキンス」

無表情のまま、ボルダーが囁く。

「さて、ドビーまで行かねばな」

「はい。あそこがルール公の最南端の荘園です」

ルール公の荘園。そう聞いてキリエの背筋に寒気が走る。身をよじって抵抗するが、ウィルキンスに髪を引っ張られ、声なき悲鳴を上げる。まだ薄暗い教会の庭を抜けると、いつのまにか馬車が用意されている。

「じつとしている、キリエ。おまえをできるだけ無傷でルール公に引き渡さねばならん」

感情のない声でボルダーはそう告げると、キリエを馬車に押し込んだ。ウィルキンスが御者座に座ると、馬に鞭をくれる。

「ドビーまでは長旅だ。おとなしくしていた方が身のためだ」

ボルダーの声も、気が遠くなりかけたキリエにはかすかにしか聞こえていなかった。

夜明けと共に馬車は出発した。北上する馬車をやがて朝日が包むが、車内は車輪が軋む音以外は何も聞こえなかった。ボルダーは、気を失ってもたれかかっているキリエをじつと見下ろした。十二年間手元で育ててきた娘だったが、ルール公に引き渡すのに躊躇いはなかった。

ベネディクトからキリエを預けたいと申し出があった時も、ボルダーは厄介事は御免だと拒んだ。その七年後だった。教会にジュビリーが現れるとエドワード王子が亡くなったことを告げられ、このままベル王妃が新たな嫡子を産まなければ、キリエにも王位継承権が発生する旨を伝えられた。もしもそうなった場合、自分がすぐに迎えに来る、とジュビリーは言った。ボルダーは、その時から国政の争いに巻き込まれる懸念を強めていた。ジュビリーはその時キ

リエを目にしている。彼女はまだ九歳だった。お互い言葉を交わすことなく、ジュービリーはそのまま立ち去っていった。

それから更に四年経った今、ボルダーが心配していたことが現実に起きた。国はルール公に傾いている。何も自分から危うい立場になることはない。疫病神は必要とされる場所へ連れて行くに限る。

ボルダーは、ルール公にキリエを引き渡すことで保身に走った。ロレインを手にかける予定はなかったのだが、このまま教会に帰るつもりもなかった。自分の赴任先はこれからルール公に決めてもらえばよい。何なら聖職を辞しても構わない……。

馬車を走らせること四時間余り。グローリアを出て、ドビーの地へ入った。ウィルキンスは莊園の城代の屋敷を目指した。

やがて城代の屋敷へ到着すると、ボルダーは門番に来意を告げた。城代は驚いたが、喜んだ様子で早速早馬をインGRESへ向かわせた。ボルダーたちはそのまま屋敷に招かれ、体を休めた。

屋敷に到着してしばらく経ってキリエは目を覚ました。そして、見知らぬ室内に驚愕し、怯えた。一度家人がキリエの様子を見に来たが、猿轡や腕の戒めを解くことなく放置された。

キリエはぐったりとしながらも、これから自分の身に起こることを想像し、体を小さく震わせた。そして、ロレインの死に際の様子を思い出し、思わず目から涙が零れ落ちる。

（ロレイン様……。私のせいで……。私のせいだわ……。！ 全て私のせいで……。！）

あのままクレドの城に留まっていれば、少なくともロレインは殺されずにすんだ。キリエは自分を責め続けた。助けが来るなど考えられなかった。自分はジュービリーの元から逃げ出したのだ。自分が今ここにしていることなど、彼は知る由もあるまい。もう、自分のことなど見限ったに違いない。もう、終わりだ。これで全てが終わる。自分だけでなく、ロレインも犠牲となる、最悪の結末になったことにキリエは絶望した。

その頃、クレドの部隊がグローリア伯領へ向かっていた。クレド城内をしらみ潰しに探したがキリエの姿はなく、領内を搜索し始めた矢先、ジュビリーはあることに思い立った。プレセア宮殿から脱出する際、キリエが口走った言葉を思い出したのだ。

「教会へ帰るのよッ！」

（まさか……）

ロンディニウム教会まで帰るつもりか。まさか。しかし、自分は先ほどこう言ったではないか。「手負いの狐は何をしでかすかわからん」と。

武装したジュビリーは部隊の先頭に立っていたが、やがて数騎の騎士を従えた家令のハーバートがやってきて声を張り上げた。

「大変です、殿……！」

「どうした」

「ロンディニウム教会の修道女が殺され、ボルダー司教の姿が見えないとのことですよ！」

「何だと」

ジュビリーの顔が紅潮する。

「その修道女はまさか……」

「ロレイン修道女です。ナイフで一突きだそうで……。それに、村の粉挽き職人も姿がないそうです」

あの生真面目な修道女が殺された。ということは、キリエは教会まで辿り着き、ロレインと再会できたものの、ロレインは殺され、キリエは連れ去られたというのか。誰に？ 消えたボルダー司教か？ 「義兄上」

一緒に搜索に加わっていたジョンが呼びかける。険しい顔つきのまま、ジュビリーが顔を上げる。

「……ここから一番近いルール公領と言えば、どこだ」

少しの間思索していたジョンが声を上げる。

「ドビーです。あそこはルール公領からやや離れていますが、ルール公の荘園があります」

「ジョン。辺りを搜索しろ。私はレスターとドビーに向かう」
「はッ！」

ジュビリーは手綱を引き、馬の腹を蹴った。

昼過ぎまで別室に放置されていたキリエは、やがて外の騒がしい音に気がついた。つい最近耳にした音だ。甲冑や武器が触れ合う音。キリエの全身から汗が噴出す。扉の向こう側でざわめきが続いたと思うと、ノックもなく不意に扉が開け放たれる。そこには、軽い武装姿のレノックス・ハートが立ちはだかっていた。キリエは顔を引きつらせ、息を呑んだ。レノックスは目を細め、口元に笑みを浮かべると部屋へ入ってきた。後にボルダーが続く。

「まさか、こんな形で再会しようとはな」

レノックスが優しく声をかけるが、キリエは長椅子の上で身を振り、後ずさる。

「ボルダーと言ったな」

「はい」

「最低な人間だな、貴様」

そう言つてくつくつと笑い声を零すレノックス。

「司教でありながら、十二年間手塩にかけて育てた娘を平気で敵方に引き渡すとはな」

「ルール公は敵ではございません」

白々しい物言いに、さすがのレノックスも呆れ顔で振り返る。

「聖職者の風上にもおけん奴だな。その汚れた身で教会に戻るつもりか？」

「いえ、戻るつもりはございません」

「ふん」

レノックスは鼻で笑うとヒューイットを呼びつけた。オリヴァー・ヒューイットがやってくると、猿轡をかまされたキリエを一瞥し、にやりと笑う。

「お呼びでございますか」

「この汚れた司教に金をやっておけ」

「はっ」

ボルダーは深々と頭を下げると部屋を出ようとした。その時、長椅子に蹲っていたキリエが突然立ち上がると、縛られた両手でボルダーの背にしがみついた。

「キリエ！」

驚いたボルダーが倒れこみそうになるが、ヒューイットがキリエを引き剥がす。が、キリエは怒りのこもった瞳でボルダーを睨み付け、両手で顔を殴りつける。

「おやめなさい、レディ・キリエ！」

ヒューイットがキリエの腕を押さえつけ、ボルダーを部屋から追い出す。ボルダーは怯えた顔つきで這うようにして部屋を出ていった。

「なかなか勇敢じゃないか」

まだ暴れるキリエを、レノックスは安々と押さえつけ、ヒューイットに部屋を出るよう目配せする。扉が閉まる音がやけに響き、キリエは途端に体を硬直させた。レノックスは微笑みながらキリエの猿轡をほどいてゆく。

「改めて名乗らせてもらおう。私がおまえの兄、ルール公爵レノックス・ハートだ」

「……あ、兄なんかじゃ、ないわ……！」

部屋に二人きりになり、恐怖に怯えながらもキリエは精一杯叫んだ。レノックスは目を細め、口元に冷たい笑みを浮かべると妹の頬を撫でた。

「そう冷たいことを言うな。我々兄妹は残りわずかだ。残された者同士仲良くしようではないか」

残りわずか。その言葉にキリエは恐怖した。レノックスは異母兄弟に危害を加えたとロレインが言っていたではないか。レノックスの精悍な顔が残忍な笑みを浮かべ、ジュービリーに斬りつけられた傷が引きつる。

「……懐かしいな。あの頃、父上に抱かれていたおまえはまだ乳飲み子だった」

そして、キリエの耳元で低く囁く。

「クレド城から逃げ出してグローリアの教会まで戻ったのか？ 見上げた根性だな。そこまでして、あの男から逃げたかったのか」

あの男。ジュビリーの顔が脳裏をよぎる。

「だが、逃げ出したのは正解だったな。私は自分が冷血公と呼ばれていることぐらい知っている。だが、あの男だって相当なものだぞ？ 自分の妻を父上に寝取られたらしい。しかし、拳兵の動きなどついぞ見せなかった。事実ならば冷たい男よ」

国王に寝取られた？ 寝耳に水の言葉にキリエは戸惑うが、今はその事実を確かめる術も、またそんな余裕もなかった。レノックスはキリエの頬を片手で押さえつけ、顔を寄せた。

「や、やめて……！」

ぞくりと背が泡立ち、キリエは身を振った。嫌がるキリエの表情を楽しむように、レノックスは笑みを浮かべながら囁く。

「おまえが王位継承権を放棄すれば何の問題もない。おまえを手元で育ててもいい。あの気の触れた妹に比べたら、おまえは可愛らしいものよ」

気が触れた娘。どこかで耳にした言葉にキリエはぎよっとするが、レノックスが唇を首筋に這わせ、悲鳴を上げる。

「いやッ！ やめて！ は、放してッ！」

腹違いの妹であっても、レノックスの倫理観では関係ないらしい。彼は嫌がる妹のワンピースに手をかけると引き裂いた。

「いやあッ！」

「静かにしろ」

レノックスは慣れた手つきでキリエの口を押さえると空いている方の手でまだ小さなキリエの胸をまさぐる。

（やめて！ やめて！ やめて！）

キリエが頭の中で叫び続ける。レノックスの唇がキリエの胸に触

れた瞬間、キリエは大きく体を仰け反らせ、途端に手足が痙攣を起す。それでもレノックスは構うことなくキリエの体をまさぐり続けた。血を分けたはずの兄の唇が全身を這い回り、キリエは自分を失った。彼の手がワンピースの裾を捲り上げ、太腿を撫で回した時。扉を叩きつける音が響く。

レノックスが鋭く顔を上げると、その時彼は初めて部屋の周りから聞こえるざわめきに気づいた。

「公爵！」

ヒューイットの慌てた声。

「どうした」

「クレド軍が　　！」

「！」

クレドと聞いてレノックスは跳ね起きた。キリエがまるで人形のようにだらりと床に倒れこむ。扉を開け放つと、兵士たちが慌てふためいて武装を施し、屋敷を飛び出していく様子が目に入る。

「ジュビリー・バートランドか」

「周りを包囲されています！」

「馬鹿め！ 何故気づかなかった！」

レノックスはヒューイットを怒鳴りつけると部屋に戻り、まだ痙攣を繰り返しているキリエを無造作に肩に担ぐ。

ロングボウ

屋敷のホールまでやってくると、打ち込まれる長弓の矢によって壁や扉、窓が破壊される音が響く。クレド伯領は国王直属のロングボウ隊を率いることで知られていた。このロングボウ隊の名声はアングル国内だけでなく、外国にも知れ渡っている。

レノックスは屋敷の裏から屋外へ出ようとするが、そこではすでにレノックスの部下たちが白兵戦を繰り広げていた。下馬した騎士のひとりがレノックスに斬りかかるが、彼は顔色ひとつ変えずに剣を抜きざまに打ち返す。そして、体勢を整えると再び打ちかかってきた相手と切り結ぶ。しばらく剣を打ち合わせていたが、やがてレノックスが剣を大きく振りかぶり、相手を甲冑もろとも叩き斬る。

相手が崩れ落ちるが、キリエを抱えたレノックスも体勢を崩し、倒れこむ。

「公爵！ あれを！」

駆け寄ってきたヒューイットが指差す方向を見上げる。そこには、こちらを見据えた馬上の騎士がいた。黒一色の鎧に身を包んだ騎士。ジュビリーだ。視線が合った瞬間、ジュビリーは一直線に馬を走らせてくる。

「……ふん」

レノックスは薄ら笑いを浮かべると、地面に倒れたキリエの顔を落とす。気絶したキリエは口をわずかに開き、蒼白な顔で横たわっていた。彼女の紫色の唇を親指でなぞり、その顔をしばし見つめる。と、その時、地面に投げ出された左手の指輪が光る。レノックスが手首を引き寄せるとルビーの蝶がきらりと輝く。彼は目を細めると自分の左手に目を落とす。中指には、同じ金の指輪が嵌められている。台座には心臓ハートをあしらったルビー。レノックスの脳裏に、父エドガーが生まれたばかりの妹を抱き、あやしている姿が蘇った。

「………」

やがてレノックスは体を起こし、用意された馬の手綱を手取る。
「公爵、レディ・キリエは」

ヒューイットの短い問いかけに、レノックスはふんと鼻で笑って返す。

「……殺すのも面倒だ」

そう言い捨てるとレノックスは馬に跨り、その場を脱した。

「追うな！」

その様子を見たジュビリーが部下たちに怒鳴る。

「放っておけ！ キリエを確保したら、ただちにクレドへ帰還する！」

そしてキリエの元まで駆け寄ると馬から降りる。

「キリエ！」

キリエを抱き起こそうと腕を取った瞬間、ジュビリーはぎょつと

して凍りついたように硬直する。

蒼白のキリエ。一瞬死んでいるのかと思ったが、手足はまだ不規則に小さく痙攣を続け、引き裂かれたワンピースから死人のように白い肌が覗く。呼吸に合わせて小さな胸がわずかに上下している。首元や胸に引っかけ傷が見える。ワンピースが引き裂かれていることに、ジュビリーは動揺した。胸が激しく波打つ。頭の中を耳鳴りが鳴り響き、剣戟の喧騒も遠くから聞こえてくるようだった。

キリエの恐怖に歪んだ顔がぼやける。ぼやけた顔の輪郭はやがて徐々に別の女性の顔を形作った。

「……エレオノール……！」

思わず口走るジュビリーの脳裏に、妻の叫び声が響き渡る。

（ごめんなさい、あなた……！ ごめんなさい……！ 私……、私……！）

「伯爵！」

突然、レスターの野太い声が耳に飛び込む。肩を掴まれ、激しく揺さぶられる。

「しっかり！ お気を確かに！ キリエ様はまだ生きておいでです！ ここから早く逃げねば！」

まだ朦朧とした様子で、ジュビリーは覚束ない手つきでキリエを抱き起こし、背負うと馬に跨る。よろめくジュビリーをレスターが支え、しっかりと乗り込んだのを確認するとレスターは自らも馬に乗り、部隊に引き上げを宣言した。

誰かが火を放ったのか、屋敷から火の手が上がる。炎から逃げ出すように、クレド軍はその場から引き上げた。馬を走らせるジュビリーに、ようやく平常心が戻り始める。

（キリエ……。キリエ……！）

ジュビリーは背中中のキリエの体温を感じながら馬を走らせ続けた。

その頃、イングレスへ向かう馬車には、二人の裏切り者が乗り込んでいた。

「ひっひっ！　いくら頂戴したんです？　司教様！」

後ろの車内からボルダーの間延びた声が返ってくる。

「二千スターリングだ。さすがルール公だ」

「そりやすげえ！」

とは言え、その内の何割が自分の懐に入ってくるかをすでに考えているウィルキンスは、上の空で馬を御していた。

「可愛そうな娘たちだ」

だらしない笑みを浮かべ、ボルダーは呟いた。

「だが、私が悪いんじゃない。私は自分の身を守っただけだ。権力争いなどに巻き込まれるつもりは毛頭ないから……」

金貨の詰まった皮袋を愛しげに撫で、陰険な顔に下卑た笑みが浮かぶ。その時、ウィルキンスの目に土煙を上げて駆けてくる馬が飛び込む。

「！」

目を眇めると、武装した騎士が馬を操っている。華奢な騎士は、体に不釣り合いな大きい突き鉋槍オウル・バイクを構えている。

「ひッ……！」

慌てて手綱を引き、迂回しようとするが、騎士はバイクを振りかざすと馬車に突進し、ウィルキンスの胸を貫いた。

「……ぐあー！」

くぐもった呻き声を上げ、ウィルキンスは御者座から地面に叩きつけられた。

「ウィルキンス？」

ウィルキンスの叫びを聞いてボルダーが窓を開けようとした時、首筋を冷たい手が撫で、ボルダーは悲鳴を上げて振り返る。そして、息を呑み、顔を引きつらせて狭い車内で後ずさった。

「……ろ、ロレイン……！」

目の前に、殺したはずのロレインが蒼白の顔で睨みつけてくる。修道女のローブは血で染まり、血が滴る手がゆっくりとボルダーの顔を指差す。

「……神の裁きを受けるがよい」

地獄の底から響いてくるかのようなロレインの低い囁きに、ボルダーは声にならない喚き声を上げ、扉を蹴破って外へ転がり落ちる。そして腰を抜かして体を起せないでいると、騎士がゆっくり馬を歩ませてくる。

「お、お、お助けを……！」

ボルダーが狂気じみた声で叫ぶが、騎士は無言でパイクを振りかぶり、ボルダーの胸に突き立てる。ボルダーは一声甲高い悲鳴を上げると絶命した。

ジョンは兜を脱ぐと、二人の背徳者を見下ろした。そして、倒れたボルダーの脇に転がっている黒い皮袋をパイクで突くと、中からくすんだ黄金色の金貨が流れ落ちる。無表情でその鈍い輝きを凝視すると、やがて無言で馬首を巡らし、その場を走り去った。

ドビーの屋敷から馬を走らせること二時間。グローリア伯領の深い森に入ったところで、ジュビリーは馬から下りた。

「……キリエ……」

まだ青い顔をしているキリエの名を呼ぶ。そして、その時初めてキリエの両手が縛られていることに気づき、腰の短剣を抜く。戒めを解くと、キリエがわずかに声を上げる。

「キリエ」

ジュビリーが顔を寄せ、再び呼びかける。

「キリエ、しっかりしろ。キリエ」

「……………」

呼びかけにキリエは顔を歪めると、ゆっくり瞼を開く。焦点の合わない虚ろな瞳がぼんやりとジュビリーを見つめる。その目がゆっくりと彼の顔の輪郭を捉える。そして、「男」の顔だと理解したキリエはにわかに頭の中が冴え渡り、恐怖で顔を引きつらせた。

「いやーッ！」

耳を劈く悲鳴を上げると、ジュビリーの顔を押しつけ、腕を放そ

うともがく。

「や……！ いや……！ やめ……！ やめて……！」

「キリエッ！」

突然暴れだしたキリエに驚き、ジュビリーが腕を押さえつける。

「キリエ！ 落ち着け！ 私だ！ キリエ！」

聞く耳を持たず、もがき続けるキリエをレスターがジュビリーから引き離す。瞬間、我に返ったキリエは、地面に転がっている短剣を目にすると咄嗟にそれを掴み、喉に向ける。

「やめろッ！」

ジュビリーが腕をねじ上げると短剣を叩き落す。短剣を奪われたキリエは両手で顔を覆うと泣き崩れた。

「こ、殺してッ……！ 今すぐここで殺してッ……！」

瞬間、ジュビリーの体が硬直する。

（殺して！ あなた……！ 私を殺して……！ お願い……！ 私を殺してッ……！）

あの日、投げかけられた言葉。妻の怯えた目。狂気に満ちた叫び声。彼は顔を歪めると我を忘れて叫んだ。

「馬鹿者ッ！ 自分から命を捨ててどうするッ！」

ジュビリーの怒鳴り声に、悔しげな表情で顔を歪ませ、涙をぼろぼろと零しながらキリエは消え入りそうな声で囁く。

「私のせいで……、ロレイン様が殺されてしまった……。私は、生きていてはいけないんだわ……！ う、生まれてこなければ、よかった……！」

「キリエ！」

ジュビリーは項垂れるキリエの顔を両手で上げると、正面から怒鳴りつけた。

「どんなに絶望しても、生きることをやめるな！ 死ねばそこで終わりだ！」

「……嫌よ……、もう生きていたくない……。こんな目に遭うのは、もう嫌……！」

泣きじゃくるキリエの顔が、ジュビリーにはどうしても妻の顔と重なる。その泣き声も、仕草も、すべてが彼女と重なる。彼は顔を歪め、幻影を振り払うように頭を振った。

（何故だ？ 何故一度ならず二度までもこんな目に遭う？ 何故だ……！ 私は、また守れないのか。何もできないのか……！）

しゃくり上げ、泣き続けるキリエの前に座り込み、ジュビリーはキリエの両肩を力なく掴んだ。

「キリエ……、聞いてくれ」

今まで命令口調でしかなかったジュビリーが静かに呟く。

「私は妻を、エドガー王に奪われた」

「……！」

キリエがびくりと体を震わすと、涙で汚れた顔を恐る恐る上げる。ジュビリーの顔は疲労でやつれ、黒髪が汗で頬に張り付いている。

「あの男に襲われ、妻は身籠った。生まれてくる子は、我々の子として育てよう……。そう決意するまでにずいぶん時間がかかった。それでも……。妻がいれば……。エレオノールがいればそれでいい思っていた」

「伯爵……」

後ろで控えるレスターが苦しげに声をかける。そして、二人の様子を固唾を呑んで見守っている部隊の兵士たちを下がらせる。

キリエは息を呑んで目の前のジュビリーを見守った。そして、つい先ほどレノックスが口にしたことをまざまざと思い出した。

「あの男は、自分の妻を父上に寝取られた」

レノックスの父、エドガー・オブ・アングル。つまり、キリエの父親でもある。

「エレオノールは生きることを選んだ。絶望から這い上がるうとした。だが……。結局、出産と同時に妻も子も死んだ」

キリエは息を飲んだ。八年前、ジュビリーの妻が死んだ背景にはそんな残酷な真実があったのか。ジュビリーはしばらく黙り込み、やがてわずかに天を仰いだ。

「私は……、あの時すべてを失ったと思った。だがそれでも、私にはまだ家族と家臣がいた。潔く拳兵できない私は、あの男に復讐するためにエドワード王太子を殺した」

キリエは呆然として目の前の伯爵を見つめた。

「王太子を殺すことで、あの男から希望と未来を奪った。そんなことをしても妻は帰ってこない。そんなことは、言われなくてもわかっている！……罪の許しなど求めはしない。だが……、あの男から奪ったアングルの未来と希望は、ふさわしい君主に返さねばならん。それがおまえだ、キリエ」

「……私……？」

「おまえには、何の罪もない。だが、アングルの未来を取り戻すためには、おまえが必要だ。私が……、生きていく上でも……、おまえが必要だ」

ジュビリーは顔を歪めるとキリエの肩を掴む手に力をこめ、搾り出すように囁いた。

「……頼む。おまえは……、生きてくれ。生きてくれ……！」

父の悪行のせいで国が乱れ、自分の人生は大きく狂わされた。ジュビリーも愛する妻を辱められ、拳句の果てには永遠に引き離された。そして、彼は絶望から這い上がるために罪を犯してでも復讐を遂げた。

自分と自分の周りに起こったことが少しずつ明らかになり、キリエはようやく姿を現した現実と向き合った。自分に過酷な運命を突きつけたジュビリーだが、彼を救えるのは自分しかない。祖父ベネディクトが死の間際に願ったジュビリーの贖罪は、このことだったのだ。

ジュビリーの鎧から血が滴り落ちる。よく見ると顔には多くの細かい傷が付けられ、キリエの肩を掴む手も血で滲んでいる。キリエは肩を掴む手を取ると、両手で包み込んだ。

「……私がいなければ、あなたが傷つくことはなかった」

低い呟きにジュビリーは耳を傾けた。

「……あなたの罪は、私の罪です。あなたが地獄に堕ちるなら、私も一緒に堕ちます」

そう呟くと、キリエは祈るようにジユビリーの籠手「コイントレット」を自らの額に押し付けた。キリエの手は、小さいながらも不思議な力がこもっていた。ジユビリーは、小さな指と自らの指を絡めせるとしつかりと握り締めた。そして、彼はかすかに震える手で外衣「サークコート」を剥ぎ取るとキリエに羽織らせ、上からそっと抱き締めた。腕の中の小さな体の温もりに、ジユビリーは忘れかけていた何かを思い出し始めた。

夕方になつてから、キリエたちはクレド城に戻った。自分が後先も考えずに城を飛び出さなければ、こんな目に遭うこともなかった。ジユビリーやレスターたちを危険に晒すこともなかったし、ロレインが命を落とすこともなかった。ジユビリーはそのことで責めるような言葉は一言も口にしなかったが、後悔で頭が一杯のキリエは、外衣の裾を握り締め、無言で城門をくぐった。ちょうどその時、城にジョンが舞い戻った。

「義兄上」

馬から下りるとジョンが重い足取りで義兄の側へ歩み寄る。ジョンが持つパイクに血飛沫がべつとりと付着しているのを見て、ジユビリーは険しい顔つきで振り返る。

「……いたか」

「はい。二人とも地獄に送ってやりました」

ジョンの言葉に、キリエがゆっくり振り返る。自分とロレインを裏切ったボルダー司教のことだと察したキリエの表情からは、憎しみだけではない表情が見え隠れする。自分がいなければ、彼も道を踏み誤らなかつたかもしれない。そんな考えが頭をもたげる。それでも、彼のしたことは絶対に許せなかつた。

「皆様、ご無事で……！」

奥の間から出迎えたハーバートにジユビリーが短く命令を下す。
「医師を呼べ」

「はつ。すでに待機させております」

「キリエに……、食事を取らせろ」

「承知いたしました」

ホールに入ると、マリーエレンが転びそうな勢いで駆け寄ってくる。

「キリエ様！」

「……マリー……」

マリーは、外衣を羽織ってはだけた胸を隠すキリエを目にしてぎよつとした表情で立ち尽くした。そして、さつと兄に視線を向ける。強張った表情のまま、ジュビリーはマリーに向かって頷いてみせた。愕然としたマリーの目から涙が零れる。そして跪くとキリエを強く抱きしめた。

「……キリエ様……、キリエ様……！」

マリーは、兄の表情が何を意味しているのかすぐに理解した。八年前と同じだ。兄は、あの時と同じ顔をしている。

まだ出会って三日しか経ってないが、姉のような気持ちで接していたマリーにとっては我が身を引き裂かれるような思いだった。今まで何も知らされずに、外界から遮断された世界で育ってきた無垢な少女が過酷な運命に翻弄された上、辱めを受けるとは。

「……泣かないで、マリー」

小さな声で囁く。

「私……、大丈夫よ。体は、大丈夫」

その言葉がせめてもの救いだった。兄嫁エレオノールは、子まで孕んだ上に出産時に子と共に死んだ。もう、あんな悲劇は二度と目にしたくなかった。

マリーは顔を上げると、溢れ出す涙を拭う。目の前のキリエは目が腫れ、黒い隈が疲労を物語っている。

「マリーエレン、頼んだぞ」

頭上から、ジュビリーが低く呟く。マリーは頷きながら立ち上がると、もう離さないといった顔つきでキリエの両肩を抱く。その温

もりは、キリエが幼い頃からずっと慣れ親しんできた温もりに似ていた。そうだ、ロレインだ。彼女も言っていたではないか。

「良き女王におなりなさい」

その言葉が胸に響く。マリーがキリエを部屋へ連れて行こうと手を引いた時。

キリエが立ち止まり、ゆっくりと振り返る。その先には、疲労を背負ったジュビリーの後姿があった。彼は自分のために命をかけて戦っている。それが例え、私的な理由があったにしても、今は自分のために、アングルのために戦っている。

「……伯爵」

しわがれた、だがはつきりした声で呼びかける。ジュビリーが振り返り、じつとキリエを見つめる。

「……私、女王になります」

突然そう宣言し、ジュビリーよりもレスターの方が驚いた表情で振り返る。

「私、皆のために、女王になります。もう、逃げません」

目を眇め、真っ直ぐキリエの視線を受け止めたジュビリーは一歩前へ進み出た。

「私もだ。……もう逃げない」

この瞬間、キリエとジュビリーの長く険しい旅は始まった。

八月。入道雲が一面に沸き起こる夏空の下、武器が激しくぶつかり合う剣戟音や、馬の嘶き、怒号や悲鳴が聞こえてくる。うだるような暑さの中、まるで悪夢のように非現実的な光景だ。

堅牢な城を前にふたつの軍勢が激突し、城門付近で白兵戦が繰り広げられている。

白銀の甲冑に身を固めた少年騎士が長剣を振るい、相手の騎士を馬からなぎ倒す。剣を握り直した途端、吹き出た汗が兜から滴り落ちる。暑さで目眩がする。馬の手綱が緩んだ時、右後方から雄叫びが耳を裂いた。

「くッ！」

振り返りざまに相手の剣を打ち払うと、一瞬の隙も与えずに首元に剣を叩き込む。くぐもった呻き声も、更なる斬撃音で掻き消される。相手は馬から叩き落され、二度と起き上がろうとしなかった。そこへ、はるか前方から甲高い笛の音が鳴り響いた。

「殿下！」

騎士の一人が馬を駆って少年の元へやってくる。

「王軍が城を棄てたようです！」

「深追いするなッ！」

少年は疲れた声ながら短く命令を下す。

「兵も限界だろう。斥候を放ち、警戒を怠るな」

「はッ」

まだ幼さが残る声だが、その口調はしっかりしている。荒い息を整え、ごくりと唾を飲み込む。

敵軍が一齐に城から雪崩のように逃げ去っていく様子を見て、残された兵士らが関の声を上げる。その大歓声に包まれ、少年は兜越しに敵軍を見つめる。

「城を占拠する。国境に警備隊を派遣し、兵を休ませろ」

「はッ」

騎士は城の機能を手中に収めさせるべく、直属の部下たちを城の内部に侵入させた。

「しかし……、明らかに弱気になりましたな、国王陛下は」

「冷血公がアングルへとんぼ返りしたそうではないか」

興奮気味に振り返った少年が言い返す。

「援軍を失った父上が、最後の悪あがきを見せるのか、それとも……」

……

「しばらくルール公も帰ってはきますまい」

騎士の言葉に、少年は鼻で笑うと兜を脱ぎ捨てた。美しい金髪と、端正な顔が現れる。

「アングルは今それどころではなкаろう？」

大理石の彫像のように美しい顔は若々しいにも関わらず、その顔つきはまるで熟練の軍人のようだった。引き締まった表情に、汗が流れ落ちる。

「エドガー・オブ・アングル……。おいくつだったのだ」

「御年五四歳でいらっしゃったそうです」

「その歳で後継を決めていなかったというのか」

「エドワード王太子が十歳で急逝した後には、嫡子に恵まれなかったようでございますからな……」

少年は掌で額の汗を拭い、移動する軍勢の様子を目を細めて見守る。

「……庶子が複数いたな」

「はい。男子と女子がそれぞれお二人いらっしゃいます」

「後の災禍を考えずに……。迷惑な」

「……同感です」

少年は、彼の勝利を称える兵士らの歓声に手を振って答えると馬から下り、城のアプローチに向かった。

「今、アングルの王に最も近いのは誰だ」

少年の問いに、騎士は少し考え込むような顔つきをしてから答える。

「……ルール公が現在プレセア宮殿を占拠し、王都イングレスを支配下に置いているそうです。しかし、その直前に異母妹が王位を宣言し、そちらの勢力も未だ服従していないそうですございます」

「妹……？」

少年が振り向く。

「レディ・キリエ・アッサー。グローリア女伯爵だそうです。何でも、祖父の後を継ぐまでは地方の教会で育てられたとか」

「修道女……」

少年は歩みを止め、眉をひそめて黙り込んだ。

（伯父上はね、大事にしていた姫君と引き離されてしまったんですって……）

幼い頃の記憶がぼんやりと思い出される。

「……王太子殿下？」

その場に立ち尽くす少年に騎士が不思議そうに声をかける。彼ははつと顔を上げると、表情を引き締め、城の天井を見上げた。

「早く国内を安定させなければな。エスタドに付け入る隙を与えてしまふ……。時間を無駄にはできん」

「はっ」

少年の名は、ギョーム・ド・ガリア。ガリア王リシャールの嫡男である。彼はまだ十八歳でありながら、父であるリシャール王に退位を迫り、国を二分する内乱を引き起こしていた。

リシャール王は亡妻マーガレットの兄、アングル王エドガーに支援を求めた。エドガーは庶子のルール公レノックス・ハートを遣わし、リシャールと共に戦わせた。だがそんな中、エドガーの急逝が告げられた。レノックスは君主不在となったアングルに急ぎ帰国し、リシャールは窮地に立たされている。この機会を逸するわけにはいかない。

ギョームはアプローチを振り返り、目を細めた。

「……アングルか……」

彼にとってエドガーは伯父であり、冷血公レノックス・ハートと、グローリア女伯キリエ・アッサーは従兄妹になる。

（いずれは……、見えること^{まみ}になるか）

ギョームは胸の中で呟いた。

第2章「タイバーンの雌狼」第1話（前書き）

キリエとレノックスが王位を宣言したことで内戦に突入したアングル。一方、もう一人の「王位継承権者」が現れる。

第2章「タイバーンの雌狼」第1話

打ち鳴らされる鐘楼の鐘が荘厳な旋律を奏でる中、一人の男が自室で静かに祈りを捧げていた。

自室と呼ぶにはあまりにも豪華な祭壇が設けられ、まるで礼拝堂そのものようだ。男は長いこと祈りを捧げると、ようやく体を起こした。頭にわずかに白いものが混じるが、穏やかな顔つきの中にも力のこもった目を持つ男は純白の僧衣をまとい、紫の帽子を被っている。ヴァイス・クロイツ教最高指導者、大主教カール・ムンディである。

ムンディの眼前に掲げられているのは、ヴァイス・クロイツ教の象徴である、円の中に描かれた正十字形。金銀で縁取られ、花や天使たちがそのシンボルを美しく取り囲んでいる。

ヴァイス・クロイツ教では、遍く広がる天空の恵みが神そのものであり、白い正十字形は、^{ヴァイス・クロイツ}東西南北を表す。本来は豊穡をもたらす自然を畏敬する思想から始まった宗教だが、今では聖クロイツ大聖堂に座する大主教を頂点とする厳格な位階制を持ち、独特の思想を発展させた教義を有している。アングル島及びプレシアス大陸のほぼ全域に信者がおり、そこに住む人々は皆この宗教に基づいた道徳、倫理観で育てられている。

ユヴェーレン王国の一地方都市に過ぎなかったクロイツだが、各地に点在していた聖堂の総本山として聖クロイツ大聖堂が作られたのが今からおよそ百年前。ユヴェーレン内の自治都市として発展してきたが、約五十年前にユヴェーレンから分離独立を宣言。当時のユヴェーレン国王ヴォルフは独立を認めず、十年にも渡る大戦を引き起こしたが、クロイツは事実上独立。だが、ユヴェーレン王国は未だに独立を認めてはいないため、今でも両者の国境ではしばしば小競り合いが続いている。

ムンディはガラス窓から外の広場を見下ろした。ヴァイス・クロ

イツ教の総本山として大陸中から多くの学者や聖職者、商人が集まるクロイツは交易都市の顔も持つており、ごく小さな都市国家ながら豊かな地であった。ユヴェーレンがクロイツの独立を認めない背景にはそんな理由もあったのだ。クロイツは今や、プレシアス大陸における最も重要な 国家 なのだ。

ムンディは活気に溢れる広場の様子を見守りながら、遠く離れた島国を思った。アングル王国のエドガー王が崩御し、恐れていた王位継承戦争が勃発した。アングルは世界的に見ても保守的なヴァイス・クロイツ教徒が多い地である。そしてそれ以上に、ある理由からムンディは彼の地に熱い視線を送っていた。

すると扉が静かに叩かれ、「お入り」とムンディが答える。

「猊下」

耳に心地よい、低い男性の声が響く。

「アングル王国より、ルール公の使者が参りました」

「ルール公……？」

ムンディが不審げな面持ちで振り返ると、長身でしっかりした体躯の青年が佇んでいる。何があっても動じそうにない落ち着いた表情。ムンディが創設した神聖ヴァイス・クロイツ騎士団の団長、ヨハン・ヘルツォークである。ユヴェーレン出身のヘルツォークは元々傭兵としてクロイツを訪れたが、その篤い信仰心と忠誠心を買われ、騎士団の創設にあたり、団長に指名された。ムンディの秘蔵っ子とも言える腹心だ。

「二名の騎士が猊下に拝謁を求めています。恐らく……、ルール公の戴冠要請でしょう」

「来たか」

不機嫌そうにムンディがぼやく。

「すぐにも使者を送ってくるだろうと思っていたが、遅かったな」

「プレセア宮殿でレディ・キリエ・アッサーの軍と衝突してから二ヶ月は過ぎましたからな。国内が混乱している故、すぐに使者を送れなかったのでしょう」

「まさかあの男、私がすんなりと戴冠を認めるなどと思ってはなからうな」

ヘルツォークは苦笑すると肩をすくめた。

「……あの冷血公ですから」

「困った若造だ」

そう吐き捨てると、ムンディはヘルツォークと共に部屋を出た。

応接間では、正装のモーティマーとヒューイトがムンディを待っていた。二人はお互いに視線を逸らし、むっつりと押し黙っている。

レノックスはムンディに戴冠を要請するにあたり、交渉事が得意とは言えないヒューイトを単独で送り出すことに不安を感じ、直接の交渉はモーティマーに命じた。だが、キリエの擁立を今もひそかに願っているのではないかという懸念もあり、ヒューイトを監視役として同行させたのである。要するに、お互い相手の役どころに不満があつたわけである。

応接間にムンディがヘルツォークや数人の司教たちを引き連れて現れると、モーティマーたちは深々と最敬礼した。

「アングル王国ルール公レノックス・ハートの命により参上いたしました、ロバート・モーティマーと申します。大主教猊下におきましては拝謁を賜り、恐悦至極に存じます」

「オリヴァー・ヒューイトと申します」

ムンディは胡散臭げな目つきで二人を見下ろすと、とりあえず両手を合わせ、挨拶を返す。

「アングルは今、大変な状況ではないかな」

「は、仰るとおりでございます」

「七月にプレセア宮殿で武力衝突があつたな。犠牲者に祈りを捧げねば」

「はっ」

白々しい。ヒューイトは仮面のような表情の下で苦々しく呟く。

「それで、この度は……？」

「はっ。我が主君、ルール公はアングルの王位継承権を有しております」

そこでモーティマーは一度言葉を切った。ちらりと見上げると、椅子にどっしりと腰を据えたムンディは鋭い視線を投げかけている。どう見ても歓迎している様子は見受けられない。モーティマーは自らの立場に胸の中でひそかに嘆息する。

「すでに王位の宣言を済ませ、あとは戴冠を待つばかりでございます。ぜひ、ムンディ大主教にルール公に戴冠していただきたく、クロイツまで参った所存です」

しばらくムンディは黙ったまま、何も答えなかった。ヒューイットが苛立たしげな顔つきでムンディを見上げる。大主教はようやく重々しく口を開いた。

「ルール公は……、今までのご自身の行いをよもお忘れではあるまいな？」

モーティマーが目を眇め、大主教を凝視する。充分に予想できた展開だ。

「乱れた生活を送り、異母兄弟たちと争い、女性関係も決して潔白ではない。……ま、その乱れた行いを改めさせず、放置していた先王にも大きな責任があるが」

「それにつきましてはルール公も猛省し、襟を正す所存であると……」

「何度改悛の勧告をした？ 少なくとも三度、破門すべきか検討しておるのだぞ」

「……仰せのとおりでございます」

モーティマーは項垂れ、何故あんな男のためにここまでする必要があるのか、自分の運命を呪った。

「しかし……、アングルには君主が必要でございます。王位に相應しい者はルール公を措いて他になく……」

「本当にそう言えるのかッ？」

突然ムンディが声を荒らげ、モーティマーは驚いて顔を上げる。

椅子から身を乗り出し、両目を見開き、真正面からモーティマーを見据えるムンディ。隣には、ヘルツォークが冷静な表情のまま、ひっそりと控えている。ヒューイットは顔をしかめ、上目遣いでムンディを睨み付けた。

「そなたの主君が戦った相手、グローリア女伯は王位を宣言する以前は地方教会の修道女だったそうだな？ 我が宗門の末席に位置するとは言え、神に生涯を捧げ、民に奉仕する幼い少女に牙を剥くとは、どういう事だッ！」

「それは」

「それも、腹違いとは言え、自身と血を分けた妹であるぞ」

答えに詰まるモーティマーに、ムンディは畳み掛けるように言い放った。

「ルール公が異母兄に手をかけようとしたことを、私が知らぬとも思ったか」

一方的に責められ続け、元々レノックスの王位継承に不満のあるモーティマーには弁解のしようがなかった。が、そこで跪いていたヒューイットが不意に立ち上がった。

「国を治めるのは聖職者ではありませんからな！」

ヘルツォークがさっと前へ出るが、ムンディはさして驚いた様子も見せずに右手を上げて制する。

「今、大陸の覇権を握ろうとしているエスタド王国は周辺諸国に圧力をかけ続け、大陸は動乱の世を迎えている。今はまだ戦争が起これていないだけで、遠からず国と国が激突する。その迫り来る危機に備えて我が国には強力な王が必要なのだ。それが我が君、ルール公である！」

「ヒューイット！」

モーティマーが立ち上がって下がらせようとするが本人はそれを押しのける。

「サー・オリヴァー」

低い声でムンディが呼びかける。

「そなたが言うこと、半分はそのとおりだ。大陸の覇権を狙うエストアドと、それを良しとしない我々クロイツと周辺諸国。世界は一触即発と言っている状態だ。だからこそ、暴君の誕生は阻止せねばならん」

「暴君。我が君を暴君と仰せか」

「暴君でなければ、何故人は冷血公と呼んでいるのだ？」

「情に厚いだけが名君の条件ではないでしょう」

「話にならん」

鼻を鳴らしながらムンディは椅子を蹴って立ち上がった。

「ルール公の戴冠は拒否する。帰ってそう伝えるが良い」

「では、世間知らずの小娘をアングルの君主に据えよと？」

「控えろ！ オリヴァー・ヒューイット！」

さすがに普段温厚なヘルツォークが声を荒らげる。応接間を出ようとしたムンディが振り返る。

「アングルの王位継承権者は他にもいる。即断即決はできん問題だ」
それだけ言い捨てると、ムンディは応接間を後にした。

「猊下！」

慌てて後を追おうとするモーティマーを、ヒューイットが腕を掴む。

「あんな坊主、放っておけ」

「貴様……、何ということをしたのだ？ これでアングルはクロイツを敵に回したのだぞ！ それがどういうことか、貴様にはわかっているのか！」

だが、ヒューイットは不敵に笑いながらモーティマーを引っ張って応接間を出る。

「おまえこそわからんのか。いつまでクロイツの顔色を窺うつもりだ。今や時流はエストアドにある。ちっぽけな島国に過ぎないアングルは大国に逆らわんことだ。公爵もゆくゆくはエストアドと同盟を結ぶおつもりだ」

エストアドと同盟。モーティマーは啞然としてその場に立ち尽くす。

ここ数十年、エスタドの台頭には目を見張るものがある。危機感を覚えたエドガー王は妹のマーガレット王女をガリア王リシャールに嫁がせ、対エスタド策を取った。

それに対し、良質な農作物や毛織物、貴重な鉱物資源といった、小さな島国といえど魅力的なアングルを手なずけたいエスタド王ガルシアは、自分の娘フアナ王女をエドガーの嫡男、エドワード王子と婚約させようとした。エスタドの強化に歯止めをかけることができず、エドガーは仕方なく交渉に応じるが、それはエドワードの夭逝という形で白紙となった。

その後、今度はリシャール王がエスタドに庇護を求め、自分の嫡男ギョーム王太子とフアナ王女の婚約を求めた。手取り早くガリアを支配下におけるこの申し出にガルシア王は密かに喜んだ。だが、そうした父王の不甲斐なさに激昂したギョームは婚約を拒否。ついには父に対して反旗を翻したのだった。娘を溺愛していたガルシアは激怒したが、リシャルの懇願で、今はガリアの内戦を静観している。が、怒りが静まったわけではないガルシアは、今もガリアの動きに注目している。

こうした動きの中、レノックスがエスタドと同盟を望むのは至極当然のように思えるが、モーティマーには大きな不安があった。プレシアス大陸に広がるヴァイス・クロイツ教の影響力だ。いかにエスタドが強国とはいえ、クロイツの影響から免れるとは考えられない。それはアングルも同じこと。大主教の不興を買い、アングルの君主が破門されるようなことになれば、国民は恐慌状態に陥るだろう。

（この国は……、一体どうなるのだ）

モーティマーは渦巻く不安に胸を押し潰されそうになりながらも、ヒューイットの後を追った。

（何とかしなければ……。何とか、ルール公を退ける手立てを考えなければ。だが、どうすれば……）

その時、モーティマーの脳裏に幼い修道女と、彼女に寄り添って

いた黒衣の伯爵の姿が蘇る。プレセア宮殿での衝突以後、二ヶ月近く沈黙を保っている。彼らは、これからどう出るのだろうか。モーターは、密かに彼らに一縷の望みをかけた。

（アングルが戦火に覆われる前に……）

聖クロイツ大聖堂の大廊下を、モーターたちは押し黙って足早に立ち去った。

とある城の見張りの塔に、一人の兵士が見張りの任務に就いていた。彼は夏の陽差しを恨めしそうに見上げ、溜め息をつく。やがて槍を持ち替えて手摺りにもたれかかった時だった。遠くから地響きのような音が聞こえてくる。慌てて体を起こして目を凝らすと、目の前に広がる田園地帯を、一群の軍勢がこちらへ向かってくるのが見える。

「た、大変だ……！」

兵士は腰に差したラツパを引っ張り出すと思いつき吹き鳴らす。「敵襲ーッ！ 敵襲ーッ！ 所属不明の軍勢がこちらに向かっていくぞーッ！」

王都イングレスから離れた辺境の城、シャイナー城は突然の敵襲に大混乱に陥った。城主のアレン・シャイナー男爵は急いで武装すると城の守りを固めさせた。

「一体どこの軍勢だッ？」

城主の問いに、混乱した現場からはすぐに回答は得られなかった。見張り塔から報告が届けられたのはしばらく経ってからだ。

「騎馬が装備している紋章は、星に鑿のみですッ！」

星に鑿。一風変わった紋章を告げられ、シャイナーの顔色がさつと変わる。

「……マール伯……！」

マール伯爵ジェラルド・シエルトン。実は、彼の人ならば襲撃される心当たりがないとは言えなかった。

「いよいよ、動き出すというのか、マール伯……。そして、アリ

ス・タイバーン……」

やがて、軍勢はあつという間にシャイナー城を取り囲むと、一斉に投石機カタバルトから石を発射する。シャイナー勢も弓矢で応酬するが、その間にもマーブル伯爵はじょうつは破城槌を用意させると、城門に突進させる。鋭利に削った丸太を数本固定した台車を、数人の兵士らが雄叫びを上げて何度も城門にぶつける。

「殿……！ やはり、マーブル伯の狙いは……！」

家臣の一人が切羽詰った様子で問いかける。シャイナーは青ざめたまま、力なく頷く。

「あの娘だ……。あの娘を奪い返しに来たに違いない……！」

「い、いかがいたしましょう……！」

家臣の言葉に、シャイナーは黙り込んだ。様々なことが頭に浮かぶが、やがて力なく項垂れる。

「……もはやエドガー王はいない。あの娘を守る義理はない。……降伏しよう」

降伏と聞いて家臣は顔を歪ませるが、敢えて反論しようとはしない。やがて悔しそうにその場を走り去る。

「伯爵、城門が」

一人の騎士が甲冑姿の騎乗の男に告げる。男は黙って城門が内側から開くのを見守る。一斉に城の中へ兵士らが雪崩れ込むが、相手方は防御の構えを崩さず、攻撃を仕掛けてこようとはしない。やがて、館のひとつから白旗と城の鍵を捧げ持った男が現れる。マーブル伯の軍勢は一斉に大歓声を上げた。

「シャイナーをここへ連れてこさせろ」

騎馬の男、マーブル伯爵ジェラルド・シエルトンは感情が読み取れない声で命令を下した。

罵声と怒号が飛び交う中、館から城主シャイナーが家臣を伴って現れる。諦めの表情と言うよりは、覚悟を決めたような顔つきに、シエルトンは満足そうに笑みを浮かべた。

「その様子では、わかつていようだな」

馬から下りもせず、シエルトンはシャイナーに向かって言い放った。シャイナーは悔しそうに唇を噛み締めて頷く。

「幽閉の塔へ案内してもらおう」

「……こちらです」

シエルトンは兜を脱ぐと従者に放り投げた。灰色の髪に灰色の瞳。深い皺が刻まれたその顔は無表情に近い。

一行は城の中庭を抜け、奥に聳え立つ塔へ向かった。黒々とした円塔は見る者に畏怖を感じさせる。人の侵入を拒むような空気を醸し出す塔に、一行が粛々と入ってゆく。塔は装飾が一切施されておらず、殺風景なものだった。石の階段をゆっくり上がり、やがて最上階へ達した。奥まった場所に、違和感を覚えるほど頑丈な扉がある。マーブル伯の配下が扉に近づく。

と、その時。扉が中から蹴破られたかと思うと細身の槍が飛び出してきた。兵士らが思わず剣を抜く。

「ローザ！」

シャイナーが悲鳴のような声を上げる。

「下がれ！ もう良いのだ！ 我々は降伏した！ 槍を下ろせ！」

「……父上？」

部屋の中から、わずかに震えた少女の声が返ってくる。一行が固唾を呑んで見守る中、部屋から槍を構えた少女が進み出る。剣を構えた兵士たちは警戒を解くことなく、少女に切っ先を向ける。が、少女の方も臆せず兵士らを睨み返す。

「……下がれ」

シエルトンは手を上げると、兵士らを下がらせる。柔らかな栗毛はやや乱れ、仮面のように無表情の少女は、わずかに怒りのこもった目つきで目の前に立ちはだかるシエルトンを見上げた。

「槍を下ろしなさい、ミス・シャイナー」

シエルトンが幾分穏やかな声色で諭す。

「勘違いしてはいけない。我々はそなたの主を迎えに来たのだ」

「……迎えに？」

「そうだ。そなたの父上が英断を下したおかげで、犠牲者が少なくて済んだ」

ローザ・シャイナーはなおもシエルトンを凝視するが、そんな彼女の背後から「誰だ？」と尖った声が投げかけられた。シエルトンの目が細められる。ローザはシエルトンに視線を向けたまま、すつと入り口から離れる。シエルトンは強張った表情を崩さず、慎重にゆつくりと部屋の中へと入った。

そこには、殺風景な部屋が広がっていた。質素な造りの家具が数個。窓に面した机には数十冊の本。床には夥しい数の紙が撒き散らされている。部屋に彩を添える調度品といったものは一切ない。そして、部屋の奥には天蓋のついていない簡素な寝台が置かれ、そこに一人の少女が座り込んでいた。

雪のように白い肌に、輝くプラチナブロンド。少しやぶ睨みの目には明らかに敵意がこもっている。手足は折れそうなほどに細い。シエルトンはその様子を見て、わずかに眉をひそめた。そして、ゆつくりとベッドに近づくと恭しく跪いた。

「お久しぶりでございます。お忘れですか？ マーブル伯爵ジェラルド・シエルトンでございます」

シエルトンの言葉に少女は顔をしかめ、相手をじっと凝視する。が、やがて薄い唇がにっと笑みを作る。

「シエルトン……。シエルトン……。おまえか」

「はい」

満足げに頷くシエルトン。

「母君の命により、あなたをお迎えに上がりました。レディ・エレソナ・タイバーン」

母と聞いてエレソナの顔つきが変わる。

「……母上は……。生きておいでか」

「ご健在でございます。ですが……。父君のエドガー王は二ヶ月前に身罷られました」

エレソナの両目が見開かれ、眉が釣り上がる。しばらく閉ざされていた唇がやがて静かに震え始め、押し殺した笑い声が漏れ出る。
「くくつ……、くつくつくつ……。そうか、死んだか。父上が……、死んだか」

「はい」

「ふふふ……、ふふつ……」

肩を震わせ、静かに笑う声が部屋に不気味に響く。

「ははは、あははははッ！」

やがて大声で笑い出すとエレソナは勢いよく立ち上がるが、枯れ枝のように細い足は体重を支えきれず、その場にばたりと倒れこむ。
「エレソナ様！」

シエルトンが駆け寄り、細い腕に手をかけるがエレソナは思いもしない力で振り払う。そして顔をもたげ、天井を仰ぐ。

「はははははッ！ あはははははッ！ 自由だ！ 私は自由だッ！

あはははははッ！ はははははッ！」

エレソナの笑い声は塔の壁に反響し、まるで大勢の悪魔が笑い転げているかのように鳴り響いた。

暗闇。だが、時々燭台の煌きが目の端に飛び込む。自分に覆いかぶさる誰かの温もり。悲鳴と怒号。金属がぶつかり合う音。

「何てことを……！ 何て娘だッ！」

「陛下！ 落ち着いて下さいませ！」

「許さん！ 殺せ……！ その娘を殺せッ！ 気が触れた娘を、殺せッ！」

怒り狂った野太い男の声に被さるように、若い女の声が上がる。

「お許しを！ 陛下！ お許し下さい！ ま、まだ年端もゆかぬ子どもでございますッ！」

「貴様も出てゆけッ！ 子どもだと？ これが……、子どものすることかッ！」

激しい言い合いに、「キリエ」は恐ろしさのあまり泣き出す。す

ると、別の女の消え入りそうな声が聞こえてきた。

「大丈夫よ……、大丈夫。だから泣かないで……、お願い……。キリエ……」

「ッ……！」

息を呑んで両目を見開くキリエ。眼前には、ようやく目になじんできたクレド城の自室の天蓋。辺りはまだ薄暗い。弾む息を無意識に抑え、キリエは汗ばむ額に手をやった。のろのろと体を起すと呼吸を整える。

祖父ベネディクトが亡くなる直前にみた、あの悪夢だ。しばらくみていなかったのに、何故……。そして、今日みた夢では、はつきりと自分の名が呼ばれた。そして、怒り狂った男は「陛下」と呼ばれていた。では、あの男は父エドガーなのか。キリエは言いようのない不安で胸が一杯になった。ゆっくりと寝台から降りると窓辺に寄り、厚手のカーテンをそっと開ける。東の空が白んでいる。

あれから二ヶ月。広大なクレド城にもようやく慣れ、その間にもマリーエレンから貴族としての礼儀作法を学び、レスターからは国内外の歴史を学んでいた。もっとも、歴史に関してはロレインから学んでいたこともあり、レスターはキリエの知識の豊富さに驚くと同時に賞賛していた。

ジユビリーはというと、ジョンと共に周辺の領主と粘り強く交渉を続け、盟約を結ぶことに奔走していた。皆、冷血公の即位に悲観的ながらも彼に対する恐怖心が拭いきれず、キリエを擁立しようとする勢力はまだ少数に過ぎなかった。

朝食を取った後、キリエはジョンに連れられて城の厩舎を訪れた。今日から馬術の訓練を始めることになっていたのだ。

ジョンと微妙に距離を置くキリエ。レノックスに襲われかけてから約二ヶ月。あれからしばらく男性への恐怖心が拭い切れなかったが、最近はジョンやレスターにはようやく自然に接することができるようになっていた。しかし、ジユビリーは元々本人が持っている

近寄り難さのせいで、今でもぎこちない関係が続いている。

「良い天気になりましたね。練習にはもってこいですね」

ジョンが明るい笑顔で声をかける。

「はい」

緊張した面持ちで返事をするキリエに、ジョンは思わず苦笑する。

「大丈夫ですよ、慣れればすぐに野を駆け回れるようになりますよ。ダニエル！」

ジョンに呼ばれ、年老いた馬丁が一頭の白馬を引いてやってくる。

「おとなしい馬を選んでおきました」

ジョンがそつとキリエの手を取って、馬の首をゆつくりと撫でさせる。やがて、白馬は触られることに慣れた様子で落ち着いてきた。

「……この子の名前は？」

キリエの質問に、馬丁が「アガサと申します」と答える。

「アガサ？」

「二歳になる牝馬です」

「そう」

キリエは、そつと「アガサ」と呼びかける。アガサはキリエをちらりと一瞥すると、鼻を少女の顔にこすりつけた。

「ひゃ！」

「ははは、アガサがキリエ様を主と認めてくれたようですよ」

「そ、そうなの？」

「まずは乗り方から始めましょう」

手綱を握り、轡に足を掛けさせるとジョンはぐいとキリエを押し上げる。

「わ……！」

思っていた以上に高い視線にキリエは怯えた表情になる。戦地から脱する時には気づかなかったが、こんなに高いのか。

「しっかりと鞍に座って下さい。そう、そうです」

手綱をぎゅつと握り締め、強張った顔つきのキリエを乗せたまま、ジョンがゆつくり轡を取る。アガサはジョンに従って静かに歩みだ

した。

アングルの短い夏が終わりを告げ始めている。以前よりもっと乾いた風が吹き、陽差しは日に日に弱まりつつある。

「……キリエ様」

馬丁の姿が見えなくなったところで、ジョンが声をかける。

「はい」

「昨夜は、よくお眠りになれなかったのでは？」

「ど、どうして？」

「マリー様がご心配されていました。キリエ様は時々夜中にうなされてるようだと。昨夜も……」

キリエは目を伏せ、どう説明したものかと顔をしかめる。

「……夢をみるのです」

「夢？」

「……よくわからないのだけど……、周りが騒がしくて、何だか不安で……、怖い夢なんです。小さい頃から時々みるのですが……」

「……そうですか」

ジョンが考え込むような顔つきになる。

「それは恐らく……、日常での不安が投影されているのではありませんか？」

思わず黙り込むキリエに、ジョンは相変わらず生真面目な口調で続ける。

「不安なことばかりだと思いますが……、どうかお一人で思い悩まず、ご相談なさって下さい。義兄上に申し上げにくかったら、マリー様や私がお伺いします」

「……ありがとう、ジョン」

何気ないことだが、ジョンの気遣いが嬉しかった。

クレド城は大きな城だったが、思っていた以上に静かな城だった。侍女や従者も必要以上には干渉してこないし、特に身分の低い召使や使用人たちはキリエに対して温かく接してくれている。女王などならず、ずっとここで暮らせたら。ふとそんな思いに駆られること

がある。が、そんな時は決まってレノックスの顔が脳裏に浮かび、複雑な思いになるのだった。

しばらくアガサの背に揺られていると、中庭にレスターの姿が見える。きよろきよろと辺りを見渡し、何かを探している様子だ。

「レスター！」

馬の上からキリエが手を振って呼びかける。それに気づいたレスターが馬に乗っているキリエを見て驚いた表情になるが、すぐに暗い顔つきに戻る。

「……どうしたのかしら」

不吉な思いを感じたキリエは、ジョンと顔を見合わせた。

城の書斎で、腕組みをしたジュビリーがアングル全域の地図を見下ろしている。広々としたその書斎は、いつしかキリエの勉強部屋となっていた。やがて扉が叩かれると、キリエたちが入ってくる。

「義兄上、何事ですか」

ジョンの問いかけにジュビリーは眉間の皺を深めてみせると、彼の代わりにレスターが口を開く。

「キリエ様、シャイナーという地をご存じですか」

「……いいえ」

キリエは小さく頭を振る。

「何があつたのですか……？」

不安そうなキリエの言葉に、ジュビリーがゆっくり顔を上げる。

「……シャイナーは辺境の地だが、国王の直轄地だ。そのシャイナー城が、昨日攻め落とされた」

「……誰に、何のために？」

そこで初めてジュビリーはキリエを真正面から見つめた。

「攻め入ったのはマーブル伯爵ジェラルド・シエルトン。目的は……、シャイナー城に幽閉されていた罪人の奪還だ」

罪人。穏やかでない言葉に、キリエの胸に不安が群雲のように沸き起こる。

「……どういう人？」

いつもは沈着冷静なレスターまでも、険しい顔つきで押し黙っている。再びキリエが口を開こうとした時。

「……幽閉されていたのは、エレソナ・タイバーン。アリス・タイバーン女子爵の娘だ。父親はエドガー・オブ・アングル。つまり、おまえの異母姉だ」

「……！」

予想もしなかった言葉に、キリエは手で口を覆った。ジョンも驚いた様子で義兄を凝視する。何故、腹違いの姉が幽閉されていたのか。キリエは困惑の表情で身を乗り出す。

「ど、どういうことです……！」

ジュビリーはどこから説明したものか、束の間迷いの表情を見せたが、思い切った様子で語り始めた。

「……おまえより二歳年上のエレソナ・タイバーンは父王の怒りに触れ、生涯幽閉するよう言い渡されていた」

「生涯？」

震える声で聞き返すキリエ。怯えた表情のキリエに、ジュビリーは幾分穏やかに「よく聞くのだ」と声をかける。

「隠していてもいずれわかることだ。正直に話す。……おまえは二歳までプレセア宮殿で暮らしていた。その二歳の時、事件が起こった。エドガー王は末っ子のおまえを大層可愛がっていたそうだ。その様子を見て嫉妬心にかられたエレソナは、大廊下^{ギャラリー}に飾られていた斧でおまえに襲いかかった」

その瞬間、キリエの視界が暗転し、耳に風を切る音が突き刺さる。

「ひッ！」

「キリエ様ッ？」

悲鳴を上げて両耳を塞ぐキリエに、ジョンが慌てて駆け寄る。ジュビリーが少なからず驚いた様子で呟く。

「おまえ……、まさか、覚えているのか」

聞こえるはずのない音に怯えるキリエはがたと全身を震わ
せていた。ジユビリーがそつと肩に手をかける。

「……キリエ」

「私……」

キリエは小さく囁いた。

「小さい頃から……、斧とか鉈の音が嫌い……。ゆ、夢をみるの
です」

夢と聞いてジョンがはつとする。

「人がたくさんいて……、いきなり風を切る音がしたと思ったら……
…、誰かが私に被さってきて……」

ジユビリーとレスターが思わず顔を見合わせる。キリエは更に
続けた。

「男の人が叫ぶのが聞こえるのです。……気の触れた娘を殺せと。
それが……、私のことかと、ずっと思っていて……」

「違う、おまえではない」

ジユビリーはレスターに目配せすると椅子を持ってこさせた。

二人がキリエを座らせると、彼女は大きく深呼吸を繰り返して気を
落ち着かせた。

「……ごめんなさい。大丈夫です」

「無理はするな」

ジョンが恐る恐る声をかけてくる。

「キリエ様がいつもうなされていたのは、そのご記憶だったのです
ね……」

思い詰めた表情で頷くキリエを見つめていたジユビリーが、少
し声高に呼びかける。

「レスターに感謝しろ」

「レスター……？」

「その時、斧を振るうエレソナ・タイバーンからおまえを守ったの
がレスターだ」

「えっ」

顔を上げ、ついでレスターを振り返る。が、彼は特に表情を変えず、黙ってキリエを見つめ返してくる。では、あの夢の中でキリエを抱きすくめていたのは、レスターだったのか。

「あの日、レスターがレディ・ケイナに付き添っていなければ、どうなっていたか……」

「そんなことはありませんよ」

レスターは照れ隠しに顔をしかめ、肩をちよつとすくめて見せる。

「武器を手にしていたとは言え、相手は四歳の子どもですから。それよりも……」

そこでレスターは気の毒そうな顔つきになり、声を低めた。

「キリエ様がまだそのご記憶に苦しまれているのが……、不憫でありませんね」

「……レスター」

キリエはそつと呼びかけると、「ありがとう」と囁く。

そういえば、とキリエが思い出す。あの時レノックスも言っていた。「もう一人の妹。気の触れた娘」と。あれは、エレソナのこどだったのか。

「それで、……姉は……」

「エドガー王はエレソナをすぐさま処刑しようとしたが、あまりにも幼いために幽閉処分となった。一生出さないという条件でな」

キリエは思わず唾を飲み込んだ。四歳から死ぬまですつと幽閉……。父の怒りの凄まじさが伝わってくる。

「それ以前から、すでにあの凶暴性は問題とされていたからな。母親のアリスも同時に宮廷から追放された。……その頃王の寵愛がアリスからレディ・ケイナに移っていたという背景もあったようだが」

何ということだ。レノックスといい、エレソナといい、何故異母兄弟たちはこれほどまで危険な人格を備えて生まれてきたのだ？

だが、もしもそれが父親譲りのものだとしたら、同じ血を受けた自分にも影響がないとはいい切れない。キリエは、背筋がぞくりと

した。

「……そんなことがあつてすぐ、病気がちだったレディ・ケイナが亡くなり、おまえの身を案じたベネディクトはロンディニウム教会へおまえを預けた。……王の庶子である限り、危険がつきまとうかな」

キリエの脳裏に、グローリア城を訪れた際に見かけた母の肖像画が浮かび上がる。そして、祖父ベネディクトの顔も。

「……姉は、これからどうするつもりなのでしょう……」

当然抱くであろう不安を口にすると、キリエはジュビリーを見上げてきた。彼は目を眇め、自らに言い聞かせるように呟いた。

「まず間違いなく王位を宣言するだろう。アリス・タイバーンはそのつもりで娘を救出させたに違いない。あの女、王の愛妾でありながらマーブル伯を愛人にしていたたか者だからな」

姉を奪還したマーブル伯はアリスの愛人なのか。だが、キリエはふと眉をひそめた。

ジュビリーは、確か王位継承権者は五人いると言った。キリエ、レノックス、ガリアのギョーム王太子、そしてエレソナ。後の一人は放棄した。何故？ 何故放棄したのだ。そして、どこにいる？

「……伯爵」

少し落ち着いた様子でキリエは呼びかけた。

「王位継承権者は全部で五人。放棄したお方は、一体どんなお方なのですか？」

キリエの問いに、ジュビリーはすぐには答えなかった。ちらりとキリエを一瞥すると、彼は再びアングルの地図に目を落とした。

「……サーセン聖堂は知っているな」

「は、はい」

一瞬、キリエはどきりとした。サーセンと言えば王都イングレスに近い地方都市だ。そして、実はある理由から、キリエはいつかそのサーセン聖堂を訪れてみたいと熱望していたのだ。

「もう一人の王位継承権者はそこにいる。まだ若いうちに放棄した

がな。彼はエドガー王がもつとも可愛がっていた庶子だ。だが、彼には王位よりも大事なものがあつた。人格者として人々に慕われ、学問を修め、おまえと同じく生涯を神への信仰に捧げた……」

「ヒース司教様……！」

キリエが思わず叫び、ジュビリーが頷く。

「……さすがに知っているようだな」

「ま、待って下さい！ ほ、本当に、あのヒース司教様なのですか？」

いつになく興奮気味なキリエにジョンが目を丸くする。

「お会いになつたことが？」

「い、いえ、お会いしたことはありませんが……」

キリエはわずかに顔を赤らめると口ごもる。

「……ロンディニウム教会にも、ヒース司教様のお噂は伝わっていました。勤勉で人徳もあり、皆から尊敬を一身に受けながらも、決して驕ることなく修行を続けているお方だと……。いつか、お会いしたいと思っていました」

そこでキリエが顔をしかめて呟く。

「でも……、高貴なお生まれだとは聞いていましたが、まさか、父の庶子だなんて……」

頭の中が混乱している様子がありありとわかるキリエを、ジュビリーは目を細めて見つめる。

「……恐らく、ボルダーがそれとなく隠していたのだらう。ヒース司教は認知された庶子の一人だからな」

サーセン聖堂の司教ヒース・ゴーンと言えば、聖職者の間ではもちろん、国民にも広く知られた若き司教だつた。十歳で修道僧となり、十九歳の若さで司教となつた聡明な青年。その頭脳明晰さ是有名で、また、博学だけでなく優れた人徳者でもある。周辺の教会区で、横暴な領主や商人といった有力者の噂を聞きつけると自ら出向いて直接交渉に当たるなど、勇気ある聖職者といった面もあった。だが、人々が賞賛したのは、それだけが理由ではなかった。

「ヒース司教様は、その……、盲目だとお聞きしていますが……」

キリエの問いにジュビリーが頷くが、妙な間があった。

「……そのとおりだ」

キリエが聞いた話では、ヒースは現在二二歳。サーセンの盲目の司教 と呼ばれて尊敬され、慕われている。

「目がお見えにならないのに……、きっと他人にはわからない大変な努力をなさっているんですね」

自分に言い聞かせるように呟くキリエの様子から、彼女は相当ヒースに対して憧れを抱いているらしい。レスターはちらりとジュビリーの顔を見やった。

「でも……、もしもヒース司教様の目がお見えになられていたら、今頃王位継承は……」

「それは……」

ジュビリーは言いかけて口をつぐんだ。そしてキリエをじつと見つめる。その瞳には、同情とも哀れみともつかない、複雑な感情が混ざり合っていた。

「……伯爵？」

キリエが不思議そうに首をかしげる。室内に、重苦しい沈黙が流れる。やがてジュビリーは溜め込んだ息をそつと吐き出した。

「……ヒース司教は生まれつきの全盲ではない」

「……はい」

「エドガー王にとって司教は第一子だ。学問に秀でた上に人徳がある。当然国民から絶大な人気を得た。実際、他に男子がいなければ王はヒースを王太子にしていただろう」

黙って聞いているキリエの顔が少しずつ強ばってくる。

「だが、レノックスが生まれ、更にエドワードという嫡男が生まれた。エドワードが生まれた直後、ヒースは自ら聖職の道を選んだ。

……もちろん、彼は元々為政者になるつもりがなかったのだろう」
ジュビリーはそこで言葉を切り、息をついた。

「……それでもヒースの人氣は衰えることを知らなかった。彼なら

王を支える未来の宰相になれるだろうと、皆が還俗を望んだ。だが……、奴はそれを望まなかった」

「まさか……」

キリエの顔が見る見るうちに青ざめる。

「ヒースを妬んだレノックスは実力行使に出た。毒を盛られたヒースは命を取り留めたものの、視力を奪われた」

キリエの全身が総毛立つ。そして、思わず祈るように両手を握りしめた。

「……そ、そんな……！」

震える唇からかすれた声が漏れる。

「……だ、だって、兄弟ですよ……？」

「奴がどんな人間か、おまえも知っているはずだ」

言われた瞬間、キリエの背筋にぞくりと寒気が走る。

そうだ。あの男は自分を犯そうとした。信仰に生涯を捧げる誓いをした修道女を、腹違いの妹を、犯そうとしたのだ。そして、腹違いの兄をも失明に追い込んだというのか。兄とは知らず、自分がずっと憧れ続けていた司教から光を奪ったのか。あの男は獣だ……！

キリエの瞳は恐れから怒りへと変わった。

「……ち、父は、何をしていたんですッ……！」

怒りと興奮で取り乱しかけているキリエを見ると、レスターが思わず声をかけようとするがジユビリーはかすかに首を振って下からせる。

「もちろんすぐに捜査の手が及んだ。だがその直前、王太子が死んだ際にレノックスが疑われ、奴は烈火のごとく怒り狂い、兵を起こしかけた。それもあって、エドガー王は捜査を打ち切った」

「そんな……！」

キリエは落ち着きを失い、目を四方に彷徨わせるとかすかに震える手で額を押さえる。心配したジョンがそっと歩み寄ろうとした時「キリエ」

ジユビリーに呼ばれ、キリエが顔を上げると彼は険しい顔つきで

正面から見つめてきた。

「……責めてもいいぞ」

低い声でジュビリーは続けた。

「私がエドワードを殺さなければ、こんなことにならなかったと」

瞬間、キリエはまるで息を止めていたかのように大きく息を吐き出すと顔を背けた。

ジュビリーを責める気など毛頭なかった。彼がエドワード王子を暗殺したことで、多くの運命が変わった。それは確かだ。だが、元を正せば諸悪の根元は父エドガーだ。父は、自らの道を外れた行いのせいで世継ぎを失い、溺愛していた庶子は光を失った。そして今、国は乱れに乱れている。

「……どうしようもないわ……」

顔を背けたままキリエが呟く。

「……どうしようもない父親だわ……！」

今にも泣き出しそうな勢いで呟くキリエに、ジュビリーは黙り込んだ。ただ怯えるだけだった修道女は、絶望から這い上がるうとしている。恐怖ではなく、怒りを表現し始めている。怒りは力の源になる。それはジュビリーが一番よくわかっていた。

「……レスター」

呼ばれてレスターが振り返る。

「引き続き、タイバーンとイングレスの動きに警戒しろ」

「ガリアはいかがいたしますか」

「気にはなるが……、今は国内の状況が優先だ」

「わかりました。……キリエ様」

レスターが退出する前にキリエに声をかけるが、彼女は目を伏せた。

「ごめんなさい。……少し一人にさせて」

「……はっ」

ジュビリーはしばしキリエを見つめると、ジョンとレスターを連れて部屋を出ていった。一人になると、キリエはのろのろと立ち上

がり、窓辺に向かった。秋が近い。窓から見える麦畑は収穫を終え、寂しげな畑が広がっている。

ロンディニウム教会の薬草園はどうなっているのだろう。教会の司教と粉挽き職人がいなくなった村は、落ち着きを取り戻しただろうか。この二ヶ月間、自分の身に起こったことを理解し、受け入れることで精一杯だった。だが、思えば自分だけではない。この国のすべてが内乱に巻き込まれたのだ。ヒースの周辺にも影響はないだろうか。

ヒースの名を口の中で呟き、複雑な思いに駆られる。盲目でありながら厳しい修行を続け、有力者に屈しない強さを持ち、人々から尊敬を集める若き司教。ヒースの噂は村人からも耳にしていたが、その逸話のほとんどはロレインから聞いたものだ。

ひよっとしたら、とキリエはぼんやりと思った。ロレインは、キリエにとって唯一誇れる兄弟としてヒースの話を多く聞かせたのではないだろうか。キリエは彼女の話聞き、サーセンの盲目の司教に憧れを抱いていたのだ。まさかそのヒースが、腹違いの兄弟だったとは。キリエはこれから先、一体どれだけの運命が自分に待ち受けているのか、不安と恐れで胸が一杯になった。

第2章「タイバーンの雌狼」第2話（前書き）

憧れてやまない司教が、腹違いの兄だった。会いたい。キリエの願いを察したジユビリーは。

第2章「タイバーンの雌狼」第2話

昼食での情景はいつもと変わりはなかった。強いて言えば少し静かな感じではあったが。

マリーエレンの提案で、昼食や夕食の食卓は皆で囲むことにしていた。キリエ、ジュビリー、レスター、ジョン、マリーエレン。食事を共にすることで会話を重ね、絆を深めると同時に、キリエ自身の女伯爵たる自覚も身につけてほしい。そんな思いがあったのだ。

「キリエ様、お味はいかがです？」
朝の出来事を知らされたのが、マリーが明るく声をかける。

「はい、美味しいです」

キリエもできるだけ明るく答える。

「何だか懐かしい味で……。私は好きです」

マリーは嬉しそうににこにこしている。キリエはちょっと不思議そうに見つめ返す。

「……マリー？」

「懐かしいお味ですか。それはよかった」

その言葉にキリエがはつとすると料理に目を向ける。野菜をふんだんに使った料理。独特な香りが食欲をそそる。

「……ひよつとして」

キリエが呟き、レスターは何事かと眉をわずかに引きつらせる。

「今日の香草はロンディニウム教会で育てられたものですよ」

目を丸くして驚いたキリエはしばらく料理を見つめていたが、慌てた様子でマリーを振り返る。

「あ、あの……」

「ロンディニウムは今、落ち着いているそうですよ」

キリエが尋ねる前にマリーが答える。

「聖アルビオン大聖堂のカトラー大司教様が後任の司教様を派遣してくださったそうです。とても良い方で、村人も歓迎していると」

「……そうですね」

キリエが安堵の表情で呟く。よかった。ひとまず村は安泰だ。落ち着いたらロレインの墓参にも行きたい。

「ありがとう、マリー」

「いいえ」

マリーは穏やかに微笑んだ。キリエは食事の手を休めて、独り言のように呟いた。

「私、教会の鐘楼に登るのが好きでした」

「鐘楼？」

「夕方に鐘を鳴らすのが私の日課で……。鐘楼から広い田畑を眺めるのが大好きでした」

ジョンは、二ヶ月前に訪れたロンディニウム教会を思い返した。とても静かで穏やかな教会だった。今思えば、あの司教があんな暴挙に出るとは思ひもなかったが。

「私、やっぱり田舎の方が性に合っているですね。インGRESはとても華やかだったけど、落ち着いて暮らせそうにないもの」

「住めば都と申します。それに、キリエ様が女王におなりになれば、INGRESの風潮も変わるでしょう」

「そうですね」

ようやく食卓が明るくなり、会話が弾む。ジュビリーは相変わらず黙りこんで食事を続けていたが、キリエの明るい表情にじっと視線を注いでいた。

昼食が終わった後、城の礼拝堂でゆっくり祈りを捧げ、侍女を伴って自室へ引き返そうとしたキリエをジュビリーが呼び止めた。

「少し、良いか」

「……はい？」

何事だろう、とキリエが困惑気味の表情になるが、ジュビリーは侍女たちを部屋へ帰すとキリエを連れて歩き始めた。

内壁の廊下を渡ると、いくつもある塔のひとつの螺旋階段を登り始める。キリエの歩く速度に合わせて、ジュビリーはゆっくり階段

を登ってゆく。彼はどこまで自分を連れて行くのだろう、とキリエは少し心配そうな表情で一段一段石段を登っていく。何回か小休止を取り、ようやく塔の最上部へと行き着く。扉を押し開くと、夏の終わりを惜しむかのように強烈な陽差しが降り注ぐ。扉の影で、キリエが思わず片手を差し上げて陽を遮る。足元がふらつくキリエの手を取ると、ジュビリーは塔の屋上へと出た。

「わあっ」

目の前に広がる青空にキリエが思わず声を上げる。

「教会の鐘楼から見る　世界　とは訳が違う」

ジュビリーはそう呟くと張り出した狭間の上へキリエを導くと、クレドの城下を見せた。

城を幾重にも囲う幕壁。幕壁が繋ぐいくつかの円塔。その外側に広がる静かな城下町。更にその周りには広大な田園が広がっている。「インGRESから見る　世界　は、こんなものではないぞ」

ジュビリーの言葉に、キリエは息を呑んだ。この目に映るクレドの地はすべてジュビリーのものだ。そして、いつかINGRESを征服し、こうして王都を眺める日がくる。その時目に映るすべてが自分のものになる。わずかに息を切らし、しばらく無言で眼下に広がる街並みを見つめるが、やがてそつと隣のジュビリーを見上げる。相変わらず眉間に皺を寄せ、何者も寄せ付けない表情。キリエは、彼の髪の生え際にわずかに白いものが混じっていることに今気づいた。思えば出会ってから二ヶ月、あまりにも多くの出来事があった。

「あの……、伯爵」

沈黙に耐え切れず、キリエが呼びかける。

「先ほどは……、ごめんなさい。取り乱してしまって……。でも、勘違いしないで。私、あなたを責めるつもりは……」

ジュビリーがゆっくり見下ろす。じっと見つめられ、キリエは思わず再び黙り込む。

「……会いたいのか」

「えっ」

唐突に言われ、キリエは意味がわからずに聞き返す。

「サーセンのヒースだ。会いたいか」

ジュビリーの言葉にキリエはごくりと唾を飲み込んだ。じっと見つめられ、目を逸らせない。が、やがてか細い声で答える。

「……会いたいです。でも……」

「おまえが会いたいなら、会わせてやる」

「でも、危険ですっ」

キリエが思わず高い声を上げ、一瞬口をつぐむと声を低めて続ける。

「サーセンはイングレスの郊外です。もし、レノックスに見つかったら……」

「おまえが会いたいと望むのなら、会わせてやろう」

ジュビリーがそう繰り返し、キリエははっとした。そうだ。自分は約束したではないか。もう逃げないと。そしてジュビリーも約束してくれた。現実から逃げ出さないと。ならば、自分もそれに応えなければならぬ。キリエの顔は、戸惑いの表情から、決意の表情へと変わった。

「……会いたいです」

キリエは居住まいを正すとはっきりと告げた。

「お願いします、伯爵」

「わかった。明日の夜明け前に発つ。準備をしておけ」

「はい」

緊張した面持ちで返事をする、キリエは再び城下を眺める。そして、隣のジュビリーが微妙に離れていることに気づくと、そっと自分からジュビリーに寄り添う。

レノックスの一件以来、ジュビリーとは距離が縮んだようであり、しかし依然としてぎこちなさがあった。彼は、キリエに寄り添う努力をしている。それはキリエにもわかった。歩み寄らなければ、二人は共に前へは進めない。彼らが目指す場所は、一人で行くには遠すぎるのだから。

翌日の未明、クレド城から一台の馬車がひっそりと旅発った。

御者は従者の姿に身をやつしたジョン。車内には商人の服装を着込んだジュビリーと、やはり商家の娘といった衣装のキリエが乗り込んでいた。端から見ると親子にしか見えない。キリエは、自らの格好を見て複雑な思いに駆られた。教会にいる時は、外の世界へ出たいと思ったことはなかった。だが、貧しくとも家族と共に暮らせる家庭に生まれていたら、と想像したことはあった。

ちらりとジュビリーを見上げる。彼は確か三四歳だといっていた。親子でもおかしくない年の差だ。そこでジュビリーが振り向いたので、キリエは慌てて適当に話しかけた。

「あ、あの……、伯爵は、ヒース司教にお会いしたことはありますか？」

「……彼が少年の頃、プレセア宮殿で見かけた。まだ、光を失う前だ」

「……そう」

ジュビリーは目を伏せるキリエをちらりと一瞥した。

「……まだ八歳か九歳ぐらいの頃か。物静かで、賢そうな子だった」
キリエは顔を上げるとプレセア宮殿の様子を思い返した。豪華絢爛で、本当に光輝く宮殿だった。宝石の名を冠するに恥じない堂々たる佇まいに、キリエは圧倒された。だが、その美しい宮殿ではどす黒い陰謀が立ちこめ、不義や密通、裏切り、嫉妬、復讐といった血生臭い事件の舞台でもあった。母やヒースは、そんな宮殿での暮らしを望んではいなかったはずだ。

そこで、ふと思った。ジュビリーの妻はどんな女性だったのだろうか。マリーエレンの言葉では、とても美しい女性だったという。だからこそ父エドガーは目を付けたのであろう。皮肉なことだ。だが、キリエは想像力を巡らせた。おそらく容姿だけでなく、心も純粋な女性だったに違いない。あのジュビリーを絶望させ、残りの人生を賭して国の転覆を決意させるほどの存在だ。キリエは、再び隣のジ

ユビリーをそつと見上げた。鋭い目。眉間に刻み込まれた皺。妻エレオノールがいた頃は、どんな表情を見せていたのだろう。キリエは不思議な胸騒ぎを押し隠し、馬車に揺られていた。

しばらくすると、ジュビリーは窓からそつと外の様子を窺い、ジョンに声をかける。

「ジョン。ルール軍の姿は」

「いえ……、まだ見かけません」

「気を抜くな」

「はい」

それから更に馬車を走らせると、やがて太陽が上り、辺りが明るさに満ち溢れ始めた。人家も増え、人々の姿がちらほらと見え始めた。

「……そろそろサーセンの市街地に入るぞ」

「はい」

キリエは固い声で返事を返す。そして、用意していた厚手のヴェールを被ると顔を隠す。

やがて馬車はサーセンに入った。窓を細く開き、ジュビリーが目を眇めて街の様子を窺う。インGRESほどではないが、活気に溢れた小ぎれいな街だ。だが、彼は不審げな表情で呟く。

「……人が多い」

「えっ」

「おそらく、インGRESを出てきた者たちも多いのだろう」

「……逃げてきたということ？」

「恐らくな」

キリエが身を乗り出して窓を覗きこむと、武装した兵士が目に入り、あつと声を上げる。

「あれは街の警備兵だ」

「そ、そう」

キリエの胸の鼓動が段々早くなる。その時、御者座のジョンが声をかけてくる。

「見えてきましたよ。サーセン聖堂です」

ジュビリーは、キリエに見えるよう窓を大きく開いた。天を突く尖塔に囲まれた聖堂のドームが現れる。キリエは今まで見たことがない巨大な聖堂に思わず感嘆の声を漏らし、両手を合わせた。

「ジョン、裏手へ回れ」

「はっ」

馬車は聖堂の前を走り抜け、裏手を目指す。さすがに聖職者の姿が多い。ジョンは辺りを窺うと、街路樹に馬車を横付けさせた。

「義兄上、キリエ様。すぐ出られるようにしておいて下さい」

ジョンの言葉に、キリエはドレスの裾を思わず握りしめた。ジョンは帽子を目深に被ると聖堂の裏門を見つめた。表に比べると人通りは少ないものの、それでも人目がある。しばらく待っていると人通りが途切れた。と、裏門から年輩の修道女が一人現れた。その瞬間、御者座から飛び降りたジョンは裏門へ疾走すると修道女の手首を掴んだ。

「ひゃッ！」

突然のことにびっくりした修道女が甲高い声を上げるが、ジョンが手で口を押さえる。

「ご無礼お許し下さい、修道女……！」

ジョンの囁きに、混乱しながらも修道女は耳を傾けた。

「私はトウリー子爵。我が主君、グローリア女伯レディ・キリエ・アッサーが、ヒース司教に目通りを願っております。何とぞお取り次ぎを……！」

キリエとヒースの名を耳にして、修道女の表情が変わる。眉をひそめ、年若い子爵を凝視すると、やがて慌てて頷く。ジョンが押さえていた手を離すと、修道女は声を低めて囁く。

「女伯は……、今どちらに？」

ジョンは馬車を振り返ると目配せした。中からジュビリーとキリエが現れると足早にジョンの元へ駆け寄る。修道女は興奮気味に辺りを見回すと、やがて「こちらです」と聖堂の中へ一行を引き入れ

た。

裏門を潜ると、一行は無言で中庭を突っ切り、聖堂内へ入る。入るとそこは身廊で、美しく装飾された柱が森のように林立し、聖堂の中心、内陣障壁に向かって熱心な市民たちが祈りを捧げているのが垣間見える。身廊の突き当たりの扉を開くと、司教たちの部屋が整然と並んでいる。扉のひとつの前で、修道女は辺りを伺いながら囁いた。

「こちらでお待ち下さいませ」

ジョンが頷くと修道女は深呼吸をひとつしてから扉を叩き、部屋へと入っていった。

「……会って下さるかしら」

キリエが不安そうに呟くと、ジョンが微笑みかける。

「はるばる会いに来た妹君を追い返すようなお方ではないでしょう」確かにそう思う。だが、自分の立場を考えると不安を拭いきれない。今現在、この国を支配しつつあるレノックスと敵対している自分と、ヒースは関わり合いたくないのではないか。彼に迷惑はかけたくない。拒まれたとしても、仕方がない。だが、それでも会いたい。

静かだった部屋の中から、低く抑えたざわめきが起こる。そしてサンダル音が聞こえたかと思うと扉が開け放たれる。

「……グローリア女伯？」

部屋から出てきたのは、年輩の司教だった。キリエはヴェールを外すと両手を合わせる。

「私が、キリエ・アッサーです」

そして、男性は後ろで控えているジュビリーに気づくとますます緊張した表情になる。

「……クレド伯爵でございますね」

彼はジュビリーの顔を知っているらしい。そして、扉を大きく開くと中へ招き入れる。

「……どうぞ中へ」

一行が静かに部屋に入る。部屋には大きな窓がいくつかあり、光に満ちた明るい室内だった。必要な物しか置かれていない質素な部屋の奥に長机があり、そこに一人の青年が逆光を浴びて座っている。キリエは早鐘のように打ち鳴らされる胸に手をやると、息を整える。「ヒース。……レディ・キリエ・アッサーと、クレド伯、トウリー子爵です」

年輩の司教が青年の耳元で囁くと、青年はすっと立ち上がった。そして、助けを借りてゆっくり長机の脇へと移動する。

キリエがゆっくり歩み寄る。青年は少し緊張した面持ちだ。キリエと同じ濃い栗毛。端正な顔つきだが、両目は固く閉じられている。毒の後遺症か、瞼はわずかに黒ずみ、目の下には青い隈が広がっている。そんな痛々しい顔立ちにも関わらず、ヒース・ゴーンには後光のような崇高な空気が醸し出されていた。

「……ヒース司教」

キリエがそつと呼びかけると、ヒースの頬がぴくりと引きつる。

「……キリエ。あなたですか」

少し低めの、落ち着いた優しい声。

「はい」

震える声で返事をする。ヒースがそつと両手を差し出すと、年輩の司教がキリエにその手を取るよう促す。腫れ物に触るようにキリエが恐る恐る両手に触れると、ヒースはその感触を確かめるようにそつと握りしめる。

「……こんなに、大きくなったのですね……」

ヒースが感慨深げに囁く。

「……あなたとお会いする機会がないまま、私は修行に入ってしまったいました。……会っておきたかった」

「……ヒース様」

ヒースはにっこりと微笑んだ。

「どうか兄と呼んで下さい。今まで会いに行こうとしなかった薄情者ですが」

言われてキリエは無言でヒースの胸にすがりついた。言いたいこと、聞きたいことはたくさんあったが、喉が締め付けられて言葉が出ない。

教会を出てから運命の激しいうねりに巻き込まれ、孤児だと聞かされていたはずなのにたくさんの「血縁者」が現れた。最初の一人は「遠縁」のジユビリー。そして彼の妹マリーエレン。「祖父」のベネディクト。「異母兄」のレノックス。「異母姉」のエレソナ。「従兄弟」のギョーム。

正直、誰を信じてよいのかわからなかった。自分との再会を喜んでくれたベネディクトは天に召された。姉のように慕っていたロレインは非業の死を遂げた。まるで、自分に関わる者は命を奪われるのが運命かのような仕打ちに、キリエは絶望していた。そして今、ずっと懂れていたヒース司教と出会うことができた。声を押し殺してむせび泣く妹の背中を、ヒースが優しく撫でる。

「よく来てくれました。食事と睡眠はしっかり取っていますか」

「……はい」

「安全な場所で暮らせていますか」

「……今は、クレド城に……」

「クレド……」

ヒースは妹の肩を撫でると背の高さを想像し、時の流れの速さを思った。

「……クレド伯」

首を巡らし、ヒースが呼びかけるとジユビリーが前へ進み出る。

「クレド伯ジユビリー・バートランドです」

キリエは涙を拭くと兄の胸からそっと離れた。

「あなたがキリエを女王に擁立しようとし、レノックスの軍と衝突したことは聞いています。その上で、あなたに確かめておきたいことがあります」

「……何なりと」

ヒースはジユビリーの声がする方向に向き直る。

「キリエは、王位を継承することに同意したのですか？　彼女は、女王になる意志が本当にあるのですか？」

ジョンが思わず息を飲むが、ジュビリーは正直に答えた。

「最初は私の独断でした。ですが、王位を継承するに値する人物はレディ・キリエをおいて他にいないことを理解していただきました」
「ほ、本当です。兄上、それは、本当です」

盲目のはずのヒースに射すくめられ、ジュビリーは黙って相手を見つめ返した。まるで心の奥底をまさぐられているかのような気分だ。ヒースは慎重な口調で囁いた。

「……キリエが本当に女王になることを望むのであれば、私は協力を惜しみません」

そこで言葉を切り、再び口を開く。

「実は先日、クロイツから非公式に使者が参りました」

「！」

ヒースの言葉にジュビリーたちは驚いた表情になる。

「先月、レノックスがムンディ大主教に戴冠を要請したとのことです」

「戴冠……」

キリエが顔を青ざめさせて呟く。

「もちろん、大主教は拒絶したそうですが……、使者の一人が啖呵を切って立ち去ったそうです」

これで、レノックスが正式に王になるまで時間が稼げる。キリエはほっとしたが、不安は残る。ジュビリーが腑に落ちない表情で口を開く。

「何故……、その情報が司教の元へ？」

ヒースがわずかに微笑む。

「大主教は、アングルの君主にふさわしい人物を捜すよう、私に命令じになりました。……私が、先王の血を引いているからでしょうか」

「……なるほど」

「エレソナがシャイナーから脱出しましたね」

エレソナの名を聞いてキリエは体を固くする。ヒースは眉をひそめ、記憶を辿った。

「可愛そうな子です。持つて生まれた人格のせいで、十二年もの長い年月を塔の中で過ごすことを強いられてきたのですから。しかし、あの子にも君主の器があるとは思えません」

そして目の前にいるはずのキリエに向かって尋ねる。

「キリエ。あなたはレノックスとエレソナに会いましたか」

彼女は即答できなかった。顔を歪め、何度も唇を開きかけ、そのたびに虚しく閉じる。が、やがて小さく呟いた。

「……レノックスには、会いました」

「……そうですか」

「ヒース司教」

ジュビリーがはつきりとした口調で呼びかける。

「今、この国の君主にふさわしいのはレディ・キリエです。その旨……、大主教にお伝え願えますか」

ジュビリーの言葉に、ヒースは控えめながらゆっくり頷く。

「……お願いがあります、クレド伯」

「はい」

「キリエと……、二人だけでお話をさせていただきますか」

キリエが顔を上げる。

「……もちろんです」

そう答えると、ジュビリーたちは部屋から退出していった。最後の一人が扉を閉めると、キリエが声をひそめて呼びかける。

「……もう、誰もいません、兄上」

「……キリエ」

ヒースが手を空中に延ばし、キリエがしっかりと握りしめる。

「正直に答えて下さい。あなたは、クレド伯を信頼していますか？」

少し驚くが、よく考えればヒースが最も心配していることだろう。そう尋ねるのも当然といえる。

「はい。伯爵は、何度も私の命を救ってくれました。……もちろん、私を女王にしたいがためというのもあるのでしょうか」

ヒースは見えない目を伏せ、まるでそこから本心を読みとれるかのように手を握りしめる。

「……色々ありました」

キリエは小さく呟いた。

「一度、何もかも嫌になってロンディニウム教会に逃げ戻ったことがありました。でも……、そのせいで、私を育ててくれたロレイン修道女が殺され……、私はレノックスに囚われました」

「何ですって」

ヒースの白い顔がますます青白くなり、かすれた声で尋ねる。

「……怪我は……」

「それは、大丈夫です。……伯爵が、連れ戻しに来て下さいました」

「……そうですか」

彼女が多くを語りたがらないことに気づいたヒースは、質問を変えた。

「あなたは……、本当に女王になる決意を固めたのですか？」

「……他にどうしようもありません」

キリエは諦めたように呟く。

「レノックスやエレソナに王位を継がせたくありません。エレソナには……、まだ会っていませんが。二人に王位を継がせないためには、私が女王になるしかないのです」

キリエの弱々しい声に、ヒースは身を乗り出すと声をひそめて囁いた。

「……キリエ。あなたさえよければ、ここからクロイツへ逃がしてあげることできます」

「！」

クロイツ。

キリエは体を震わせた。ロレインもクロイツへ行けば何とかなると考えた。そして、旅発つ前に凶刃に倒れた。もう、逃げることで

誰かが犠牲になるのはたくさんだ。

「大主教も、あなたを保護して下さいます。私も一緒に行きます」

「……ありがとう、兄上。でも、私はアンゲルを離れません」

少なからず驚いた表情でヒースが顔を上げる。

「私が本当に女王になれるのか、それは天の御心次第です。でも、私が逃げ出したらすべてはそこで終わりです。クロイツへ逃げたら

……、アンゲルの君主は誰がなるのです？ レノックス？ エレ

ソナ？ それとも、ガリアのギョーム王太子ですか？」

ヒースは眉をひそめ、じっと耳を傾けている。そして、しばらく沈黙した後、キリエは絞り出すように囁いた。

「……他の二人はともかく……、私、レノックスだけは、王になることを許しません……！」

「……キリエ」

ヒースは手を差し上げると、怒りで小刻みに震える妹の肩をぎこちなく撫でる。

「……彼と、何があったのですか」

そう尋ねられ、キリエは嗚咽を漏らした。言えない。ヒースにはまだ言えない。彼は辛抱強く待ったが、やがて苦しい表情で頷いた。

「……わかりました、キリエ。でも、よく考えて」

「……はい」

「レノックスは恐ろしい子です。無慈悲で、残酷で、罪深い……」。

私も身を持って知っています。ですが、王位を目指すということは、彼との対決を避けては通れません」

「……」

「そして、彼を倒して王位に就いたとしても、もっと強大な敵と戦うことになります」

キリエは涙を拭いながらヒースを見つめた。

「エスタドのガルシア王はアンゲル島とプレシア大陸の征服を目論んでいます。ガリアのギョーム王太子も、アンゲルの王位継承権

を持つ限り、アングルへの興味を失わないでしょう。それらの脅威に、あなたは一人で立ち向かわなければなりません」

一人。その言葉の意味をキリエは噛みしめた。が、それでも彼女の決意は変わることがなかった。今までは一人だった。でも、今は一人じゃない。泣きはらした目をしばたかせ、姿勢を正すと正面からヒースを見つめる。

「……私、伯爵と約束したのです。皆のために女王になると。もう逃げないって、約束したのです」

「……クレド伯と」

「伯爵だけじゃありません。私に関わって死んでしまった全ての人のために、私はもう逃げたくないのです」

キリエの言葉を聞き、ヒースは小さく溜息をついた。

「わかりました。もう……、決めたのですね」

「はい」

「ならば、私もできる限りあなたの力になりましょう。クロイツへ働きかけてみます」

キリエが安堵の表情を浮かべる。

「……ありがとう」

ヒースが寂しげに微笑む。

「私はレノックスによって視力を奪われました」

突然そう切り出され、キリエは面食らった。

「でも、両目と引き替えに私は生きながらえた……。盲目ならば王位を脅かさないだろうと、レノックスは命を狙うことをやめたのです。……暗闇は孤独です。でも、私の安住の地は、ここだったのです」

「……兄上……」

穏やかな口調ながら、語る内容はキリエにとって重い意味を含んでいた。

「あなたが教会を出たことで、世界は争乱に巻き込まれたかもしれませんが。でも、女王になることで争乱を鎮めることもできるはずで

す」

「はい」

「……ただ……」

ヒースはそう呟くと眉をひそめ、かすかに震える右手をかざした。「目が見えないことに、今ほど絶望したことはありません。……あなたの顔が、見たい」

キリエは、とっさに彼の手を取ると自らの頬にそつと導いた。ヒースは寂しそうに微笑むと、妹の頬を優しく包み込む。が、その顔が俯いたことに気づく。

「……キリエ？」

「……兄上」

妹は聞き取りにくいほど小さな声で呼びかけてきた。

「……本当は、怖いのです。女王になったら、私、どうなるのだろうって……」

ヒースは痛ましげに眉をひそめた。そして、キリエの肩を撫でるとそつと抱きしめる。

「自分の意思が何よりも大事です。あなたが望むものをはっきりさせれば、どうすれば良いか、何を成さなければならないのか、おのずとわかってくるはずですよ」

そして、声を低めて言葉を続ける。

「君主という立場が本当は孤独であることは、私も知っています。父上がそうでした」

父という言葉にキリエは顔を上げた。

「周りの誰も信じることなく、自分の力だけでこの国を守ってきたのです。多くの人々を傷つけてきた父ですが、この国は確かに父に守られてきたのです」

「わ、私も」

キリエがわずかに上ずった声で必死に囁く。

「私も、誰かを傷つけながら女王になるの？ そんなの、嫌です……」

……！」

「犠牲を払わずに女王になることはできませんよ」

兄の冷酷ともとれる言葉に息を呑む。だが、彼の言葉はもったもなかった。

「大事ななのは、あなたが自分の意思を持つことです。どのような女王になりたいのか、それをはつきりと思い描くことです。あなたの努力と周りの協力で、犠牲を最小限に留めることはできるでしょう」
キリエは兄の背中をぎゅっと抱きしめた。彼は優しく背を撫でると耳元で囁く。

「……長い道のりです。体には気をつけて」

「……兄上も」

ヒースは自分の額とキリエの額を触れ合わせ、小声で安全を願う祈りの文句を呟いた。祈り終わると彼が立ち上がろうとし、キリエはそっと手を添えた。ヒースがベルを鳴らすと、扉が静かに開いてジュビリーたちが入ってくる。

「クレド伯」

「はい」

ヒースはキリエに寄り添われ、ジュビリーに向き直る。

「キリエが女王になるために、できる限り協力します」

「……ありがとうございます」

深々と頭を下げる衣擦れの音が、ヒースの鋭敏な耳に聞こえる。

彼は一歩前に出ると微笑みかけた。

「伯爵、私の妹はどんな顔立ちですか」

「……レディ・ケイナを覚えておいでですか」

「ええ。何度かお見かけしたことがあります。穏やかで、静かで、お綺麗な方でした」

「そのままですよ。レディ・キリエは……、母親似です」

ジュビリーの言葉に、キリエは顔を赤くして彼をそっと見上げた。
「そうですか」

ヒースは満足げに微笑んだ。

「時の流れは早いですね。キリエ、あなたはお幾つになりましたか。」

「十三ぐらいですか」

「十四歳です」

十四という数字に、ジュビリーは顔をしかめて振り返る。

「私、誕生日がわからないから、聖ロンドンデニウムの祝祭日を誕生日としてお祝いしてもらっていたのです。六月で十四歳になりました」

「……そうですか」

背後でジョンが眉をひそめ、義兄を見上げる。

「伯爵、キリエをお願いします」

「……はっ」

やがてヒースはキリエを抱きしめて別れの挨拶をした。

「天のご加護を……」

「兄上も」

「充分気をつけてお帰りなさい。サーセンにも時々レノックスの軍がやってきます」

「はい。……ありがとうございます」

一行は静かに、しかし足早に裏門へ回ると馬車へ乗り込む。

「表は大丈夫です」

先ほどの修道女が緊張した顔つきで囁く。

「クロイツから情報が来れば、そちらへお知らせします」

「お願いします」

「兄上！ また参ります」

キリエが窓から身を乗り出すと抑え気味に叫ぶ。ヒースは穏やかに微笑むとそつと手を振った。ジョンが馬に鞭をくれると、馬車がゆっくりと動き出す。名残惜しげな表情のキリエが身を乗り出すが、修道女たちが辺りを伺い、顔を引っ込めるよう合図する。

ほんの数十分の逢瀬だった。キリエは、今になってもつと色んなことを聞いておけばよかったと悔やんだ。だが、きつとまた会える。次に会う時は人目を憚らず、堂々と会ってみせる。キリエにひとつ目標ができた瞬間だった。馬車の中で、まだ興奮冷めやらぬ表情で

窓から外を眺めているキリエにジュービリーが声をかける。

「……少しは話せたか」

「はい。本当に、少しだけですけど」

晴れやかな表情で返事が返ってくる。

「本当はもっと話したかったけど……。あのヒース司教と、兄妹として会うことになるなんて、今でも信じられません。……でも、会えてよかった」

嬉しそうに語るキリエを、ジュービリーは黙って見つめていた。

クレドには夕方に帰り着いた。まだ興奮気味のキリエは、マリー・エレンにヒースの印象や交わした言葉などを事細かに報告した。

「想像していたままのお兄様でしたか」

「はい。本当に……。本当に嬉しかった。あのヒース様に会えるなんて……。！」

キリエの明るい表情に、マリーは人知れずほっと胸をなで下ろした。二人の後ろでは、ジュービリーとレスターが小声で言葉を交わしている。

「サーセンはいかがでしたか」

「クロイツはヒースと連絡を取り合っているらしい」

レスターは眉をひそめ、両目を見開いてみせる。

「では……。大主教は……」

「アングルの王位継承戦争に関心があるのだろう。しかも情報源はヒースだ。キリエにも関心を持っているはずだ」

レスターは思慮深げに沈黙するが、やがて顔を上げ、そっと囁く。

「……タイバーンに放った斥候が戻ってまいりました」

その言葉にジュービリーが目を上げる。

「レディ・エレソナはタイバーンの城館で母親と再会したようですが、それからはまったく動きがないとのことですよ」

「十二年間塔に幽閉されていたのだ。体力も衰えているのだろう。」

「……シエルトンは？」

「マーブル伯もタイバーンに引きこもったままですが、マーブルから手勢を呼び寄せたようです」

「軍を呼んだ？」

「およそ百騎程だそうで……。城館の守りを固めるのが目的かと」

ジュビリーが何か言おうとした時、部屋に女たちの軽やかな笑い声が響いた。顔を上げると、キリエやマリーが屈託なく笑い合っている。こうして見ると姉妹のように見える。

「……伯爵」

思わずキリエたちを見つめるジュビリーにレスターが呼びかける。彼は静かに頷いた。

「……いつエレソナが王位を宣言するかわからん。目を離すな」

「はッ」

ジュビリーはシエルトンと面識があった。ジュビリーは地方の反乱を制圧した功績で廷臣として宮廷に出仕したが、シエルトンは当時貴族院の議員だった。家の格式からいえば、クレド伯爵家の方が歴史も長く、名門の家柄だ。しかし、地位や名誉といったものには興味がないのか、シエルトンは王の愛妾に手を出した。愛人アリス・タイバーンの移り気な性格を知っていたエドガー王は、見て見ぬふりをしていた。だが、それは宮廷の風紀を乱す原因となった。やがて、エレソナの事件が起るとアリスはタイバーンへ送還され、シエルトンも議員の職を解かれ、領地へと帰っていった。まさか王位継承戦争で、そのシエルトンと対立することになるなど想像もしていなかった。アリス・タイバーンにうまく乗せられたのだろうか。（いや。奴は本当の脅威ではない。あの娘……。エレソナ・タイバーンが十二年の年月でどう成長したか。それが問題だ）

ジュビリーは、異母姉の恐怖を記憶するキリエをじっと見つめた。

その日の晚餐は終始明るいものだった。キリエは憧れのヒースに会えたことで上機嫌だった。食事も終わり、礼拝堂で祈りを捧げて自室に戻ったキリエは、一日の疲れもあってすぐ床に就いた。しか

し、疲れすぎたせいかなかなか寝付けず、しばらくするとそつとベッドから抜け出した。

書き机の小さな蝋燭が心細い明かりを壁に投げかけている。キリエは蝋燭をそつと持ち上げると、壁に飾られている地図を見上げる。二ヶ月前は、この地図を見てロンディニウム教会まで逃げ帰った。人差し指でグローリアを押さえ、クレド、イングレス、次いでサーセンまでを指でなぞる。教会を出ることがなかった生活から一転、異母兄に追われる日々。世界は一気に広がったが、その広い世界で自分は生き抜くことができるのか。昼間の興奮が落ち着き、キリエは不安そうに地図を見つめた。やがて、しばらく地図を見つめていたキリエは、ぎょつとした。地図には、地名の上に各諸侯の紋章が書き込まれている。例えばグローリアは 青蝶 。クレドは 赤薔薇 。トゥリーは 榆 。ルールは 盾に心臓 。その数々の紋章の中に、 盾と斧 があつた。そうつと蝋燭を近づけると、 タイバーン と記されている。

十二年前、自分を殺そうとした異母姉、エレソナ・タイバーン。奇しくも姉は、自らの紋章である斧を使って妹を殺そうとした。

夢はみるものの、姉の資格好は覚えていない。だが、遠からず再会することになるだろう。共に王位を争うために。蝋燭の弱々しい明かりを顔に受けたキリエは、決して恐れ表情ではなかった。レノックスもエレソナも、恐ろしい兄であり、姉だ。だが、自分はもはや一人ではない。ジュビリーがおり、ヒースがいる。今日の旅で、自分は一人ではないと実感できた。

「……そうだ」

キリエはそつと蝋燭を取り上げた。ジュビリーに礼を言うておかなければ。キリエは、彼がいつも書斎で夜遅くまで起きていることを知っていた。

両手で蝋燭を捧げ持ち、暗い廊下をそろそろと歩くキリエ。壁の燭台はゆらゆらと踊り、調度品を浮かび上がらせている。上の階へ上がり、ジュビリーの書斎までやってくると、扉の下の際間から明

かりが漏れている。そつと扉を叩くが返事がない。もう一度、今度は力を込めて叩く。だが、返ってくるのは静寂だ。首をかしげ、キリエは思い切つて扉を静かに押し開いた。扉は音もなく開いた。

書斎には見事な絨毯が敷き詰められている。キリエがゆっくり中へ入ると、森のような本棚の間からジュビリーの後ろ姿が見えた。

腕組みをして何か考え込んでいるようだ。キリエはほつとして歩み寄ろうとしたが、ふと眉をひそめて立ち止まる。燭台に照らされたジュビリーの影が本棚に投げかけられている。だが、その影はよく見るとドレス姿の女性を象っている。キリエが息を呑んで凝視していると、影がすうつと透明になり、若い女性に変化した。彼女はこちらを振り向くとにつこりと微笑んだ。

「きゃッ！」

「！」

キリエが短い悲鳴を上げると、ジュビリーは机に立てかけていた剣に手を伸ばし、素早く振り返った。

「熱ッ！」

蠟燭が倒れてキリエの手を焦がす。ジュビリーは剣から手を離すと机の上に目を走らせ、ハンカチに水差しの水をかけるとキリエに駆け寄る。

「ご、ご、ごめんなさい……」

キリエがどもりながら震える声で呟く。彼女が取り乱す様子を久しぶりに見たジュビリーは、顔をしかめながら手をハンカチで押さえる。

「まるで幽霊^{ゴースト}でも見たような顔だな」

「……！」

キリエはますます顔を青ざめさせたが、ジュビリーはそれには気づかなかつたようだ。

「こんな時間に何をしに来た？」

「あ……」

キリエは、きちんとした理由があつてここへ来たはずなのにジュ

ビリーの邪魔をしに来たような気分になり、申し訳なさそうな表情になる。

「……疲れすぎて目が冴えたか」

そう言いながらジュビリーはキリエの手を取って椅子に座らせる。今ののは一体、何だったのだろう……。見間違いだろうか。そう思いながらも椅子に座り込むと、やっと落ち着いた様子で小声で呟く。

「……今日は、ありがとうございます」

何のことだと言わんばかりに、ジュビリーが片方の眉を釣り上げる。

「サーセンまで連れて行ってくれて、ありがとうございます。……本当に嬉しかったです」

それを聞いて、ジュビリーは珍しく口元をわずかにほころばせた。「今日は一日ご機嫌だったな」

「ずっと懂れていたヒース司教様……。こんな形で会えるとは思ってもみませんでした。兄上を見て、私もがんばらなくてはと……」

「無理はするな」

「は、はい」

キリエはそつと溜め息をつく、表情をゆるめた。

「私、今までずっと独りぼっちだと思っていました」

ジュビリーも目を細めてキリエを見つめた。普段に比べたらずいぶん穏やかな顔つきだ。

「……私の両親はどんな人だったのだろうか、ずっと思っていました。でも、できるだけ考えないようにしていました。どうせ、会えるわけがないのだと思っていたから……。私には家族も兄弟もいない。独りぼっちなんだって、言い聞かせていました。だから、私に会いに来る人なんかいなかった。ずっと来ないと思っていました。でも、伯爵が会いに来てくれて……。おじい様にも会わせてくれた。それから、私と血が繋がっている人がこんなにもいるとわかって……。何だか今でも信じられません」

そこでキリエは寂しげな表情をしてみせる。

「……レノックスみたいな兄弟もいるけれど……」

「……そうだな」

燭台の明かりが二人の顔を静かに照らす。少しの間沈黙が流れ、やがてキリエが顔を上げる。

「ありがとう、伯爵。私、もう独りぼっちじゃないわ」

「……キリエ」

「はい」

ジュビリーは引き出しから紙を一枚取り出すとペンを手にした。

そして、中央から左寄りの場所にKyrieと記す。

「おまえの母親はレディ・ケイナ。父親はエドガー王だ」

キリエの名の上に、Kaena、Edgarと記すと棒線を引き、キリエの名と繋ぐ。キリエが無言で身を乗り出して見守る。

「レディ・ケイナの父はベネディクト、母はエリザベス。ベネディクトの父はウィリアム、母はメアリー。メアリーの姉がソフィー。その娘がフラインセス。彼女とヘンリー・バートランドとの間に生まれたのが、私とマリーエレンだ」

様々な名前の最後に、JubileeとMaryellenの名が記された。キリエの顔に驚きと感動の表情が広がる。

「おまえにとつて私は、曾祖母の姉の孫というわけだ。……おまえと私の間だけでも、これだけの人間がいる。おまえは一人じゃない一人じゃない。」

ジュビリーの言葉は魔法の言葉のようにキリエの胸に忍び込んだ。ひとりじゃない。目の前に示された人々の名前がそれを証明してくれている。キリエは目を輝かせて名前を繋ぐ線をそつとなぞった。

「……ありがとう、伯爵」

かすかに頷いてみせるジュビリーに、キリエは少し恥ずかしそうに切り出す。

「これ……、いただいてもいいですか？」

「持っていけ」

「ありがとう」

満面の笑みを浮かべて呟くキリエを見ると、ジュビリーは立ち上がった。

「おまえも今日は疲れたはずだ。早く休め。……部屋まで送る」
「はい」

素直に立ち上がるキリエの手を取るとジュビリーは書斎を出た。彼の温もりを感じながらキリエは黙ってついて歩いた。薄暗がりの中でキリエはそっとジュビリーを見上げる。そうだ。思えば彼は常に自分の側にいる。初めて出会った時に、「おまえの身は私が守る」と言ったのは嘘ではなかった。口数も多くな、決して優しい言葉や態度ではないが、不器用ながらキリエを守り、支えている。二十歳もの年の差のある少女を相手に、大変な努力をしているに違いない。繋いだ手をそっと握るとややあつて静かに握り返してくるキリエは嬉しそうに微笑んだ。夜中のクレド城は静かに二人を包み込んでいた。

やがてキリエの寝室まで来ると彼女はもらったばかりの家系図を胸に、深々と頭を下げた。

「おやすみなさい、伯爵」

「早く寝ろ。普段、あまり眠れないのだろう？」

「……夢さえみなければ……」

「体調には気をつけろ」

「はい」

ジュビリーが背を向け、立ち去ろうとした時。キリエは思い切つて口を開いた。

「……ありがとう、ジュビリー様」

「……」

途端に顔をしかめて鋭く振り返るジュビリーに、キリエは飛び上がって謝る。

「ごっつ、ごめんなさいっ！ で、でも、あの……！」

顔をしかめたまま見つめてくるジュビリーに、キリエは恐る恐る切り出した。

「……私、ずっと、そのお名前でお呼びしたくて……。とても、素敵な名前だから……」

ジュビリー
歡喜。

彼は自分に不似合いなこの名前が大嫌いだった。だが、それを言えどキリエは悲しむだろうし、こうしてせつかく歩み寄ろうとしている彼女を拒むことになリかねない。しばらく複雑な表情で見つめていたジュビリーだったが、怯えた目で見つめ返してくるキリエに根負けした様子で小さく溜め息をついた。

「……言つたはずだ、敬称を付けるなど。呼びたいなら、ジュビリーと呼べ」

最初、ぽかんとした表情をしていたキリエだが、やがて生真面目に「はいっ」と返事を返す。

「おやすみなさい。……ジュビリー」

「……おやすみ、キリエ」

キリエは嬉しそうに微笑むと頭を下げ、部屋へ入っていった。扉が閉まる音が石造りの廊下に響く。一人取り残されたジュビリーはふと思った。

ジュビリーと呼ばれるのは何年ぶりだろうか、と。

第2章「タイバーンの雌狼」第3話（前書き）

兄ヒースと出会い、女王に即位する決意を新たにしたキリエ。だが、姉エレソナにも動きが。

第2章「タイバーンの雌狼」第3話

クレドから遠く離れた地、タイバーン。豊かな田園地帯が広がるクレドやグローリアとは違い、そびえ立つ山脈に挟まれた溪谷だ。冬は厳しい寒さに襲われるが、夏は爽やかで景観も良いため、古くから王族の避暑地となっていた。アリス・タイバーンは避暑に訪れたエドガー王に見初められて愛妾となり、女子爵に叙せられた。

谷を見下ろす城館には、規模に不釣り合いなほどの警備が配されている。その中庭で、痩せ細った少女が似合わぬ武器を手に丸太に打ちかかっている。

鋭利な鋌が埋め込まれた鎚矛メイスを握る手は白く、青い血管が浮き上がっている。少女は息を荒らげると歯を食いしばり、再び丸太に打ち込むが重さに耐えかねて手からメイスが転がり落ちる。両手で膝を押さえ、乱れた息を整える。無造作に束ねられた美しいプラチナブロンドの長い髪が肩に流れ落ち、呼吸に合わせて上下している。少女の背に、男が声をかける。

「あまり無理をなさるとお怪我をいたしますよ、エレソナ様」

「うるさいッ……」

かすれた声で言い返すエレソナに、シエルトンはずかしく眉をひそめる。

「……十二年だ……」

エレソナは肩で息をし、項垂れたまま悔しそうに呟く。やぶ睨みの瞳を眇め、端正な顔つきまでもが歪む。

「十二年の間……、あの塔に閉じこめられていた……。十二年だ！ 十二年という時間を奪われたのだぞ！ 早く、取り返してやらねば……！」

「お気持ちはお察しいたしますが、筋力をつけるにもお体を養ってから……」

「貴様にわかるかッ！ あの退屈極まりない塔で過ごした十二年が

……！」

叫びながら勢いよく体を起こしたエレソナだが、一瞬放心したような表情になったかと思うとそのまま真後ろに倒れる。

「！」

とつさにシエルトンが頭を支えて抱き抱える。

「エレソナ様ッ！ ローザ！」

シエルトンが怒鳴ると庭に面した渡り廊下からローザ・シャイナ―が飛び出してくる。エレソナの細い体を抱き上げると、シエルトンはローザに医師を呼ばせた。寝室まで運ぶ間、小言ひとつ言わないシエルトンエレソナがぼんやりと見上げる。

エレソナは四歳までプレセア宮殿で育てられていたが、母アリスがエドガー王から拝領したインGRES市内の私邸と行き来する生活をしていた。その私邸にアリスは堂々とシエルトンを引き入れ、王との間に生まれたエレソナと共に時を過ごしていた。手の付けられない乱暴者だったエレソナを、シエルトンは体を張って遊び相手を務めていた。彼女にはその記憶があった。まるで男児のように手加減なしで取っ組み合いを挑んでくるエレソナに、シエルトンはいつも笑顔で応戦していた。

エレソナが細い手を伸ばしてシエルトンの顎髭をまさぐり、本人が迷惑そうに見下ろす。

「……母上は老いた。おまえは変わらない。……何故だ？」

「……何故でしょうなあ」

シエルトンは苦笑いしながら寝室へ入る。ローザが寝具を整え、医師が冷たい飲み物などを用意している。医師は簡単な処置を済ませると退出していった。その間、ローザは無言でエレソナの世話をしていた。

「シエルトン」

「はい」

シエルトンは寝台の縁までやってくると座り込む。

「これからどうするのだ」

「エレソナ様の体力が回復されたら、マールへお連れします」

その返答にエレソナは首を傾げた。

「そなた……、家族はいなかったか」

「いしましたが、離縁しました」

エレソナが口をつむぐ。シエルトンは自虐的な笑みを浮かべ、目を細めた。

「エレソナ様が幽閉されてから妻を離縁し、ずっと母君とあなたをお待ちしておりました」

エレソナは眉をひそめ、再び天蓋に目を向ける。

「子どもは」

「おりませんでした」

「……そうか」

天井を向いたまま、エレソナが低く呟く。更に何か言おうとして口を開きかけた時、忙しげな足音が響くと一人の女が寝室に飛び込んできた。

「エレソナ！ 大丈夫なの？」

「母上」

エレソナに似たプラチナブロンドの美女は心配そうに寝台へ駆け寄ると娘の手を握った。

「せっかく無事に帰ってこられたのだから、お願いよ、おとなしくしていてちょうだい……！」

やや取り乱した様子のアリス・タイバーンの肩に、シエルトンが無言で手を添える。

「早く……、力をつけたいの」

「エレソナ」

アリスは娘の前髪をかき揚げ、丁寧に撫で付ける。娘に似て全体的に細身の体。エレソナが老いたと感じたのは、頬が痩けたからだ。かつては張りのある若々しい美貌を誇っていたのを、エレソナは幼心に覚えていた。しかし、痩せても持つて生まれた美しさと気位の高さは変わらないらしい。

「わかるわ。あなたは私にそっくりだもの。この十二年、どんなに絶望し、どんなに悔しい思いをしたのか……」

そして、開け放たれた窓から恨めしそうに溪谷の風景を眺める。

「イングレスを追放されてから、この何もない谷に追いやられて十二年……。長かったわ」

「ここには……」

エレソナが虚ろな声で呟く。

「武器もあるし、馬もいるし、言葉を交わす人間もいる。時と共に姿を変える溪谷もある」

アリスは思わず涙ぐむと娘の首に両腕を巻き付けた。

「……そうね。あなたはもっと辛い時を過ごしていたものね。ごめんなさい」

しばらく黙り込むエレソナの耳元に、アリスが小さく呟く。

「……もう少しよ。充分に準備をしてから、行動に移すの。あいつらに……。思い知らせてやるのよ。私たちに、何をしたのか」

母に抱かれ、軽く目を閉じていたエレソナは、やがて薄く目を開ける。寝台の脇では、何か胸に秘めた様子のシエルトンがじっと見つめている。

「そうだわ。この指輪をあなたに返すわ」

そう言うときアリスは体を起こし、袂から柔らかい布の包みを取り出した。エレソナがそっと受け取り、包みを開ける。すると、金の指輪が光を放つ。タイバーン家の紋章である斧の形に彫られたルビィ。エレソナは目を見開いた。

「あなたが生まれた時に、エドガーがあなたに贈ったものよ。彼は生まれた庶子に全てルビーの指輪を作らせたの。あなたにはタイバーンの斧。レノックス・ハートには心臓。ヒース・ゴーンには車輪。キリエ・アッサーには蝶。あなたが幽閉された時、指輪だけこのタイバーンに送りつけられたわ」

エレソナは、母の言葉には上の空で指にはめた指輪を見つめていた。

「あの頃は……、本当に生きた心地もしなかったわ……。あなたがどこでどうしているのか、全くわからなかったのだから……」

そう囁いてアリスは涙ぐみながら娘の髪を愛おしそくに撫でる。そして、頬に唇を押し付けてからエレソナをまっすぐ見つめた。

「エレソナ。たった今、私の子爵位をあなたに譲るわ」

その言葉にエレソナが顔を上げる。

「これからあなたは王位を宣言するのよ。爵位がなければ格好がないわ」

「……格好など」

エレソナは再び指輪を見つめた。正直、王位などに興味はなかった。だが、奪われた十二年間に報いてやらねば気がすまない。自分にこんな仕打ちをした王家へ復讐したい。女王になることは、ひとつの手段に過ぎない。指輪の精巧な模様を指でなぞると、エレソナは思い出したように顔をしかめる。

「……あれはどうしている」

シエルトンがわずかに身を乗り出す。

「あれとは……？」

「私が殺しそこなった、末っ子の妹だ！」

荒々しく吐き捨てる娘を、アリスは息を吞んで見つめる。

「……グローリア女伯キリエ・アッサーは今、遠縁に当たるクレド伯の元へ身を寄せております。二ヶ月前に王位を宣言しましたがルール公に攻め込まれ、撤退しています」

シエルトンの冷静な説明に、エレソナの眉間に鋭い皺が刻まれる。

「あの娘……、あれからどうなったのだ？」

「キリエ・アッサーはあれから祖父の手によって教会に預けられたそうです。……孤児として」

孤児という言葉にエレソナが振り向く。

「何故……、孤児として預けられたのだ」

「身分を隠すためでしょう。グローリア伯は、ルール公が多くの異母兄弟を葬っているのを知って怯えておりましたからな」

「……なるほど」

しばらく黙り込んでいたエレソナは、目を細めて窓から見える景色を眺めた。

父王の愛情を独占していた妹。それ故、母に対する寵愛が薄れ始めていたことも、幼いながらもエレソナは感じ取っていた。自分と同じように妹へ嫉妬を覚えていた者がいた。それが、当時七歳だった異母兄レノックスだ。気の強い者同士、レノックスとエレソナは仲が悪かった。だが、キリエに対する嫉妬心については、気持ちに通じるものがあつた。エレソナがキリエに襲いかかつていなければ、代わりにレノックスが襲っていたに違いない。エレソナは、美しくも残酷だった腹違いの兄を思い返した。

十二年という時を経て、異母兄妹たちがついに戦う時が来た。たったひとつの王座を巡り、血を分けた兄妹たちが争う。父は、果たしてこんな時代が来ようとは予想しなかったのだろうか。まったく迷惑な父親だ。エレソナは顔をしかめた。

負けてなるものか。奪われた時間を取り戻すまでは、自分は決して退かない。エレソナは自分に言い聞かせると、細い指にはめられた盾と斧の指輪を見つめた。

プレセア宮殿の宝物殿の一室で、レノックス・ハートは宝器を前に沈黙していた。

王冠、王錫、宝珠。目映い大小色とりどりの宝石が散りばめられたそれらは、手を伸ばせば簡単に触れることができる。だが、今のレノックスはそれらを手にしても何の意味もなさない。彼は無表情で宝器を見下ろしていた。レノックスの精悍な顔には、痛々しい傷痕が残されていた。目の下から鼻へ一筋の刀傷。あの日、ジュビリーに斬りつけられたものだ。

クロイツのムンディ大主教は戴冠を拒んだ。それはすでに予測していたことだ。だが、戴冠しない彼に周りが予想以上に冷やかだつたことがレノックスを焦らせた。皆、自分の残虐さに恐れをなし

ていることに違いはない。だが、宮殿を守る近衛兵のほとんどが職務を放棄し、ルール軍がその役割を受け継いでいる。

イングレスの市民たちも沈黙を守っているが、冷血公を怒らせない程度にしか服従の様子を見せない。有力な商人たちはイングレスを出るか、もしくは冷静に政局を見守っている。中には父王エドガーが残したままの債務を取り立てに来る剛の者もいる。気の短いレノックスも、必要以上に敵を作るわけにもいかず、彼らとうまく交渉を続けている。

しばらく無言で宝器を見つめていたレノックスの背後から足音が聞こえてくる。やがて、その音は真後ろで止まる。

「公爵」

オリヴァー・ヒューイットだ。

「タイバーンは未だに沈黙を続けています。城館から出る様子はありません」

「……あの娘が、幽閉を解かれるだけで満足するわけがない」

レノックスはそう呟くと、振り向いた。

「必ず王位を宣言するはずだ。アリス・タイバーンも健在なのだろう？」

「はい。マーブル伯にシャイナーを襲わせたのも彼女ではないかと」

「……タイバーンとクレド、目を離すな」

「はっ」

レノックスは王錫の柄をそつと撫でる。

（戴冠さえできれば、皆私を認め、従わざるを得ない。戴冠さえすれば……！）

黙っているながらも、その心中をありありと想像できるヒューイットは、眉間に皺を寄せたまま主君を見つめていた。

（庶子であろうと、王になっしまえば誰にも文句は言わさぬ。誰にも……）

レノックスは広大なルール公領の領主だが、それは父エドガーが叙位したことで拝領したものだ。長い歴史を持ち、格式も高いジユ

ビリーのクレド伯爵家やキリエのグローリア伯爵家とは違う。そのため、ただの庶子に過ぎないレノックスに対する反感も強いと言える。それが彼を焦らせていた。ヒューイットは、その焦りが何よりも不安だった。

「……公爵」

「何だ」

「まだ、時間はございます」

ヒューイットの言葉にさっと振り返る。相変わらず狡猾そうな表情のヒューイットは、辛抱強く囁いた。

「焦ってはいりません。ゆっくり、着実に攻略しましょう」

レノックスは、眉間に皺の寄った表情から徐々にいつもの冷笑を浮かべた。

真夜中のイングレス郊外。イングレス港から離れた海岸に、不審な小舟が乗り付けられていた。小舟を降りた数人の男は物音を忍ばせ、港に面したベイズヒル宮殿へと向かった。宮殿の裏門が開いている。男たちは無言で忍び込むと、人気のない厨房の裏口で蝋燭を持つ男を見つけた。

「……誰にも見られてはいないな？」

低い呟きに男たちは頷き、袂から手紙を取り出すと相手に手渡す。

「ご苦労だった。おまえたちはここで待て」

蝋燭を持った男、ロバート・モーターは男たちをその場に残し、宮殿の奥へと進んでゆく。その顔は浮かないものだった。

王太后ベル・フォン・ユヴェーレンは寝室に明かりを灯し、椅子に座り込んでいた。扉が小さく叩かれると、待ちかねたように立ち上がり、扉を開ける。

「お待たせいたしました、王太后」

モーターが恭しく頭を下げるのを、ベルは苛々した様子で部屋に引っ張り入れる。

「ユヴェーレンからの密使は？」

「ここに手紙を」

ベルはモーティマーの手から手紙をひつたくと貪るように目を通す。が、やがてそれは失望の表情へと変わる。

「……父王陛下は何と？」

父王とはベルの父親、ユヴェーレン王オーギュストのことだ。ベルは悔しげに目を閉じ、呟く。

「……カンパニユラとの戦いが続いていて、アングルにまで手が回らぬそうよ」

薄情な父親だ、とモーティマーは胸の中で呟く。

ユヴェーレンは、十年前にオーギュスト王がけしかける形で隣国カンパニユラと戦争状態に入った。初期の戦闘でカンパニユラ王エンリケがユヴェーレン軍に囚われ、無惨に殺されたことでカンパニユラは絶体絶命の危機に陥ったが、夫の遺志を継いだ王妃フランチエスカが軍を率いるや息を吹き返し、現在も一進一退の戦争状態にある。フランチエスカは実質的な女王として、今もユヴェーレンと戦っている。

それにしても、娘をアングルから受け入れることぐらいはできるだろう。オーギュストとしては、アングルの王位継承戦争に巻き込まれたくないため、今しばらく様子を見るつもりか。

（まあ、いい）

モーティマーは人知れず胸を撫で下ろした。ユヴェーレンもカンパニユラも、自分たちの争いで手一杯。アングルの内戦につけ込む余裕はないらしい。

更に手紙を読み進めたベルは眉をひそめた。気分を害したというより、腑に落ちないといった表情だ。

「……ガリアのリシャル王が」

予想もしていなかった人物の名前に、モーティマーも顔をしかめる。

「息子から逃れるためにアングルに向かうつもりだそうよ」

「……何ですと？」

露骨に顔を歪めてモーティマーが聞き返す。

「このままガリアに留まれば王太子に殺されてしまう。そうなる前にアングルへ……」

「何故アングルなのです？ マーガレット王妃はすでに亡く、義兄に当たるエドガー王も崩御されております。アングルは彼を救済する義務も義理ありません。それに、今はそれどころでは……」

「うまく使えば良いのよ」

ベルの一言にモーティマーは啞然とする。彼女は策士らしい笑みを浮かべ、モーティマーを見上げる。

「敗残の王と言えど、リシャールは手ぶらでは上陸するまい。要はプレセア宮殿を奪回できれば良い。冷血公の留守を狙えば、できないことはないわ」

「しかし、リシャール王がそのままアングルに居座り、王位を篡奪するようなことになれば……」

その言葉に対し、ベルは鋭い目でモーティマーを睨み付ける。

「構わないわ。汚らしい妾腹どもに比べたら、よほどいいわ……！」

（……女め……）

モーティマーは心中で毒づくと思わず天を仰いだ。

「モーティマー。ガリアへ行き、リシャール王と接触して参れ」

「な……、簡単に申されても！」

モーティマーは慌てて向き直る。

「王太后、私があくまでルール公から命じられたあなた様の監視係であることを、お忘れにならないで下さい！ ガリアまで行けと申されても……」

「一日あれば、ホワイトピークから船でガリアへ渡れる。そこをうまくやるのがそなたの仕事よ」

勝手なことを言う王太后を、モーティマーはうんざりしたように見つめる。

元よりこの女はアングル人ではない。所詮異国の王女だ。嫁ぎ先

の国を誰が治めようと関係ない。自らの身が安全ならば。

だが、ベルの場合はまったく同情できないわけではなかった。ユヴェーレンからはるばる嫁いだにも関わらず、夫は次々と愛人を作り、子を生ませた。やっと一粒種である嫡男が誕生したのも束の間、十歳という幼さで亡くしてしまった。ベルがアングルに対して冷淡になるのも、無理からぬことだった。

「……わかりました」

仕方なくモーティマーは承諾した。

「やってみます」

「頼むわ」

ベルは目を爛々と輝かせ、熱っぽく囁いた。

「今ではそなたしか頼る者がいない……。わかるでしょう？」

そう囁きながらモーティマーの腕にそっと手を絡めるが、本人はさりげなく手を脇へ押しやる。

「……くれぐれもルール公に感づかれぬよう」

冷たく乾いた声で囁き返すと、モーティマーは一礼して寢室を後にした、残されたベルは、まるで辱めを受けたかのような顔つきで唇を噛みしめた。

モーティマーは暗い廊下を重い足取りで進んでいった。

自分は何だ。冷血公の奴隷か？ 王太后の間諜か？ いつから自分はこんな腑抜けになった。愚王に仕えていた頃を懐かしく思う日が来ようとは……。モーティマーは、心まで闇に吞まれようとしていた。

秋の乾いた風が、涼しさを通り越して薄寒く感じ始めた。クレド城の大広間では、数人の楽士たちが優雅な旋律を奏でていた。大広間の中央では、顔を引きつらせたキリエがジョンを相手に、危なっかしい足取りでダンスのステップを練習している。

「もっと力を抜いて、キリエ様」

マリーエレンが苦笑しながら声をかける。

「余計な力が入ると思うように体を動かさせませんよ」

「そうですよ。私の足なら大丈夫。踏まれようが蹴られようが……」
ジョンの言葉にかえって緊張したキリエの足がジョンの脛を蹴る。
「痛……！」

「きゃあッ！ ご、ごめんなさい、ジョン！」

脛を押さえて蹲るジョンに、背後からマリーが痛烈な言葉を浴びせる。

「蹴られても大丈夫なんじゃなかったの？ ジョン」

とは言え、キリエの靴は先の尖った流行の型だ。キリエが半分泣き顔で訴える。

「私、駄目だわ。ダンスなんかできない」

「しかし、女王に即位されれば宴席が増えますよ」

「大丈夫ですよ。兄に比べたらキリエ様は飲み込みが早いものですもの。焦ることはありませんわ」

マリーの、妙に説得力のある言葉にキリエは思わず振り返る。確かに、ジュビリーはダンスが得意そうには見えない。だが、あの完全無欠に見える男に不得手なものがあるということが微笑ましい。

「……上手じゃないの？」

「はつきり申し上げて下手です」

マリーのにべもない言い方にキリエが思わず吹き出す。つられて一同が笑い声を上げた時、音合わせをしていた楽士たちが一斉に沈黙した。キリエがぎよっとして振り返ると、ジュビリーとレスターが大腿にやってくる。

「……ジュビリー？」

「キリエ」

ジュビリーの固い声はその場の空気を引き締めた。

「タイバーンが動いた」

短くそう告げられ、キリエは思わず息を呑んだ。

タイバーンに動きあり　の報はプレセア宮殿にも届けられた。

レノックスはすぐにも軍を起こそうとしたが、ヒューイットが押し留めた。

「むやみに相手を刺激すれば、無用の争いを引き起こします。まずは我が様子を見てまいります」

戦いと名の付くものなら何でも喜んで駆けつけるレノックスだが、自らの立場を考えると渋々ながら同意した。

「モーティマーを連れていけ。万が一のときめにな」
「はっ」

こうしてヒューイットとモーティマーはわずかな手勢を率いてタイバーンへ向かった。だが、イングレスの郊外に差し掛かった時、宮殿から伝令が追ってきた。

「サー・オリヴァー！　サー・ロバート！　クレドにも動きがあったそうです！」

「クレドが？」

ヒューイットが顔をしかめる。

「この機に乗じて挙兵するつもりか」

「まさか。あの修道女が許すとは思えぬ」

モーティマーの言葉にヒューイットは声を上げて笑う。

「おめでたい奴だな！　クレド伯がキリエ・アッサーの意向を汲む行動をすると思ってたか！」

「とにかく、動いたことは確かだ……。私はクレドへ向かう」

「頼んだぞ。俺はこのままタイバーンへ向かう」

元より行動を共にするつもりのないヒューイットは、手綱を引くと馬を走らせた。残されたモーティマーはヒューイットたちを見送ると、子飼いの部下たちを連れてクレドへ向かった　と見せかけ、彼が取った進路はクレドではなかった。

モーティマーたちは沈黙のまま馬に鞭打ち、必死にある方角をめがけて走りに走った。やがて、彼らの目に港町が見えてくる。アングルとガリアを結ぶ玄関口、ホワイトピークだ。

イングレスからホワイトピークは、馬を急がせば一時間で辿り

着くことができる。モーティマーはすでに連絡をつけていた小型の帆船に乗り込むと、一路ガリアへ向かった。

タイバーンの様子を見てくるよう命じられた時、ガリアに潜入するのは今しかない。モーティマーは思った。かねてから準備を進めていたが、ついにガリアへ向けて出航した。もう後には退けない。

ちょうど昼時に出航した船は、帆に風を受けて海原を進んだ。秋の冷たい海風に晒され、モーティマーは複雑な心境で海上の波を見つめた。こちらが放った密偵が首尾良く手筈を整えていれば、ガリアのクーレイ港近くでリシャル王が待っているはずだ。

（……私は、逆賊か……？）

モーティマーの思い詰めた表情を海風が撫でてゆく。王太后に命じられるまま、異国の王がアングルへ侵入しようとするのを手伝うのは、売国行為か。彼の虚ろな目は何も捕らえていなかった。君主不在のアングルは、そのままモーティマーの心でもあった。目標も、希望も、心の拠り所もない彼は、すでに立ち止まることすら自分の意志ではできないほど荒んでいた。

少し陽が傾き始めた空を見上げる。ガリアはクーレイ港近くの寂れた漁村。とある荘園領主の別荘の玄関先で空を見上げた男は、別荘へ続く小道の先に数人の男たちの姿を認めた。

「……早いな」

男は呟くと、視線を動かさないまま傍らに控えていた従者に命令を下す。

「陛下にお伝えしろ。アングルからの使者が到着したと」

従者は頷くと踵を返した。やがて玄関先までやってきたモーティマーは男に向かって一礼した。

「ロバート・モーティマーと申します。王太后ベル・フォン・ユヴェーレンの使者として参りました」

「遠路はるばるご苦労であつたな。私はアンジェ伯爵アルマンド・バラだ。少し休むがよい」

「いいえ、時間が惜しい故」

「そうだな」

バラは頷くとモーティマーたちを招き入れた。モーティマーは疲労の入り交じった目でアンジェ伯バラをそつと伺う。明るい栗毛を短く刈り込み、髭もきれいに整えてある。軽装ながら鎧を身につけているが、服装や立ち居振る舞いなどから、なかなかの洒落者に見えた。

バラはモーティマーたちを広間へ案内した。広間へ入ると、奥の椅子に簡素ながら上質な衣装を身につけた男が座り、その両脇を数人の男が控えている。

男はやせ衰え、白髪が目立つ灰色の髪、落ち窪んだ瞳の奥には疲労の色が見える。だが、痩身を起こし、姿勢を正したその姿は確かに威厳があつた。ガリア王リシャール・ド・ガリア。息子に背かれ、国を二分する争いの渦中にある人物である。

「……アングルより参りました。ロバート・モーティマーと申します。拝謁を賜り、恐悦至極に存じます」

モーティマーは跪くと恭しく頭を下げる。

「……ご苦労」

しゃがれた声で短く答えるリシャール。ついで目を眇めて言葉を接ぐ。

「……アングルも王位継承を巡って国が乱れておるそうだな」

「はっ」

「そなたは王太后の使者ということだが……」

「現在私はルール公から王太后の監視係を命じられておりますが、本日参上いたしましたは、王太后の命でございます。……ルール公はアングル王の器にあらず、と仰せです」

しばらくじつとモーティマーを凝視していたリシャールは溜息を吐き出し、椅子にもたれかかった。

「レノックス・ハートか」

疲れ切った表情のリシャールは、まるで昔を懐かしむかのような

口調で呟いた。

「勇猛な戦士であることに間違いはない。だが、奴は獣だ」

獣。レノックスを一言で表現するのにこれほど適切な言葉はないだろう。モーティマーは疲れた笑みを浮かべると共感の意を表した。「戦略上、彼とは何度も衝突した。奴は戦いを楽しんでた。楽しみを増やすために戦争を長引かせようとしたのだ。……エドガーも厄介な男を寄越したもののよ」

苦々しげに吐き捨てるリシャールに、モーティマーは静かに頷いてみせる。

「それで、王太后は何をお望みだ」

「……陛下は、近々機を見てアングルへ上陸を検討なさっていると聞きいたしました」

リシャールは顔を歪めて笑った。

「……そういうことにしておこう」

「王太后はルール公の留守を狙い、陛下にプレセア宮殿を襲撃していただきたいと」

バラがかすかに表情を変える。リシャールは顔をしかめた。

「……プレセア宮殿を占拠できたところで、予にどうしろと？」

「後は……、陛下のお好きなように」

モーティマーの言葉に側近たちは顔を見合わせた。リシャールは体乗り出すと相手の顔を凝視した。

「王太后は、何を望んでおるのだ」

「とにかくルール公を排斥したい、と。リシャール王が協力していただけるのであれば……、アングルを差し出しても構わぬと」

「その代わりガリアを諦めよと申すかッ」

思わず大声で一喝するリシャールだったが、モーティマーは動じなかった。跪いたまま、上目遣いで異国の王を射るようにつめる。「アングルを手中にし、態勢を整えた後、ガリアへ派兵して王太子殿下から国を奪い返す方法もありましょう。一国の王にとどまらず、両国の王を名乗ることも、不可能ではありませんせぬ」

「……恐ろしいことを言う奴よ」

リシャルはそう嘯いたが、その表情には笑みが浮かんでいた。背を丸め、手招きしてモーティマーを側へ呼ぶ。

「できるのか、そのようなことが」

「冷血公への反感は日毎に高まっております。イングレスの市民も表面的にしか服従しておりません」

「なるほど」

「しかし、もちろん綿密な作戦と準備が必要です。密に連絡を取り合わなければ……」

「わかった」

リシャルは自信に満ちた顔つきで背筋を伸ばした。

「まずは検討してみよう。イングレスの様子を逐一報告するがよい」
「はッ」

モーティマーは再び平伏した。

別荘を出て港へ帰ろうとするモーティマーを、アンジェ伯バラが呼び止めた。

「サー・ロバート」

荒んだ表情のモーティマーは、わずかに眉間に皺を寄せてバラを見返した。

「何でしょう」

「アングルには、ルール公以外の勢力があるはずだ。今のところ、脅威と言える勢力はどこかな」

「脅威と申しますか……」

モーティマーは口ごもった。

「ルール公に反発する者は大勢います。組織立った動きをしているのは……、今のところグローリア女伯ぐらいでしょうか」

バラは眉をひそめた。

「以前は修道女だったという、ルール公の異母妹か」

「冷血公と修道女……。国民がどちらを望むか、おわかりでしょう」
モーティマーが溜息まじりに呟くのを、バラは思案げに見つめる。

「しかし、修道女が王位継承に名乗りを上げるとは……、俄かには信じがたい」

「自発的に王位宣言をされたのではなく、女伯の後見人が教会にお迎えに上がったのです」

バラが目を眇める。

「後見人？」

「クレド伯です」

「クレド伯というと……、あのロングボウ隊の……」

「はい」

バラはジュビリーとは面識がないながらも、彼が率いているロングボウ隊の噂は耳にしていた。

「なるほど。では、王位継承戦争はルール公とグローリア女伯の一騎打ちか」

「それはまだわかりませぬ。先日、もう一人の王位継承権者であるレディ・エレソナ・タイバーンが幽閉先から脱出しました。遠からず、王位を宣言するでしょう。しかし、評判は芳しくありません」

「何故だ」

モーティマーは薄ら笑いを浮かべて肩をすくめて見せる。

「四歳にして、異母妹グローリア女伯を殺そうとしてエドガー王陛下に幽閉されています」

その言葉にバラは両目を見開くと同じように肩をすくめる。

「恐ろしい娘だ」

「国民からの支持は得られないでしょう」

「では……、国民はグローリア女伯の即位を望んでいると？」

根掘り葉掘り聞き出そうとするバラに、モーティマーはようやく不審の目を向けた。だが、本当のところは、バラが何に興味を持っているようがどうでもよかった。

「……国民が真に望んでいることは、争いが終わることですよ。アンジェ伯」

「そうだな」

バラは笑顔を見せるとモーターの肩を叩いた。
「アングルまでの道中、充分気をつけて帰ることだ」

「何てことだ」

オリヴァー・ヒューイットは苦虫を噛み潰したような顔つきで吐き捨てた。

タイバーンを出発した軍勢は、一路マーブル伯領へと向かっていたが、そのマーブル城から出迎えの行列が何十マイルも続いていたのだ。それを見たヒューイットは慌ててイングレスへ早馬を送った。
「マーブルを根拠地に、いよいよ王位を宣言するか……」

珍しく焦りの表情でヒューイットは呟いた。レノックスが軍を派遣し、到着したとしても一体どうすれば……。プレセア宮殿の実権を握っているとは言え、レノックスの立場は砂の城のように脆い。

そんな今、エレソナ・タイバーンと戦争状態に入れば、クレドのキリエ・アッサーがイングレスへ侵入しようとするだろう。ヒューイットが考えあぐねていると、部下が馬を走らせてくる。

「サー・オリヴァー！ イングレスからの部隊が間もなく到着しますが、タイバーン側にも気づかれたようです！」

「何だと」

「タイバーン軍の殿と接触したようです……！」

ヒューイットは慌てて馬の手綱を引くと部下に導かれるまま現場へ急ぐ。やがて前方の平原から人々の怒号や武器が触れ合うざわめきが耳に入ってくる。

「……遅かったか！」

すでに一部の部隊が小競り合いを始めている。

「退け！ 退くのだ！」

勝手に戦闘を始めれば、内戦が一気に拡大する。ここは腰抜けと揶揄されても戦闘を切り上げて退却しなければならない。

「サー・オリヴァー・ヒューイットとお見受けする！」

「……！」

一人の騎士から叫ばれ、彼は顔をしかめて顔を上げる。周りの騎士たちは剣と楯で揉み合っている。

「ルール公はいかなる理由で我らに牙を剥く？ 理由を述べよッ！」

「間違いだッ。我らに攻撃の意思はないッ」

「白々しい。これだけの軍勢を呼び寄せておきながら……」

「話にならん。退却だッ！」

ヒューイットの部下たちが退却を叫び、ようやく部隊が後退しようにとした時。背後から騎馬隊が現れた。

「待て！」

先頭の騎士が呼ばわると、兜を脱いだ。

「そなたがオリヴァー・ヒューイットか」

ヒューイットは目を疑った。マーブル伯ジェラルド・シエルトン。「ちょうどいい。そなたには証人になってもらおう」

「証人？」

狼狽たえた表情のヒューイットを尻目に、シエルトンの後ろから華奢な騎士を乗せた馬がゆつくりと現れる。白銀の甲冑に金色の外^{サイ}衣を羽織った騎士は、兜のバイザー越しにしばしヒューイットを眺めると、やおら兜を脱いだ。

「なっ……！」

兜から光り輝く美しいプラチナブロンドが流れ落ちる。エレソナ・タイバーンはヒューイットをやぶ睨みの目で凝視した。

「……エレソナ・タイバーン……！」

譫言のように呟くヒューイットに、シエルトンが鋭く言い返す。

「口を慎め。タイバーン女子爵である」

「……子爵だと」

ヒューイットは顔をしかめる。では、母親の爵位を譲り受けたというのか。エレソナは薄い唇に冷笑を浮かべた。

「おまえがレノックス・ハートの腰巾着か。帰って兄に告げるが良^い。アングルの女王は私だと」

「！」

その瞬間、タイバーン軍が一斉に鬨の声を上げる。剣や槍を天に突き上げ、大音声でエレソナの名を叫ぶ軍を前に、ヒューイットは顔を歪めて怒鳴り返す。

「十二年もの間幽閉されていた小娘が君主とは呆れるわッ！ 自分の立場をよく考えるがよい！」

ヒューイットの罵声にも、エレソナは動じなかった。

「貴様も立場を考えるがよい。今貴様がやるべきことは、軍を率いてイングレスへ戻り、兄上に報告することだ。タイバーンの異母妹が王位を宣言したとな」

「無駄なことを……！ 王位はすでにルール公が……」

瞬間、エレソナが両目を見開き、一喝する。

「黙れッ！ さっさと往け！ ぐずぐずしていると、貴様の首をそのままプレセア宮殿に送りつけるぞッ！」

周りのタイバーン兵たちも騒ぎ立て、ヒューイットは唇を噛み締めると手綱を引き、自らの部隊に怒鳴った。

「退却だ……！」

ヒューイットは今一度エレソナを一瞥すると、軍を退却させた。

「見事な王位宣言です」

シエルトンが低い声で呟く。エレソナはふんと鼻を鳴らすと苛立たしげに目を伏せる。

「よく吠える犬だ」

そう吐き捨てるとエレソナは顔を上げ、鬨の声を上げる軍勢を見渡した。見上げれば大空が広がり、どこまでも続く地平線が目映る。以前では考えられなかった雄大な光景に、エレソナは笑みを浮かべた。

「これからだ」

エレソナの呟きにシエルトンが振り返る。

「これからは、自分の手で、足で、何でもできる」

「はい」

待っているがいい。プレセア宮殿の王座にしがみついている異母

兄よ。クレドで身を隠している異母妹よ。エレソナは拳を突き上げて軍の歓声に応えた。

タイバーンへ放った斥候がクレド城に帰還した。城のアプローチで報せを聞いたジュビリーは表情を曇らせ、重い足取りでキリエの私室へと向かった。

私室では、キリエが落ち着かない様子でジョンと低く言葉を交わしている。ジュビリーが入ってくると、キリエが椅子から立ち上がる。

「……ジュビリー」

不安そうなキリエに頷いてみせると、ジュビリーはキリエに椅子に座るよう促す。

「タイバーンの雌狼が王位を宣言した」

雌狼。ジュビリーの表現にキリエは眉をひそめたが、これ以上の表現はないだろうと思われた。

「タイバーン女子爵を名乗ったそうだ。母親のアリスが爵位を譲ったのだろう。甲冑姿で騎乗のまま王位宣言し、オリヴァー・ヒューイットを罵倒して退却させたらしい」

キリエが唇を噛み締め、顔を伏せた。レノックス同様、ヒューイツトもキリエにとっては許しがたい男だ。レノックスに襲われた際、彼が投げかけた嘲りの目が脳裏から離れない。

「……エレソナは、今……？」

「マーブル城に入城したそうだ。これからは、そこが根拠地となるだろう。本格的に王位継承戦争に参戦することになる」

キリエは眉をひそめたまま低く呟く。

「レノックスはもちろん王位を認めない……。このままだと衝突は避けられないわ」

「今はまだ大丈夫だ。斥候の報せでは、レノックスの支配も表面上に過ぎん。地盤がしっかりしていないうちは、全面的な衝突は、レノックスの方が避けたいはずだ」

キリエは顔を曇らせ、遠く離れた兄と姉を思い、溜め息をついた。力なく立ち上がると、ゆっくりと歩き出す。その先には、アングル全域を描いた見事なタペストリーが壁一杯に飾られている。タペストリーを見上げ、視線を漂わせるとマーブルの地を探し出す。マーブルはタイバーンに比べるとややイングレス寄りの位置だ。クレドやグローリアからは離れている。

アングルが君主不在の内戦に突入してから三ヶ月。お互いの動きを牽制し合い、今は不気味な沈黙が流れている。いつ衝突が起こるか分からない中、不安を最も抱いているのはアングルの国民だ。キリエは胸が痛んだ。国の発展を願い、豊穡を祈り、人々のささやかな幸せに奉仕する修道女だったはずの自分が、争いを引き起こしている。

（どうすれば……、争わずして王位を継承し、国を安定化させることができるの……）

自らに問いながら、それが甘い考えだということは頭ではわかっていて。だが、それ以上どうすればいいのか、何をすべきかわからないことがキリエを不安にさせた。

「キリエ」

いつの間にか背後にやってきていたジュビリーに名を呼ばれ、体がびくりと跳ねる。

「おまえは皆の希望だ」

希望という言葉にキリエはぞくりとした。ジュビリーの顔を恐る恐る見上げる。

「冷血公も、タイバーンの雌狼も、国民は君主に望んではないい。

おまえは最後の砦だ。それを、忘れるな」

「……はい……」

かすれた声で返事を返すと、キリエは再びタペストリーを見上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3391z/>

女王キリエ

2012年1月5日23時27分発行